

人類学博物館紀要 第 23 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要
第 23 号

南山大学人類学博物館

平成 17 年

南山大学人類学博物館紀要第 23 号

正誤表

| 頁 | 段 | 行 | 資料番号 | 誤 | 正 |
|----|---|----|---------|-------------------------|-------------------------|
| 9 | 左 | 29 | | 製作 | 制作 |
| 13 | | 2 | | 95 items | 88 items |
| 21 | 左 | 33 | | 綾部恒夫 (監) | 綾部恒雄 (監) |
| 24 | 右 | 7 | JC-0130 | 形態：径 15.8cm、重さ 0.8kg | 形態：径 15.8cm、重さ 1.3kg |
| 29 | 左 | 26 | JC-1148 | 曲げ細工 | 曲物細工 |
| 34 | 左 | 19 | JC-0315 | 袋の部分 L28.6cm (柄 19.0cm) | 袋の部分 40.0cm×30.0cm (×2) |
| 34 | 左 | 20 | JC-0315 | 肩にかける部分 W10.0cm (二つ折) | 肩にかける部分 W10.0cm (×2) |

目 次

| | |
|--------------------------------|----|
| 巻頭言 | 1 |
| ラジオ史と当館所蔵のラジオ (図版 01～13) | 2 |
| タイ西北部山地に暮らす人々 (図版 14～35) | 14 |
| ー上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より②ー | |
| 叩き技法を用いた土器作り | |
| ー西北タイ Lawa 族の土器作り資料の紹介を通してー | 40 |
| 図版 01～32 | |

巻頭言

博物館資料は誰のものか？

最近、1冊の本を読んだ。朽木ゆり子さんという人の書いた『パルテノン・スキャンダル』（新潮選書）という本である。副題に「大英博物館の「略奪美術品」とあるとおり、現在大英博物館の「パルテノン・ギャラリー」に展示されているギリシアのパルテノン神殿から持ち込まれたレリーフなどの彫刻の数々について、その「略奪」された経緯や正当性、そして現在のギリシア政府からの返還要求と大英博物館の対応を追った刺激的な内容である。

似たようなケースは世界各地で起きているが、いずれも植民地時代の負の遺産である。日本にも植民地としていた朝鮮から「略奪」した美術品や文化財が、一部の公的機関に收藏されており、部分的には返還されているが未だ完全にではない。

植民地という支配・被支配の関係がはっきりした状況において、支配者が被支配者の文化的遺産をその土地から持ち出し、自分の国において公開するというのは理不尽な行為であるし、それに対して返還要求が起こることもまた当然のことといえるだろう。しかし、博物館に携わる者としては、これを他人事と考えるべきではない。そこで問われているのは、博物館・美術館の收藏資料とは一体誰のものなのか、ということだからである。

このことは特に、美術品・考古資料・歴史資料・民族資料において重大な問題であろう。あえてここで4つの資料に限定したのは、比較的近い過去に属する民俗資料・生活資料や、人間の世界に帰属しない自然史系の資料に対しては、それほど大きな抵抗がないからである。言い換えれば、ある民族・ある国・ある共同体にとって、自らの歴史に関わると考えられた資料ほど、自分たちのものであると意識されるからである。B.アンダーソンは名著『想像の共同体』の中で、国家に対して人びとが帰属意識を再生産していくために博物館が必要であることを指摘しているが、まさにこのケースがそうであろう。しかし、一方で全人類を代表しているかのような顔をして、世界の文化遺産を収集・展示しようという姿勢にはある種の傲慢を感じざるを得まい。

議論が広がりすぎたが、要は博物館にとって資料とは何か、否、博物館がコレクションを核として成立するものであるのならば、博物館とは何か、という問いかけとして考えたいのである。

日本では地方自治体が各行政単位レベルで博物館を持っていることが多く、おそらくはそこにその土地の文化遺産が收藏・展示されていることについては、抵抗感がないばかりか、当然のことと思うであろう。それに対し、大学の博物館のように研究資料として収集されたものが、そのまま研究の成果の公開という形で收藏・展示される場合にはどうだろうか。実際にある大学では、かつてその大学で調査した考古資料を地元で資料館を建てるから返してほしい、という要請を受けている。

博物館資料に限らず、文化遺産といわれるものは本来、こうした両義性を帯びた存在なのである。そして、そのどちらが強く打ち出されるかは、まさにその状況によるのである。そして、この状況の振幅が、博物館の存在自体に揺さぶりをかけているものといえよう。世界的にみれば、この状況とはポスト・モダン、ポスト・コロニアリズムである。

こうした状況に博物館はどう対応していくのか？それについては今、結論が出るものではないだろう。しかし、博物館にとってコレクションがもはや自明のものではない、そういう時代にいるのだという自覚と危機感がなければいけないと思うが、どうだろうか？

人文学部助教授 黒沢 浩

A brief history of radio in Japan
—A view from the radio collection in the Nanzan Anthropological Museum—

ANDO Saori

In this report, a brief history of Japanese Radio that commemorated its 80 years anniversary this year is described.

Following the first broadcasting in the United States by KDKA station of Pittsburgh in 1920, Japan welcomed its first radio station called “*Tokyo-Hosokyoku*” in 1925. The popularity of the radio was then accelerated through the change of radio devices from *Kouseki-shiki* (crystal set) to *Shinku-kan* (vacuum tube set) and the latter soon became a necessary requisite to catch air-raid alarms even during the wartime.

After the war, such a private radio station as “*Chubu-Nippon-Hoso*” (founded in 1951) increased the number of radio-listeners over 10 million in the following year and the fashion led to the Golden Age of radio in the late 50s. Another key factor was the appearance of a more reasonable and convenient transistor radio developed by *Tokyo-Tsushin-Kogyo* (present “Sony”), which soon replaced the old *Shinku-kan* type.

Although the leading role of the radio was on the verge of crisis through the diversification of media and entertainment in 60s, especially with the rise of TV broadcasting, the start of frequency moderation (FM) radio in 1969 again boosted the use of radio, because of its much-sophisticated sound quality. Current style of listening becomes more diverse -- the appearance of community radio stations offer vivid information within each town and city even in the time of disaster, and a new type of FM listening is developing among wide generations using the latest multifunctional mobile phones.

ラジオ史と当館所蔵のラジオ

安藤 さおり

はじめに

今年、平成 17 (2005) 年は、日本でラジオ放送が開始されてちょうど 80 年という節目の年に当たる。昨年から、この紀要では当館所蔵の家電製品を紹介しているが、今年はその中からラジオにスポットを当て、その歴史とともに紹介することとした。

1. ラジオの始まり

現在のラジオ放送技術は、イタリアのグリエルモ・マルコーニ (Guglielmo Marconi) が 1895 (明治 28) 年に無線電信の実験に成功したことが出発点である。以来様々な無線の利用法が研究され、その中の一つがラジオ放送であった。無線での音声放送を世界で初めて実現したのは、元エジソン社技師であったカナダ生まれの電気技術者レジナルド・フェッセンデン (Reginald Fessenden) である。1900 (明治 33) 年に最初の通信テストに成功し、1906 (明治 39) 年 12 月 24 日には、アメリカ・マサチューセッツ州の自分の研究所の無線局から、自らのクリスマスの挨拶や蓄音機の音楽、バイオリン演奏と歌などを大西洋に向けて電波に乗せた。これらを受信した船舶の通信士たちの驚きはいかほどであっただろうか。

現在と同じような、大衆に向けたラジオ放送が始めて行われたのは、1920 (大正 9) 年 11 月 2 日にアメリカ・ペンシルヴァニア

州ピッツバーグで放送開始した KDKA 局だと言われる。同日が開票日であった大統領選挙の開票速報を伝えた。

日本で初めてラジオ放送が一般に公開されたのは、大正 11 (1922) 年に上野で開催された平和記念東京博覧会である。東京朝日新聞社が、京橋の本社と博覧会場にラジオの送受信機を設置し、博覧会の会期中レコードなどによる実験放送を流して好評を博した。その後、当時各地で開催されていた博覧会や展覧会でラジオの実験放送が行われている。日本で初めて認可を受けて放送を開始したのは、社団法人東京放送局 (現在の NHK 東京放送局) である。大正 14 (1925) 年 3 月 1 日に東京・芝浦の東京高等工芸学校内に設けた仮送信所から試験放送としての放送を開始し、逓信省の検査合格を経て同 3 月 22 日から仮放送を開始している。一般的には、これをもって日本最初のラジオ定期放送とするのが定説であり、現在 3 月 22 日は放送記念日となっている。この日の放送内容は以下のとおりである。

9 時 30 分

海軍軍楽隊演奏

指揮 佐藤楽長 (海軍軍楽隊)

一、クラリネット独奏

ラウンド「幻想曲 マリタナ」

二、ホルン独奏

ウェーバー「歌劇 自由射手」より

「カヴァティナ」

10 時

司会 新名直和常務理事

一、挨拶 後藤新平総裁

二、報告 岩原謙三理事長

三、祝辞 犬養毅通相（代読）

（上に続いて 10 時 34 分から）

海軍軍楽隊演奏

一、絃楽四重奏

チャイコフスキー

「アンダンテ・カンタビレ」

二、管絃楽

マーケー 東洋風曲「キスメット」

三、管絃楽

ビゼー 歌劇「カルメン」抜萃曲

11 時 30 分

ニュース（読売新聞社提供）

11 時 51 分

新日本音楽演奏

箏：宮城道雄 吉田恭子 新谷喜恵子

牧瀬喜代子 時田初枝

笙：田辺尚雄

尺八：吉田晴風 谷富加志

一、宮城道雄「さくら変奏曲」

二、宮城道雄「秋の調」

三、宮城道雄「薙露調」

四、宮城道雄「舞踏曲」

13 時 30 分

ニュース（東京日日新聞社提供）

14 時

ソプラノ独唱

唄：レーヴェ ピアノ伴奏：萩原英一

一、ワグネル 歌劇「タンホイザー」

中の エリザベートの抒情調

二、

（イ）シューベルト「糸紡ぐグレチヘン」

（ロ）シューベルト「小夜楽」

（ハ）シューベルト「いづこ」

三、ブラームス「永遠の愛」

四、ヴォルフ「園丁」

五、チャイコフスキー

「早くも忘れられて」

六、シュトラウス「献身」

14 時 40 分

哥沢

唄：哥沢芝金

三味線：哥沢芝勢以

一、「薄墨」

二、「淀」

19 時

ニュース（東京毎夕新聞社提供）

19 時 30 分

常磐津 「乗合船恵方万歳」

唄：常磐津松尾太夫 常磐津弥生太夫

常磐津松重太夫

三味線：常磐津文字兵衛 常磐津文字助

常磐津菊丸

四重唱 ベートーヴェン作

歌劇「フィデリオ」第一幕目中の

クワルテット

マルチェリーナ（ソプラノ）武岡鶴代

レオノーレ（アルト）斎藤英子

ヤクイノ（テナー）沢崎定之

ロッコ（バス）矢田部頸吉

三重唱 歌劇「フィデリオ」

第一幕目中の「よし、よし、子供よ」

武岡鶴代 斎藤英子 矢田部頸吉

三重唱 歌劇「フィデリオ」

第二幕目中の「勇気をつけて」

斎藤英子 沢崎定之 矢田部頸吉

四重唱 ヴェルディ 歌劇

「リゴレット」中のクワルテット

武岡鶴代 斎藤英子 沢崎定之

矢田部頸吉

二重唱 ヴェルデー 歌劇「魔笛」

中の二重唱

武岡鶴代 矢田部頸吉

以上、各ピアノ伴奏：榊原直

20時55分

天気予報

(日本放送協会：1965a：pp.80-81)

この当時は、ラジオが聴ける設備を設置した場合、政府の管轄する通信局から「聴取無線電話私設許可書」を得る必要があった。3月1日時点での聴取契約数は約3,500台で、聴取料^(註1)は月額2円(本放送開始時より1円)であった。また、当時のラジオのうち7割を占めていたのは鉱石式受信機(鉱石ラジオ)である。鉱石式受信機とは、検波器に方鉛鉱や黄鉄鉱といった鉱石を用いた受信機のこと、受話器を耳に当てて放送を聴いた。残り3割が真空管ラジオであった。国産第一号のラジオは鉱石式受信機で、現在のシャープの創業者である早川徳次が、アメリカ製の鉱石式受信機をもとに作ったものである。

そして同年7月12日には愛宕山(現在はNHK放送博物館の所在地)に完成した新局社から本放送を開始した。この年には名古屋放送局と大阪放送局も開局し放送を開始したが、翌15年にはこの3局が一つとなって社団法人日本放送協会が発足した。当時は受信機の性能が低かったために故障が多く、ラジオの修理が出来るラジオ店も少なかった。三都市の放送局はそれぞれの市内にラジオ相談所を設け、受信機の修理や購入の相談を行っていた。その間にも、各地に放送局を開設し、昭和6(1931)年

には第二放送も開始された。

この頃のものと思われるラジオが図版01-01で、交流用真空管の開発によって生まれた交流式ラジオである。それ以前の真空管ラジオは乾電池や蓄電池を使わなければならなかったが、これは家庭の電灯線が利用出来て便利であり維持費も安くなったため、ラジオの普及が促進された。キャビネットの上に乗っている半円形のものがスピーカーである。これはドイツ製だと思われるが、同じタイプのもは日本でも作られている。前出の早川徳次が昭和4年に作った交流式真空管ラジオである。同じように木製のキャビネットで、その上にはスピーカーが置かれている。「シャープデザイン」と名付けられ、海外にも輸出された。やがて、スピーカー内蔵型のラジオが作られるようになり、高能率の真空管の発達によって、ラジオは小型化されていく。三角頭の「ミゼット型」と呼ばれるものがそれである。

放送開始当初は約3500台であったラジオ受信契約数も、昭和7年には100万台、昭和12年には300万台を超え、娯楽の主役となっていった。

初のラジオドラマは、小山内薫が演出を手掛けた「炭坑の中」である。小野宮吉、山本安英らが出演した約23分間のドラマで、大正14(1925)8月13日に放送された。

初めてのスポーツ中継は昭和2(1927)年8月13日に甲子園で行われた全国中等学校優勝野球大会で、大阪放送局が放送したものである。これがきっかけとなって昭和5年から8年を中心に野球中継が人気を博し、早慶戦をヤマ場に東京六大学野球が積

極的に放送された。

昭和 3 (1928) 年には、ラジオ体操も始まった。これは、昭和天皇即位の大礼記念事業として始まったもので、国民の健康増進に役立たせようとする通信省簡易保険局の意図により計画されたものである。11 月 1 日から東京放送局のみでスタートし、昭和 4 年 2 月 11 日の紀元節からは全国で放送されるようになった。その後昭和 6 (1931) 年には「ラジオ体操の歌」(作詞：小川孝敏 作曲：堀内敬三) が発表され、昭和 7 年 7 月 21 日からはラジオ体操第二が始まり、昭和 14 (1939) 年からはラジオ体操第三も放送された。しかし、これらは現在のラジオ体操とは異なったものである。昭和 21 (1946) 年に制定された新ラジオ体操第一から第三を経て、昭和 26 (1951) 年に現在のラジオ体操第一、翌 27 年にラジオ体操第二の放送が開始された。現在の「ラジオ体操の歌」(作詞：藤浦洸 作曲：藤山一郎) も三代目であり、昭和 31 (1956) 年に発表されたものである。

2. 戦争とラジオ

戦局の進行とともに放送に対する規制が厳しくなっていった。昭和 11 (1936) 年 2 月 26 日に起きた、いわゆる二・二六事件の際に、戒厳司令部から反乱兵に向けた「兵に告ぐ」が放送されたことをきっかけに、ラジオは社会的地位を高めた。また、政府や軍部が積極的に放送を政治に利用するきっかけともなった。放送事業は無線電信法(大正 4 (1915) 年制定、昭和 25 (1950) 年廃止) に基づき、逓信大臣から許可を受けて行われていたものである。放送の設備

も運営も通信省が監督するものであった。そのため、政府や軍部の介入はたやすいものであり、統制や検閲を受けていたのである。日中事変以降は、戦況ニュース速報を中心に、ニュースの回数や時間が増加した。昭和 14 (1939) 年 11 月には無線通信機器取締規定が制定され、外国の短波放送を聴くことの出来る全波受信機(オールウェーブラジオ)などの取り締まりが強化された。戦時中には、短波受信機を持っているだけでスパイであると噂された。

受信機にも統制は及んだ。昭和 13 年 1 月、日本放送協会は放送局型受信機を制定した。これは、民需資材統制による資材不足もあり、ラジオ部品の規格を統一することで、出来るだけ少ない資材で性能がよく廉価なものを普及させることを目的に制定されたものである。より質の良い受信機の普及を目的とした認定制度は昭和 3 (1928) 年 4 月から実施されていたが、それを発展させた制度と言える。はじめはなかなか浸透しなかったが、昭和 12 年に 300 万台であった聴取契約数も太平洋戦争直前には 630 万台となり、徐々に普及していった。当館には昭和 17 年に白山無線電機(現クラリオン) が作った放送局型 123 号受信機がある(図版 01-02)。左下の隅には出荷検査に合格した証として「放送局型受信機之証」の文字とナンバーが記された標章が貼り付けられている。

長く続いた第二次世界大戦の敗戦は昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日、昭和天皇による「玉音放送」によって国民に知らされた。前日の午後 9 時と当日の午前 7 時 21 分に「陛下の放送を聴くように」という旨の放送があり、多くの国民がラジオに向かうこ

ととなる。玉音放送の後半では、和田信賢アナウンサー（戦時中は放送員と言った）による経過説明や「終戦の詔書」の朗読があり、国民はこれによって放送の真意を知ったとされる。

戦後はGHQによって放送制度の民主化が進められることとなり、社団法人日本放送協会はGHQの管理・監督下に置かれた。戦前に放送局型として生産されていたラジオは、普及型の受信機として、新たに「国民型」と呼ばれるものが昭和21（1946）年に制定された。戦争の影響を受けて落ち込んでいた真空管や受信機の生産が軌道に乗ると、GHQからの勧告を受け、より性能の高いスーパーヘテロダイナ方式のラジオが生産されるようになった。また真空管業界においても昭和23年にはGT管が、翌年にはMT管が国産されるようになり、ラジオの小型化が可能となった。終戦によって短波放送受信も解禁となったため、全波受信機の生産も再開された。一方で、ラジオ受信機はメーカー製品を購入するよりも、真空管などの部品を買い集めて自作したほうが安かったために、受信機を製作する人も多かった。図版02-08も自作のラジオである。寄贈者の話によると、これは昭和25年頃に自ら設計を行い、部品・パーツ・キャビネットなど設計に応じて買い揃えて作ったもので、当時としては市販のものより高性能であったとのことである。電器屋でも、メーカーの製品を売るほかに、自ら作ったラジオを売ることも多かったようである。

3. ラジオ黄金時代

昭和25（1950）年、「電波法」「放送法」

「電波監理委員会設置法」の電波三法が制定された。これによって、日本放送協会が社団法人から特殊法人に変わると同時に、民間企業による放送事業参入が認められるようになった。これを受けて民間放送16社に初めての予備放送免許が与えられ、昭和26年9月1日午前6時30分、名古屋の中部日本放送が日本初の民間放送としてラジオ放送を開始した。

昭和27年には受信契約数が1000万台を突破し、ラジオ黄金時代を迎えた。この年から放送されたラジオドラマ「君の名は」は、毎週木曜日の20時30分から放送され、銭湯の女湯がガラ空きになると言われるほどの人気番組であった。映画も大ヒットし、主人公のスタイルを真似た「真知子巻き」が大流行したほか、「君の名は雛」や「君の名は羊羹」が登場するなど社会現象にまでなった。昭和28年にはテレビ放送が始まったが、まだまだ茶の間の主役はラジオであった。この頃の受信機が図版01-03である。八欧無線（現富士通ゼネラル）が作ったもので、マジックアイが用いられている。マジックアイとは、同調を取る時にメーター代わりに使用した蛍光表示の真空管デバイスのことである。しかし、いくら真空管が小型化されたからと言って、真空管式のポータブルラジオを小型化するには限界があったし、真空管式のラジオは電池の消耗が激しかった。それが解決されたのは、トランジスタの出現によってである。

4. 多様化するラジオ界

昭和30（1955）年、東京通信工業（現ソニー）は日本初のトランジスタラジオ

(TR-55) を 18,900 円で発売した。トランジスタは真空管に比べて小さいため、より小さな受信機を作ることが可能となった。また、真空管の 20 分の 1 の電力で済むため、電池の寿命が飛躍的に延びた。決して安いものではなかったが、1 インチ 1 万円といわれたテレビよりも購入しやすいこともあり、若者を中心に広がった。それ以前のもは箱型の大きなものが多く、茶の間の箆笥の上などに置かれ、家族で楽しむことが多いものであったが、小型になることで持ち運びもでき、一人一台というパーソナル化の方向へと向かった。

昭和 32 年に同社から発売されたポケットブルラジオは当時世界最小のラジオであった。当館所蔵の最も古いトランジスタラジオは、ソニーが昭和 35 (1960) 年に 13,900 円で発売したものである (TR-813、図版 01-06)。真空管ラジオは昭和 40 年頃までは作られていたが、次第に姿を消していった。当館所蔵のものでは、昭和 38 (1963) 年に東芝から 3,800 円で発売された「かなりや KS (5YC-491、図版 01-08)」やトリオ (現ケンウッド) から 9,950 円で発売されたもの (AF-252、図版 02-01)、昭和 39 年に発売されたオンキヨー製のもの (OS-195、図版 02-03) が最晩期の真空管ラジオである。ラジオの小型化によって、若者の個人聴取が増え、ラジオ放送が深夜にまで及ぶようになった。住宅事情が好転し、個室を与えられる子どもが増えたり、受験戦争が激化して深夜にまで学習時間が及ぶようになったことも大きい。昭和 30 年代初めには大半の放送局は午後 10 時から 11 時には放送を終了していたが、昭和 30 年代半ばになると深夜 0 時過ぎまで放送を行う局が増え、

昭和 40 年代になると 24 時間放送が行われるようになるのである。

深夜放送の元祖は、昭和 34 (1959) 年に始まったニッポン放送「糸居五郎のオールナイトジョッキー」である。月曜日から金曜日、深夜 2 時から 4 時までの生放送であった。その後、昭和 42 年には、現在まで続いているニッポン放送の「オールナイトニッポン」や大阪・毎日放送の「MBS ヤングタウン」がスタートするなど、数々の伝説的な番組やパーソナリティを排出した。

(NHK 放送文化研究所：2001a：pp616-617)

一方欧米から遅れること約 10 年、昭和 30 年代に FM (Frequency Modulation：周波数変調) 放送の実験も始まった。FM 方式はアメリカのエドウィン・ハワード・アームストロング (Edwin.Howard. Armstrong) が考案したもので、1934 (昭和 9) に実験を始め、1939 年に放送を開始した。日本では昭和 32 (1957) 年 12 月 24 日に NHK が実験を始め、翌 33 年には東海大学が認可を受け FM 放送実用化のための実験局として放送を開始した。本放送の開始は NHK が昭和 44 (1969) 年 3 月 1 日、民放では同年 12 月 24 日に開局した「愛知音楽エフエム放送」(後のエフエム愛知) が最も早く、翌 45 年に「大阪音楽エフエム放送」(後のエフエム大阪)、「福岡エフエム音楽放送」(後のエフエム福岡) が開局したほか、エフエム東京がエフエム東海の業務を引き継いで放送を開始するなど、本格的な FM 放送が開始された。図版 01-07 の昭和 38 (1963) 年にトリオから発売されたものや、図版 02-02 の昭和 39 年に松下電器から 11,800 円で発売されたもの (RF-800)

が FM チューナーを搭載した当館所蔵のラジオとしては初期のものになる。FM 放送は AM 放送よりも音質が良いため、音楽番組が多く放送されている。

また、昭和 33 (1958) 年はラジオ界にとって大きな転機の年となった。ラジオ契約の廃止数が顕著に増えるとともに新規契約数が減少し、翌 34 年にはラジオの普及率が減少へと転じたのである。また、昭和 36 年にはテレビ契約数がラジオ契約数を上回った。ラジオ聴取料^(註 1)は昭和 43 (1968) 年に廃止され、ラジオに関する契約数や普及率という言葉も消えることとなる。

昭和 50 年代に、海外の国際放送の受信ブーム (BCL) が起こり、受信周波数の広いラジオ受信機 (いわゆる BCL ラジオ) が各社から発売された。昭和 50 年代後半には全国に民放 FM 放送局が相次いで開局する。

平成の時代に入ると、コミュニティ放送のように、さらに狭い地域を対象としたラジオ放送が行われるようになった。コミュニティ放送の歴史は、平成 4 (1992) 年 1 月に制度化されたことからスタートする。同年の函館山ロープウェイによる「FM いるか」が第一号である。コミュニティ FM は市町村の一部や近隣の市町村などごく限られた範囲を放送範囲とするため、地域の特徴を生かした番組や地域住民も参加する参加型の番組が多く製作される。また、FM 方式をとっているため、市販のラジオで気軽に聴くことができ、災害時にはリアルタイムできめ細やかな情報提供が可能であることから、地域のインフラとしても拡大している。また、平成 7 年にはエフエム東京が FM 文字多重放送、いわゆる「見えるラジオ」の放送を開始する。これは FM 電波

の隙間を使って、音声データと文字データを送信するもので、専用の受信機が必要となる。平成 8 年 3 月から NHK でも道路交通情報システムの情報提供方法の一つとして利用されているほか、カーナビにも利用されている。

平成 7 年の兵庫県南部地震 (阪神・淡路大震災) では、災害時における情報伝達メディアとしてのラジオの重要性がクローズアップされる結果となった。以降、各局とも災害への対応に重点を置くようになり、防災グッズとして、手回しで発電できるラジオや、懐中電灯・携帯電話の充電器などの複合的なものとしてのラジオが注目を集めている。平成 15 (2003) 年の au を皮切りに、携帯電話各社から FM 放送を聴くことのできる携帯電話が発売された。

終わりに

テレビが普及し始めた頃から、ラジオはその勢いが衰えたかのように論じられることがままある。実際、メディアや娯楽の主役でなくなったことは間違いないのかもしれない。しかし、現在でも根強いファンを持っていることもまた事実である。深夜に勉強をしながら聴いた、好きなパーソナリティや DJ の言葉に心を奮わせた、偶然流れてきた音楽に励まされた、などラジオにまつわる思い出を持つ人も多いことだろう。災害時には身近な情報を得るための手段として、また時代に応じて変化しながらも、ラジオはラジオとしての役割を担っていくことはこれからも変わらないであろう。

謝辞

本稿を書くに当たって、筆者の前任である土屋千春氏が準備された資料を基とした。また、当館特別嘱託の後藤真里、臨時職員で名古屋大学大学院人間情報学研究科博士課程の木田歩の両氏には図版作成その他全般において多大なる協力を頂いた。さらに、図版作成を依頼し、南山大学人文学部人類文化学科の黒沢浩助教授には原稿のチェックなどを依頼し、同・大塚達朗教授には全般に渡る指導を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註 1 聴取料の変遷

大正 14 年 3 月 2 円

大正 14 年 7 月 1 円

昭和 6 年 一台につきから一家につきに

昭和 10 年 50 銭

昭和 20 年 1 円

昭和 21 年 2 円 50 銭

昭和 21 年 5 円

昭和 22 年 17 円 50 銭

昭和 23 年 35 円

昭和 26 年 50 円

昭和 29 年 3 ヶ月で 200 円

昭和 34 年 3 ヶ月で 255 円

昭和 44 年 廃止

(小林健二：1997：p15)

参考文献

朝日新聞社編 『朝日新聞縮刷版』

朝日新聞社

安城市歴史博物館 1998 『企画展 ラジオ

とテレビジョン～昭和 27 年、安城市、

ラジオ普及率日本一に輝く～』

NHK 放送文化研究所編 2001a 『20 世紀
放送史 上』 日本放送出版協会

NHK 放送文化研究所編 2001b 『20 世紀
放送史 下』 日本放送出版協会

NHK 放送文化研究所編 2003 『20 世紀放
送史 資料編』 日本放送出版協会

大島正光・川上正光・古賀正三・武藤義一編
1965 『真空管とトランジスタの話』
共立出版

柏木博 1999 『日用品の文化誌』
岩波書店

黒田勇 1999 『ラジオ体操の誕生』
青弓社

小林健二 1997 『ぼくらの鉱石ラジオ』
筑摩書房

志賀信夫 1990 『昭和テレビ放送史 上』
早川書房

日本放送協会編 1965a 『日本放送史 上
巻』 日本放送出版協会

日本放送協会編 1965b 『日本放送史 下
巻』 日本放送出版協会

日本放送協会編 1965c 『日本放送史 別
巻』 日本放送出版協会

村瀬孝矢・林正儀 2004 『放送技術 80 年
のドラマーラジオ・白黒 TV・そして地
上波デジタル放送へ』
毎日コミュニケーションズ

山川正光 1992 『オーディオの一世紀 エ
ジソンからデジタルオーディオまで』
誠文堂新光社

吉見俊哉 1995 『「声」の資本主義 電話・
ラジオ・蓄音機の社会史』
講談社

その他、各放送局や家電メーカー各社のオフ
ィシャルウェブサイトを参考にした。

図版解説

01-01 真空管ラジオ

H : 52.5cm、W : 56.5cm、D : 32.3cm
GRAWOR BERLIN 製か。1930 年代初頭か。

01-02 真空管ラジオ

H : 24.0cm、W : 40.0cm、D : 19.0cm
白山無線電機（現クラリオン）製、昭和 17 年。放送局型第 123 号受信機。放送局型とは、出来るだけ少ない資材で性能がよく廉価なものを普及させることを目的に制定されたラジオの規格。昭和 13 年 1 月に日本放送協会が制定した。

01-03 真空管ラジオ

H : 27.0cm、W : 47.0cm、D : 21.0cm
八欧無線（現富士通ゼネラル）製、昭和 25～26 年頃。マジックアイ付き。

01-04 真空管ラジオ

H : 14.5cm、W : 30.0cm、D : 12.0cm
日立製、H-202、昭和 31 年 10 月発売。本体に貼ったラベルにゼネラルスーパー受信機、感度極微電界級とある。

01-05 真空管ラジオ

H : 35.5cm、W : 54.0cm、D : 20.0cm
松下電器産業製、EA-750、昭和 32 年。18,800 円。マジックアイ付き。Hi-Fi、オールウェーブラジオ。

01-06 トランジスタラジオ

H : 11.0cm、W : 20.3cm、D : 5.2cm
SONY 製、TR-813、昭和 35 年。13,900 円。当館所蔵のトランジスタラジオの中

では最も古いものである。

01-07 真空管ラジオ

H : 11.5cm、W : 19.5cm、D : 12.0cm
TRIO（現ケンウッド）製、昭和 38 年。FM Hi-Fi チューナー付き。

01-08 真空管ラジオ

H : 12.8cm、W : 30.5cm、D : 11.2cm
東芝製「かなりや KS」、5YC-491、昭和 38 年発売。5,200 円。

02-01 真空管ラジオ

H : 17.0cm、W : 31.5cm、D : 14.5cm
TRIO 製、AF-252、昭和 38 年。9,950 円。

02-02 トランジスタラジオ

H : 10.8cm、W : 20.7cm、D : 4.7cm
松下電器産業製、RF-800、昭和 39 年。11,800 円。FM チューナー付き。

02-03 真空管ラジオ

H : 13.0cm、W : 34.0cm、D : 12.3cm
オンキヨー製、OS-195、昭和 39 年頃。

02-04 トランジスタラジオ

H : 13.5cm、W : 18.9cm、D : 5.3cm
SONY 製、ICF-110B、昭和 45 年。14,800 円。

02-05 トランジスタラジオ

H : 15.6cm、W : 31.0cm、D : 8.5cm
SONY 製、TFM-9200、昭和 46 年。9,500 円。イヤホン付き。

02-06 トランジスタラジオ

H : 9.0cm、W : 16.0cm、D : 3.8cm
三菱電機製、8X-534、昭和 47 年。7,200 円。

02-07 ラジオ

H : 20.5cm、W : 25.5cm、D : 9.0cm
三洋電機製、RP8700、昭和 50 年。19,700 円。肩掛け紐つき。円形ダイヤル採用コックピットデザイン、高感度設計。

02-08 自作の真空管ラジオ

H : 32.0cm、W : 57.3cm、D : 28.1cm
昭和 25 年頃。寄贈者の話によると、自ら設計を行い、部品・パーツ・キャビネットなど設計に応じて買い揃えて作ったもので、当時としては市販のものより高性能であったとのことである。

03-01 真空管ラジオ

H : 38.5cm、W : 67.5cm、D : 28.0cm
TELEFUNKEN 社 (旧西ドイツ) 製。コンセントは日立製であり、後に付け替えたものである。

03-02 真空管ラジオ

H : 23.5cm、W : 40.0cm、D : 19.7cm
原口無線電機製「キャラバン」。

03-03 真空管ラジオ

H : 14.5cm、W : 33.0cm、D : 12.2cm
三菱電機製、5P-640。

03-04 真空管ラジオ

H : 17.0cm、W : 32.5cm、D : 13.0cm
三菱電機製。マジックアイ付き。

03-05 真空管ラジオ

H : 33.5cm、W : 53.0cm、D : 18.0cm
松下電器産業製、AH-740。オールウェーブラジオ。

03-06 ラジオ聴取料領収証

H : 7.4cm、W : 5.7cm
社団法人日本放送協会。昭和 23 年 2 月 20 日。昭和 23 年 1 月から 2 月までの一期分 35 円。

なお、図版 04 から 12 はラジオ黄金時代と言われた昭和 20 年代から 30 年代のラジオの載った新聞広告を集めて掲載した。各社、各ラジオのセールスポイントのほか、当時の世相もそこから読み取ることができ、非常に興味深い。

(南山大学人類学博物館特別嘱託)

Daily life of three hill tribes in Northwestern Thailand
— The Collection from the three expeditions of
Sophia University (Tokyo, Japan) during 1969-74—

GOTO Mari

In this brief report, the daily life of three hill tribes (Meo, Lawa, and Ho) in Northwestern Thailand is discussed through the 95 items collected by the three expeditions of Sophia University, Tokyo. The collection was transferred to the Nanzan Anthropological Museum in 2000 and artefacts except the ones of Akha tribe are illustrated here. The artefacts on their textiles, ornaments, and religious ceremonies offer us ample information on their life styles based on the so-called “slash-and-burn” agriculture, and the common use of such materials as bamboo, wood, and gourds also give us the insights of their barter system as well as their producing techniques.

タイ西北部山地に暮らす人々

—上智大学から移管された西北タイ歴史・文化調査団資料より②—

後藤 真里

はじめに

前号と同様、2000年に当館に移管された上智大学西北タイ文化・歴史調査団(以下、調査団)収集の資料のうち、展示されている88点を紹介したい。今回はメオ族、ラフ族、ホー族の資料を取り上げる。主に調査団および調査団員による報告(白鳥 1969、白鳥編 1978、白鳥・竹村 1970、竹村 1973、中発 1972)をもとに、1969年～1974年にかけて3回にわたって実施された調査当時の暮らしとともに資料の解説をする。

1. 上智大学西北タイ歴史・文化調査団の調査内容と調査地に暮らす人々について

ここでは、調査団の調査目的と内容を簡単にふれながら、各民族の暮らしを展示資料とともに見ていきたい。

今回紹介する人々は、雨季と乾季が定期的にくる、常緑で日光を受けると光る照葉樹で構成される森林(図版13)で主に焼畑耕作を生業としている。彼らは陸稲、野菜、トウモロコシ、ケシ、トウガラシなどを栽培し、ブタ、ニワトリなどの家畜を飼育して生計を立てている(白鳥編 1978、祖父江 1991、柴村 1996)。

調査団は、1969年から1970年の4ヶ月間、中国南部と歴史的に関係するヤオ族とメオ族の調査を行なった。ただし、当時メオ族の調査は政情の問題¹⁾により未着手と報告されている(白鳥・竹村 1970)。その他にヤ

オ族と接触のあるラフ族、アカ族、リス族、ホー族、ラフ族、カレン族などについての予備調査が実施された。今回はラフ族、アカ族、リス族、カレン族の資料を掲載しない。

1971年から1972年にかけての4ヶ月間の第二次調査では、(前号で紹介した)ヤオ族についてのより詳細な調査、ヤオ族と密接な親縁関係にあるといわれるメオ族の調査および両族の関係と他民族との関係の調査を5つのメオ族の村で実施した。社会構造、宗教・儀礼の他に、経済形態と生活技術を調査し、経済形態と生活技術については、作物の品種、飼育している家畜の頭数などの集計調査をおこなった(中発 1972)。その報告では、経済生活について、各民族間で分業がなされており、例えば、調査当時ヤオ族は阿片を栽培・販売し、木綿、ゴマ、タバコ、竹細工などについてはアカ族の行商に依存し、他民族からの買い子を労働力にあてていた(白鳥・竹村 1970)。

ホー族については、経済活動の主導権を握っていたようである(白鳥・竹村 1970、Yong 1969)。メオ族については、タイとミャンマーの国境を越えたバン・メーチュ村に暮らす白メオといわれる人々についてであるが、他の民族に比べ、彼らが暮らすその土地(断崖)の環境が外部との接触を許さないのか、孤立して非協調的である、と報告されている(白鳥・竹村 1970)。また、ヤオ族の村内には、必ずホー族がいるよう

である(白鳥編 1978、中発 1972)。1973年から1974年にかけての4ヶ月間にわたる調査は、主に物質文化の収集であった(中発 1972)。

(1) メオ族(図版 14-21)

中国南部から移住してきた人々で、焼畑農耕を営みながら暮らしている。前回資料紹介したヤオ族と同様に犬祖神話を持っている。犬祖神話とは、中国皇帝のもとで手柄を立てた盤護(槃瓠)という龍犬が祖先であるという話である(白鳥 1969、1972、白鳥編 1978)。彼らは中国では苗(ミャオ)族といわれ、その衣装の色で「白苗」、「青苗」、「黒苗」、「花苗」、「紅苗」と呼ばれているが、彼ら自身の間では「白苗」と「青苗」しかない(Yong 1969、白鳥 1978、井関 2000)。調査当時、メオ族は他の民族より高地に住んでいた。彼らはヤオ族とは兄弟であるといい、その源流が中国にあるといわれているためか、中国式の姓を持つ。同姓間の結婚は認められていない(白鳥編 1978)。

経済形態と生活技術については、焼畑農耕を生業とし、自家食用にコメ、野菜を、自家家畜用にトウモロコシを、換金用にケシを栽培する。食用としてブタやニワトリを、換金用として放し飼いであるがヤギを、運搬用としてウマやウシを飼育している。調査団が撮影した8mmフィルムには、ケシの収穫も記録されている。花が咲いたあとのケシぼうずに2、3箇所芥子刀子(図版 18: JC-1000~1002)で傷をつけ、翌朝流れ出た液を芥子蝋(同: JC-0993、0997、0998)で採る。

通貨は日常生活ではタイの通貨を使用し

ているが、蓄財、装身用として銀を通貨として使用していた。この場合の銀貨はインドのルピー銀貨で、当時のタイの通貨に換算すると1個6パーツ(当時の1パーツは日本円で15円)であった(中発 1972、白鳥編 1978)。

家屋については、屋根には竹、カヤ、ヤシを用いて、寝室と儀礼用の入り口を谷側に作る。その他の建物は、主にコメを貯蔵する高床の穀倉、ブタ、ニワトリ、ウマ用の各小屋、そして薪用の小屋である。家畜用の小屋と薪用の小屋も谷側に作られる(中発 1972)。JC-1023、1024(図版 20)は屋根葺をすくのに使用する大櫛である。前者は竹製で、後者は木製である。

宗教・儀礼については、彼らは家屋、植物などにも精霊が宿ると信じており、各家には小さい祭壇(Su-ka)があり、何件かは大きい祭壇(Ta-wa-ning)を小さい祭壇と並置している。大きい祭壇を所有する家は祈祷師の家であるという。Hu-priという儀礼が、嫁を迎え入れる際に嫁の霊を迎え入れる儀礼であるという説明(中発 1972)から、生霊の存在も信じられていると思われる。JC-0934(図版 20)は卦具であり、水牛の角で作られている。カノミによると、その卦具を地面に投げ、その広がり向きで吉か凶かを占う(カノミ 1991)。

(2) ホー族(図版 26-28)

中国系雲南人と紹介され、現地ではホー(Haw、Ho)といわれている(白鳥編 1978)。彼らは中国の雲南からきた人々で、タイ国籍を持つ中国人、華僑と区別されている(白鳥編 1978 p.60)。主に焼畑耕作を生業とし、日常生活では物品の購入等はタイの通

貨を、婚資、装飾などには銀を使用していた。物資の流通は活発であったようで、前号でも触れたが、平地の村落からの産物や雑貨はパーレー村まで一旦運ばれ、そこから奥の山地へはウマやロバで運ばれた。また、山地の産物などもパーレーまで持ち込まれ、そこで平地の物資と交換された（調査当時は現金交換が主流であった）（白鳥編 1978）。

彼らは山地の人々と平地の人々との交易の仲介者であった。ヤオ族が栽培するトゥガラシと、ケシから生産する阿片についても、彼らが仲介者となっていた（白鳥編 1978）。

(3) ラワ族(図版 22-25)

もともと北部タイ、北部ラオス、ミャンマーのシャン州に昔から住んでいた、またタイ族²⁾と衝突しながら北部タイの山地に追い込まれたともいわれている（白鳥 1969）。山地と平地の中間部に暮らし、梯田耕作を生業としている。その他に、鉄の山を掘り砂金を採って、それを溶かして小刀などを作り生計を立てていた（白鳥 1978、Yong 1969）。また、壺を作り平地に住む人々に売っていた。彼らの村の名前は「大壺作りの村」など壺作りに関係がある（白鳥編 1978）。

ラワ族の壺（図版 25）は拍打法と直焼きで作られる（白鳥 1978）。JC-0018（図版 25）は、他の 5 点と異なり、釉薬がかかっている。拍打具（図版 25：JC-0924、JC-0926）で叩いて土器の成形をする。JC-0924（図版 25）は 2 面にそれぞれ真ん中あたりに刻目がつけられており、それが壺の模様となるようである。拍打具に関する考察について

は、久慈による報告（40-64 頁）を参照されたい。ラワ族は、壺以外にも土製の煙管口を作っており形が美しい（図版 24）。家屋は高床式（白鳥 1978）で、日本の農家に見られるような納屋や仕事場があり、中庭で蔬菜類（あおももの）を栽培する（白鳥 1969）。村落の中心部には、仏教寺院がある（白鳥 1969）。Yong によれば、必ずしもほとんどのラワ族が仏教徒であるとは言いがたく、彼らはあらゆるものに慈悲深く悪意のある精霊が宿ると信じている（Yong 1969）。

2. 生活用具ごとの資料説明

ここからは、資料を民族別ではなく、生活用具ごとに紹介したい。JC-0758（図版 19）は、竹で作られたメオ族の水筒であるが、ここで水の確保についてふれておきたい。アカ族（今回は資料を掲載しない）の水源地は集落の下方の谷にある。そのため、水源地まで水を汲みに行く。メオ族は集落の上の方に水源地をもつため、竹を二つに割り節を抜いた懸樋を貯水槽までかけて、水を引く（白鳥編 1978）。または、アカ族のように水源地まで水を汲みに行く（白鳥編 1978）。

調査団が撮影した 8mm フィルムをみると、正確な所在地は不明であるが、アカ族の人が水を汲んでいる様子が映っており、ヒョウタンで作った水入れに水を汲んでいた。そして、水を汲んだヒョウタンを籠に何個か入れて背負っていた。水汲みの道具以外にも、彼らが使用する生活道具は、竹、木、ヒョウタンなどがその主たる素材となっている（白鳥編 1978）。例えば、メオ族の蒸し器（図版 19：JC-0676）、裁縫箱（図版 20：

JC-1148)、は木製で、蒸し器は丸太の中身をくりぬいて作られ、裁縫箱は曲げ細工で作られている。蒸し器はコメを蒸すだけではなく蒸留酒を作るのにも使用され、メオ族以外の民族もそれを使用している(白鳥編 1978、カノミ 1991)。同じくメオ族の物入れ(同:JC-0195)はヒョウタン製である。

(1) 農具

農具について調査団は、山地での焼畑耕作に適した独自の形式を保っており、主なものを標本として収集できたそうである(白鳥編 1978)。

穂摘具(図版 18:JC-0181、0185、0190)は、イネの穂だけを刈り取る道具である。使い方は、片手でそれを握り、指先で茎を刃先に当て手前に引き穂を刈り取っていく。それは使用する人の手の大きさに合わせて作られる(柏木・小林 1997)。野生に近いイネは実が熟す時期がバラバラであるため、これは実が熟したイネだけを刈り取ることができ、特に焼畑での陸稲栽培によく使われる(小林 1988)。穂摘具の分布は中国南部から東南アジアにみられるが、調査当時では、鎌が穂摘具の代わりとなっていると報告されている(白鳥編 1978)。図版 23 の JC-1181 は稲刈り用の鎌であり、JC-0945 は草刈り用の鎌である。いずれもラワ族のものである。

傾斜地が畑として開墾されることが多いせいか、小ぶりの鋏が目立つ(図版 18:JC-0947、0949、1177。いずれもメオ族のもの)。鋏について、調査団員であった量によると、身は刃先が広がった三角形の形をした八字形鋏(現地では nyu という)がヤオ族特有の農耕具である(白鳥編 1978)。その

八字形鋏をメオ族も使用しているが、メオ族以外に使用している民族はいないという(白鳥編 1978)。この八字形鋏は展示していないが、その分布は興味深い。その他に、鉈について、ラオスのメオ族やその他の民族が鉈を鞘に収めて腰にさしているのを見かけ、農工用・護身用の刃物として求めるのだろうかと考えられ(白鳥編 1978)、メオ族の腰刀(図版 21:JC-1161)もその大きさ(全体 L39.1cm、刃 L25.7cm)からして、農工用もしくは護身用に使われるのであろうか。

(2) 籠・箆類

籠については、運搬用のものが目立ち、基本的には口が大きく底が小さい形である(図版 21:JC-0598、図版 23:JC-0615)。竹細工の製作については、アカ族やカレン族(両民族の資料は、今回は紹介しない)が優れており、他の民族がそれらを使用していたという。

ここで紹介する資料の多くは、アジロ編みとザル編みのものが目立つ。アジロ編みとは、タテヨコの竹をすき間なく組み合わせる編み方である。ザル目編みとは立竹(タテヨコの編み竹のうちタテにあたる竹。骨組みの役割をする)に廻し竹をすき間なく組み合わせる、ザルを編む時の編み方である(中村 1979)。ラワ族の扇(図版 23:JC-0646)、メオ族の食用の皿(図版 19:JC-0628、0629)はアジロ編みで作られており、いずれも竹製である。ラワ族の扇(図版 23:JC-0646)と形・色が似ているものをアカ族の人々が稲もみの選別に使用している写真が調査団による報告書に掲載されている(白鳥編 1978 p.109)。

主に山地に暮らす人々が普段食べるものは、コメと少量のあおものを調理したものである(白鳥編 1978)。メオ族、アカ族(今回は紹介しない)の食用の皿については二重構造となっており、表はアジロ編み、裏はザル目編みで編まれている。なお底部は六つ目編み(六角形の編み目を作り出す編み方)である。

ラワ族の長籠(図版 23: JC-0635)はザル目編みであり、竹製である。ホー族の団扇(図版 28: JC-0957、0958)は、調査団の採集品目録によると、ヤシの葉製で、その製作方法はアジロ編みと思われる。

(3) 煙管(図版 24)

タイ西北部の山地に暮らす人々のタバコは、巻きタバコではなく、刻みタバコであるという(白鳥編 1978)。煙管の形については、基本的に形は同じであるが、ラワ族の JC-0196、0199(図版 24)は他の展示資料に比べると異なっている。それらの形は U の字になっており、片方の穴に刻みタバコを詰め、もう片方に管を差し込み喫煙する。

(4) 楽器

口琴とは、弁を口に入れて指ではじき振動させて音を出す楽器である。それは金属や木、竹で作られており、その中央には切れ目が入っている。その切れ目が弁(振動板)である。JC-3052(メオ族:図版 20)の場合、紐がついていない方を口にくわえるようにしながら紐を引くと、弁が振るえて音が鳴る。その分布は、中国、東南アジア、ヨーロッパ、オセアニア、南アメリカなど世界中の様々な地域で見られる(小林 1988、

柏木 1999)。

ラワ族の笛柄(図版 24: JC-3051)³⁾はゾウの彫刻がついている。調査団の採集品目録によると、それは青銅製である。

(5) 狩猟具

パチンコ(図版 21: JC-0877、0878)の玉は、前者は小石で、後者は土弾である。手製の袋には土弾が 52 個、小石が 17 個入っていた。弩は、引き金を引いて矢をはなつボーガンのような形である。山地に暮らす人々の共通した一般的な狩猟具が弩であるが、矢に民族ごとの違いがあるという(白鳥編 1978)。

弦と弓は竹製で、台は木製である。JC-0564(図版 21)はメオ族のものであるが、台の引き金あたりから先端にかけて溝が彫られている。矢には竹を薄く削って作られた紐でできた矢羽が挟まっている。

(6) 運搬具

山地での運搬方法として、人が直接モノを運ぶ方法とウマなどの家畜に積んで運ぶ方法がある。図版 21 の籠(JC-0598、メオ族)は口が大きく底が小さい形をしており、その形は山地の運搬にふさわしく、荷物の重量をできるだけ肩で受けようとするものである(白鳥編 1978)。その他に、担ぐ時に背負子を使用する場合もある(白鳥編 1978)。図版 21 の背負子(JC-0689)はメオ族の背負子であり、図版 23 の JC-1118 はラワ族の背負子の役割を果たすものである。当館の資料台帳には、JC-1118 は「背負子部分」と記載されている。

家畜について、ウマは貨物運搬用であるという(白鳥 1978)。図版 21 の首鈴

(JC-1136) はメオ族の資料で、図版 28 の馬面繫 (JC-0936)、同じく馬蹄鉄 (JC-1005) はホー族の資料である。

なお、肩掛け袋については、別の項目としたい。

(7) 肩掛け袋

布製のものについては、ラワ族とアカ族、黒モソ族 (アカ族と黒モソ族の資料は、今回掲載しない) のものを展示しているが、三者は基本的に作りが同じである。違うのは装飾の仕方である。ラワ族のもの (図版 23 : JC-0315) は、幅 20 cm で長さの違う布を 2 枚使用している。布のつなぎ目にチェーンステッチが施されている。今回は紹介しないが、アカ族のものについても布の幅や長さ、装飾方法が異なるが作りは同じである。表のみに装飾が施され、それはアップリケとプラスチック製のボタンによる。黒モソ族の装飾は、色とりどりの房とアップリケによるものである。

3. 服飾

民族衣装は、視覚的に山地に暮らす各民族を識別するのに一番容易な手段である。ここでは、衣装、装身具、履物について各民族の資料を紹介しつつ、相違点をみていきたい。

(1) 衣装

図版 14、15 の上衣は、「白メオ」と呼ばれる人々のものである。普段は黒いズボンを着用するが、正月など特別なときに白いスカートをはくため、そうよばれている。後ろ身ごろにある長方形の襟飾りについては、柄は家族の象徴であったといわれる。

また、古いものは縁起が悪いとされ、年があけると翌年用の襟飾りを作り始める (チヨッティカヴン 2000)。

図版 14、15 のスカートは「青メオ」と呼ばれる人々のものである。細かいプリーツが施され、生地にはろうけつ染めと、クロスステッチの刺繍と、パイアステープのようなアップリケで装飾されている。刺繍の部分の生地とろうけつ染めの部分の生地は異なる。刺繍の部分の方が、糸が太いため織り目が粗く見える。手にとると以外と重たく感じ、その重さを量ると 700 g であった。それは手ぬいとミシンで縫製されている。

男性用の衣装 (図版 17) は女性用に比べ装飾がない。JC-0450 の上衣と JC-0451 のズボンは「白メオ」のものと考えられる。調査団による採集品目録によると、これらはセットとなっているが、上衣とズボンの生地が異なる。ズボンの生地のほうが、織り糸が太く、手に取ると若干色落ちする。また、上衣が手ぬいとミシンで縫製されているのに対して、こちらはミシンで縫製されている。形はアカ族のものと似ているが、こちらは 4 つの部位で構成され、裾まわりは約 80.0 cm とゆったりしている。

JC-0508 (図版 17) の男性用帽子は、前号で紹介したヤオ族のものに似たデザインである。クラウンの部分にクロスステッチで刺繍が施され、サイドクラウンには鋸の歯に似た模様をはじめ、クロスステッチで刺繍が施されている。刺繍に施された文様について、その帽子や女性用の襟飾り (図版 15 : JC-0448) にもみられる鋸の歯のような文様は鋸歯文といい、多くの民族と広い地域にみられ、魔よけの意味があるという (原野農

芸博物館編：2002)。同じくメオ族の男性用帽子である JC-0509 と JC-0510 (いずれも図版 17) は、それぞれ 6 枚のクラウンを縫い合わせて作られている。違いは JC-0509 には頂点にチャイナボタンが、JC-0510 には径約 10cm のピンクのボンボンが付いていることである。JC-0508 はメエチュウ(Mae Cho、図版 13) で、JC-0509、0510 はメエトー(Mae Tho、図版 13) で収集されており、同じメオ族でも地域、グループによって衣装に違いがあることがみてとれる。

ラワ族の女性の衣装は上衣とスカート(図版 22：JC-0375)、脚絆である。上衣と脚絆は展示していない。脚絆は山地を歩くのに適している。JC-0102、0103 (図版 22) はその脚絆を留めるのに用いる。JC-0103 は JC-0102 に比べると弾力がある。見た目は艶のある皮のようであるが、木綿の糸に漆を塗ったものであるという(カノミ 1991)。スカート(図版 22：JC-0375) は幅 33cm の布を 2 枚組み合わせで作られている。

ホーの服飾(図版 27)については、履物のみ収集したようである。布製の草履(図版 27：JC-0502、0503) は手縫いとミシンによる縫製でできており、中敷と裏に滑り止めのためか太い糸で刺繍が施されている。子供用の布製の靴(図版 27：JC-0497、0498) にも同じような工夫がなされている。当館では、布製の履物以外に麻製の草履(図版 27：JC-1016、1017) ⁴⁾ も展示している。

(2) 装身具

装身具については、アルミ製や銀製であるものが多い。ホー族の首飾(図版 26：JC-0127)をはじめ、今回紹介する装身具は銀製のものが目立つ。

首輪については、メオ族のもの(図版 16：JC-0128、0129)はアカ族のものと同じ形である。同じくメオ族の JC-0114、0115、0125、0126(図版 16)はペンダントトップであるが、デザインはウシの首にかける鈴がモチーフとなっている(カノミ 1991)。それらは主に花や葉といった植物の文様が彫られているが、JC-0126 については、裏に時計周りに「長」、「命」、「生」、「保」の文字が彫られている。

ラワ族の装身具(図版 22)について、JC-0104～0107 は象牙で作られているように思われる(カノミ 1991)。ラワ族の女性は、長い髪を後ろの低い位置でまとめ、ヘアピン(JC-0104)を挿してとめる(カノミ 1991)。耳飾(JC-0105～0107)については、耳に穴を開け、子供の頃に小さいものをはめ、成長するに従って大きいものを取り替えていく(カノミ 1991 p.265)。手首飾(JC-0101)は鉄製である。

おわりに

今回も前号と同様に暮らしとともに展示資料紹介をした。途中、生活ごとに資料説明をしたのは、西北タイの山地にらす各民族が使う生活用具について、基本的な形や製作方法は同じか似ていると感じたからである。素材について、観察所見と採集品目録とで、その記載内容が異なっている場合があり、素材については今後の課題としたい。

今後は、資料紹介のみではなく、調査団がタイ西北部山地に赴いてから約 35 年経っているため、生活用具や服飾の製作方法や素材、そして分布範囲の変化などが資料

に関する調査・研究の課題となってくるであろう。

最後に、1978年に講談社から刊行された調査団の報告書『東南アジア山地民族誌』に掲載された資料の多くが愛知県犬山市にある野外民族博物館リトルワールドに所蔵されているとある。今年度の夏に3時間ほど先方の資料台帳を見せていただき、主にデータ上ではあるが掲載資料の所在確認をさせていただいた。掲載資料のうち、主に農具や容器が先方の所蔵であると思われる。この場をお借りし、謝辞を申し上げたい。

註

- 1) 政情の問題とは、1967年にタイ北部で起こった「赤モン(メオ)事件」のことであろう。それは共産主義の影響を受けたメオ族がタイ政府と衝突した事件であり、アヘンと密接に関係した事件といわれる(綾部監 2000)。
- 2) 広義的にはタイ諸語を使用する集団を指す。タイ・ルー、シャムなどその系統に入る(綾部監 2000)
- 3) 当館の資料台帳ではJC-3051の資料名称は「笛柄」となっているが、調査団による採集品目録には「nib of a lute」と記載されている。
- 4) 調査団の採集品目録では、麻製となっている。

参考文献

綾部恒夫(監) 2000 『世界民族事典』
弘文堂

井関和代 2000 「アジア・アフリカの祖霊
を包む布 その文化的背景を知る」

『別冊 太陽』、132-141頁 平凡社

柏木博 1999 「二〇世紀を動かした楽器
エレキギター」『日用品の文化誌』、
176頁 岩波書店

柏木博・小林茂樹・林文二 1997 『道具の
謎解き』 INAX 出版

カノミタカコ 1991 『神話の人々 タイ山
岳民族の染織工芸』 しこうしゃ

小林茂樹 1988 『世界道具パズル』 光文
社

柴村恵子 1996 『東南アジア照葉樹林帯少
数民族の生活文化』 中部日本教育文
化会

白鳥芳郎 1969 「西北タイ山地民族探訪の
記録ータイ国における歴史・民族学の研
究現状」『上智史学』14、119-138頁

白鳥芳郎 1972 「評皇券牒に見られる盤護
伝説とヤオの十八神像」『上智史学』
17：23-51

白鳥芳郎 1978 「タイの少数民族」『季刊
民族学』4、96-103頁

白鳥芳郎(編) 1978 『東南アジア山地民
族誌』 講談社

白鳥芳郎・竹村卓二 1970 「上智大学西北
タイ歴史・文化調査団の成果ー略報ー」
『上智史学』15、129-132頁

祖父江孝男 1991 『文化人類学（改訂版）』
（財）放送大学教育振興会

竹村卓二 1973 「最近における北部タイ山
地民族の人類学的調査の成果（動向と
展望）－ヤオ族とメオ族を中心として
－」『人文学報』92（社会学11）、
21-51頁

チョッティカヴン・澄子 2000 「山岳民族
の布に魅せられて」『別冊 太陽』、
42-72頁 平凡社

中塚発夫 1972 「第二次上智大学西北タイ
歴史・文化調査団の成果－略報－」『上
智史学』19、83-91頁

中村俊亀智 1979 「かごの系譜をたずねて」
『月刊みんぱく』4、15-17頁

中村俊亀智 1979 「国立民族学博物館所蔵
の東南アジア島嶼部採集のカゴ細工に
ついて 『国立民族学博物館研究報告』
4巻1号、130-151頁

原野農芸博物館（編） 2002 『アジア少数
民族服飾図鑑』（財）奄美文化財団

Yong,G. 1969 *The Hill Tribes of
Northern Thailand.* AMS Press

図版解説

凡例：

①資料のデータを調査団の「採集品目録」か
ら作成したが、資料の形態については当館で
計測した。また、採集者の項目については、
今回は省略した。その他、筆者による観察所
見もしくは調査団による報告書等の文献から
資料の使用方法などの説明を加えた。

②JC番号は当館の資料番号であるが、調査団
の資料番号を旧番号として付記した。

③図版、本文中の資料名は当館の資料台帳に
準拠したが、この図版解説では調査団の採集
目録での資料名を記載した。なお、収集地お
よび使用民族の項目では、その読みをわかる
ものには新たに追加した。

<図版 14～15>

JC-0448（旧番号 169）

資料名：女性用上衣

素材：木綿

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月18日

収集地：Mae Cho（メエチュウ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

形態：総丈54.0cm、腰回り寸法118.0cm

襟の大きさは20.0cm×13.5cm、刺繍
（クロスステッチ）の部分は9.0cm×
16.5cmである。裾の歯のような模様は鋸
歯文といい、魔よけの意味があるという
（原野農芸博物館 2000）。裾は端の始末
がされていない。

JC-0445 (旧番号 不明)

資料名：女性スカート (ひだ、模様入り)

素材：不明

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：不明

※ 資料名と使用民族名は、資料に付いていた
タグ (荷札) の記載内容を記入。

収集地：不明

現地名称：不明

使用法：記載なし

形態：丈 53.5cm、腰回り寸法 84.0cm (紐
は除く)

細かいプリーツスカートの製作方法は
手縫いとミシンによる。クロスステッチ
で刺繍が施されているが、何の模様かは
不明である。刺繍部分に幅 1.5cm の柄入
りのテープがたたきつけてあり、ろうけ
つ染めの部分にも幅 0.5cm の綿テープが
3 本たたきつけられている。ろうけつ染
めの模様については図版 15 を参照され
たい。破れた箇所には当て布をして補修
されている。素材は木綿だと思われる。

<図版 16>

JC-0114、0115、0125、0126 (旧番号 074)

資料名：ペンダント

素材：銀

使用民族：メオ

収集年月日：1971 年 12 月 04 日

収集地：Huay Sai (フェイサイ)

製作所：Sai 製作

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

形態：(JC-0114) 5.8cm×5.3cm

(JC-0115) 5.2cm×4.3cm

(JC-0125) 6.1cm×4.6cm

(JC-0126) 6.2cm×5.9cm

JC-0126 のみ、裏面に模様が彫られて
いる。この形はウシの鈴からデザインさ
れているらしい (カノミ 1991)。

JC-0118a、b、c (旧番号 122)

資料名：指環

素材：銀

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971 年 12 月 04 日

収集地：Huay Sai (フェイサイ)

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

形態：(a) トップ 3.2cm×1.4cm、

リング 径 2.0cm、幅 0.15cm

(b) トップ 3.2cm×1.2cm

リング 径 2.0cm、幅 0.13cm

(c) トップ 2.9cm×1.2cm

リング 径 1.74cm、幅 0.07cm

a、b、c ともに模様があるが、リング
については、c のみ模様が彫られていない。
葉っぱのような形をしたトップは、護身
用の役割も果たしている (カノミ 1991)。

JC-0119a、b (旧番号 00067)

資料名：腕輪につける飾り

素材：銀

使用民族：Meo

収集年月日：1969 年 12 月 13 日

収集地：Mae Chan (メエチャン)

製作所：「製作所」の項目なし

現地名称：なし

使用法：記載なし

備考：銀細工店で購入

形態：(a) 飾りのみ 2.2cm×1.2cm

(b) 飾りのみ 2.2cm×1.16cm

当館の資料台帳によると、資料についていたタグ（荷札）に「Mae Chanに住む Lahu 出身の銀細工職人の店で購入」とある。

JC-0128（旧番号 63-2）

資料名：頸輪

素材：アルミ

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月03日

収集地：Mae tala（メエタラ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：径 15.8cm、重さ 0.8kg

JC-0129（旧番号 63-1）

資料名：頸輪

素材：アルミ

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月03日

収集地：Mae tala（メエタラ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

備考：記載なし

形態：径 14.6cm

今回は掲載しないが、アカ族にも JC-0128、0129 と同じ形をした頸輪がある。

JC-0130（旧番号 069）

資料名：首輪

素材：銀

使用民族：メオ

収集年月日：1971年12月04日

収集地：Huay Sai（フェイサイ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：so pia

備考：記載なし

形態：径 15.8cm、重さ 0.8kg

5 連の輪を裏で留めてあり、花や葉の模様がみられる。手に取るとかなり重く、その重さは 1.3kg であった。

<図版 17>

JC-0450（旧番号 231）

資料名：男性上衣

素材：記載なし

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月19日

収集地：Mae Cho（メエチュウ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：(232 と) 一組

形態：総丈 49.0cm

首回り 径 10.0cm、

ウエスト回り寸法 96.0cm

製作方法は手縫いとミシンであり、端の始末はほとんど折り返してまつてある。裏地は表地ともに木綿（白）と思われる、JC-0448（女性上衣）と同様に袖先までである。左前身頃の前立ては、下から 13.5cm までは縫製されているが、その上は縫製されていない。両脇は下から 2.0cm までのスリット止まりまで縫われている。

JC-0451 (旧番号 232)

資料名：男性袴
素材：記載なし
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1971年12月19日
収集地：Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：(231と) 一組
形態：丈 89.0cm、腰回り寸法 82.0cm
股下丈 62.0cm (最小股下丈
49.0cm)

製作方法はミシンによる縫製で、ウエスト回りの端は始末されていない。端の始末は縫い代を1.0cmくらい折って2本ミシンがけをしている。4枚のパターンで作られており、股下のパターンは正方形である。今回は掲載しないがアカ族のものと形が似ている。アカ族のものは5つのパターンでできており、パターンの形も異なる。素材は綿と思われる。

JC-0508 (旧番号 217)

資料名：男性用帽子
素材：記載なし
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1971年12月20日
収集地：Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：puan tong
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：H17.6cm、径 14.0cm

ピンクと緑色の毛糸で作られたボンボンが5つ付いている。クラウンの縫い目

にはチェーンステッチで刺繍が、サイドクラウンにはクロスステッチの刺繍が施されている。サイドクラウンの模様は前号で紹介したヤオ族の模様に似ているように思われる。鋸歯文の模様がみられる。

JC-0509 (旧番号 387)

資料名：男性帽子
素材：記載なし
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1972年01月08日
収集地：Mae tho Lau Tong(Han)
製作所：Mae tho (メエトー)
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：(387-390で) 一組
形態：H11.6cm、径 17.9cm

製作方法はミシンによる縫製である。6枚のクラウンで構成され、裏地は赤色である。生地素材は不明であるが、のり付けされているように固められている。

JC-0510 (旧番号 391)

資料名：男性帽子
素材：記載なし
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1972年01月08日
収集地：Mae tho Nya Tou(Laa Tou)
製作所：Mae tho (メエトー)
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：(391-394で) 一組
形態：H15.4cm、径 18.0cm

製作方法は、JC-0509と同じであるが、違いはピンクのボンボンが取り付けられていることである。

<図版 18>

JC-0947 (旧番号 143)

資料名：小鋏

素材：木・鉄

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月16日

収集地：Mae Cho (メエチュウ)

製作所：記載なし

現地名称：hlo ma

使用法：稲畑使用

備考：記載なし

形態：L39.5cm (柄 L27.7cm) 刃 W4.6cm

重さ 0.38kg

柄にはナイフで傷つけたような痕が何箇所もあり、すべり止めであると思われる。

現地名称：me: hlan

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L30.3cm (柄 L24.2cm) 刃 W8.2cm

JC-0185 (旧番号 058)

資料名：穂摘み具

素材：木・鉄

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月03日

収集地：Mae tala (メエタラ)

製作所：No.2 所有

現地名称：wo

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L11.9cm、W4.5cm、刃 L3.3cm、
W0.9cm

JC-0949 (旧番号 174)

資料名：小鋏

素材：鉄

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月16日

収集地：Mae Cho (メエチュウ)

製作所：記載なし

現地名称：chaomi hlo chonbli

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L18.3cm (柄 L15.9cm) 刃 W6.2cm

JC-0190 (旧番号 215-2)

資料名：穂摘み具

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月20日

収集地：Mae Cho (メエチュウ)

製作所：記載なし

現地名称：wo tsonbri

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L9.2cm、W4.1cm、刃 L2.4cm、
W0.6cm

JC-1177 (旧番号 365)

資料名：小鋏

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地：Mae tho Lao Tau

製作所：Mae tho Lau Tau

JC-0181 (旧番号 215-1)

資料名：穂摘み具

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月20日

収集地： Mae Cho (メエチュウ)

製作所：記載なし

現地名称：wo tsonbri

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L11.9cm、W4.5cm、刃 L3.3cm、
W0.9cm

穂摘み具は稲の穂だけを刈り取る道具である。片手にそれを握り、指先で稲穂を刃にあてて刈り取る。

JC-0993 (旧番号 361)

資料名：ケシ篋

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地： Mae tho Lao Tong

製作所：Lao Tong

現地名称：trau souzin

使用法：ケシの採集

備考：記載なし

形態：L18.2cm (篋 L8.1cm、W4.4cm、)

JC-0998 (旧番号 363)

資料名：ケシ篋

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地： Mae tho Lao Tau

製作所：Mae tho Lao Tau

現地名称：trau Sou jin

使用法：ケシの採集

備考：記載なし

形態：L16.4cm (篋 L7.0cm、W3.1cm、)

JC-0997 (旧番号 372)

資料名：ケシ篋

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地： Trau So Jin

製作所：Bor Tong

現地名称：trau so jin

使用法：ケシの採集

備考：記載なし

形態：L16.7cm (篋 L7.0cm、W3.5cm、)、
柄の木部 L5.0cm

ケシの篋は鉄製であると思われる。ケシの採取方法は図版 18 を参照されたい。

JC-1000 (旧番号 362-1)

資料名：ケシ刀

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地： Mae tho Lao ton Lao Tau

製作所：Mae tho Lao Loo Pra Tsu

現地名称：jar(hlai jin)

使用法：ケシの採集

備考：記載なし

形態：L13.4cm (他の2刀 L10.0cm)

JC-1001 (旧番号 362-2)

資料名：ケシ刀

素材：記載なし

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月08日

収集地： Mae tho Lao ton Lao Tau

製作所：Mae tho Lao Loo Pra Tsu

現地名称：jar(hlai jin)

使用法：ケシの採集

備考：記載なし

形態：L14.1cm（他の2刀L10.1cm）

JC-1002（旧番号 373）

資料名：ケン刀子

素材：記載なし

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1972年01月08日

収集地：Bor Tong

製作所：Bor Tong

現地名称：jar

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L10.0cm（他の2刀L9.3cm）

ケンの採取に使用する。花が咲いた後に実るケンぼうずに2、3箇所傷付けるのに使用する。その傷から流れ出た液をケン籠で採る。図版18を参照されたい。

<図版19>

JC-0628（旧番号 261）

資料名：食皿

素材：竹

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月18日

収集地：Mae Cho（メエチュウ）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：H8.5cm、径26.7cm

内側はアジロ編み、外側はザル編みの二重構造となっている。底部は六つ目編で台がある。

JC-0629（旧番号 166）

資料名：竹皿

素材：竹

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月18日

収集地：Mae Cho（メエチュウ）

製作所：記載なし

現地名称：cho'n

使用法：食器

現地名称：記載なし

備考：記載なし

形態：H7.8cm、径23.6cm

JC-0628と同じく内側はアジロ編み、外側はザル編みの二重構造である。こちらには台がなく、外側の底部の編み方も異なる。

JC-0758（旧番号 062）

資料名：水筒

素材：竹

使用民族：メオ

収集年月日：1971年12月03日

収集地：Mae tala（メエタラ）

製作所：No.1所有

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：H55.5cm、径9.2cm

口は三角形で1辺約1.0cmである。紐はナイロン製と思われる。

JC-0676（旧番号 256-1）

資料名：蒸器

素材：木・竹

使用民族：Meo（メオ）

収集年月日：1971年12月19日

収集地： Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：chuchumua'
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：H47.2cm、径 28.0cm
付属に竹製の箎がある。この蒸器については図版 19 を参照されたい。

<図版 20>

JC-1148 (旧番号 136)
資料名：裁縫箱 (牙・布入り)
素材：竹・木
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1971年12月16日
収集地： Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：patou
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：(箱) 蓋 H10.1cm、W18.5cm
身 H10.0cm
(牙) L5.6cm
(布) 左 L9.3cm、W9.4cm
右 L16.2cm、W5.7cm

箱の作りは、曲げ細工のようである。
布の刺繍はクロスステッチによるもので、「×」と「#」のような模様の組み合わせである。

JC-0934 (旧番号 070)
資料名：卦具
素材：水牛角
使用民族：メオ
収集年月日：1971年12月04日
収集地：Huay Sai (フェイサイ)

製作所：鍛冶屋 Sai の父所
現地名称：クウォ
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L12.3cm、W3.8cm、厚さ 1.3cm
地面に投げて、その広がりと向きで吉凶を占う (カノミ 1991)。

JC-3052 (旧番号 109)

資料名：口琴 (ケース付)
素材：金属
使用民族：メオ
収集年月日：1971年12月04日
収集地：Huay Sai (フェイサイ)
製作所：所有者氏名不明
現地名称：ncha' (ndja)
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：(口琴) L10.3cm、W1.1cm、
(ケース) L12.1cm
(ひも) L約 31.0cm
口琴の鳴らし方は 18 ページを参照されたい。

JC-0195 (旧番号 068)

資料名：物入れ
素材：瓢箪
使用民族：メオ
収集年月日：1971年12月03日
収集地：Mae tala (メエタラ)
製作所：No.2 所有
現地名称：記載なし
使用法：塩など
備考：記載なし
形態：全体 L46.2cm、H13.5cm、
口部 19.4cm×16.5cm

JC-1024 (旧番号 140)
資料名：大櫛
素材：木
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1971年12月16日
収集地：Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：jingen
使用法：カヤ(屋根葺)をすくのに使用
備考：記載なし
形態：L55.0cm(柄 L13.0cm)、W20.0cm

JC-1023 (旧番号 141)
資料名：大櫛
素材：竹
使用民族：Meo (メオ)
収集年月日：1971年12月16日
収集地：Mae Cho (メエチュウ)
製作所：記載なし
現地名称：jingen
使用法：記載なし
備考：or zoan jingen
形態：L51.2cm(柄 L13.2cm)、W9.2cm

<図版 21>

JC-0878 (旧番号 055-2)
資料名：パチンコ(土弾付)
素材：土・木
使用民族：メオ
収集年月日：1971年12月03日
収集地：Mae tala (メエタラ)
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：パチンコ L11.4cm、W6.7cm、

袋 L18.0cm、W14.0cm

(紐は計測せず)

弾 径約 1.6cm

袋は布を2枚重ねて作られている。土は赤土のように思われる。

JC-0877 (旧番号 055-1)

資料名：パチンコ(石付)

素材：土・木

使用民族：メオ

収集年月日：1971年12月03日

収集地：Mae tala (メエタラ)

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：パチンコ L13.9cm、W6.7cm、

袋 L20.0cm、W16.0cm

(紐は計測せず)

弾 径約 2.4cm

袋の布は、ナイロンの生地にみえるが、綿だと思われる。

JC-0564 (旧番号 395)

資料名：弩(付矢)

素材：記載せず

使用民族：Meo

収集年月日：1971年01月08日

収集地：Mae tho Lau Ton

製作所：Mae tho Lau Ton

現地名称：nen

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：弦 L77.0cm、台 71.5cm、

弓 L50.2cm

台には先端から24.0cmくらい溝が彫

られている。これは弓を安定させて台に置くために彫られていると思われる。

JC-0598 (旧番号 172)

資料名：籠

素材：竹

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月18日

収集地：Mae Cho (メエチュウ)

製作所：記載なし

現地名称：lukau

使用法：背負い

備考：記載なし

形態：底 26.0cm×22.5cm、H42.2cm
口 42.5cm×38.5cm

JC-1161 (旧番号 138)

資料名：腰刀 (鞘付)

素材：木・鉄

使用民族：Meo

収集年月日：1971年12月16日

収集地：Mae Cho

製作所：記載なし

現地名称：na'tiya

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：刀 L39.1cm (柄 L13.5cm)
鞘 L29.2cm、W5.5cm

柄に竹製の三つ編みの紐が 5.8cm 巻かれている。

JC-0689 (旧番号 139)

資料名：背負子

素材：木

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1971年12月16日

収集地：Mae Cho

製作所：記載なし

現地名称：ki

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L83.0cm、W22.0cm

肩をかける部分は皮製である。

JC-1136 (旧番号 370)

資料名：馬の頸鈴

素材：鉄

使用民族：Meo (メオ)

収集年月日：1972年01月18日

収集地：Mae tho La Tong

製作所：Mae tho La Tong

現地名称：tsu nen

使用法：馬

備考：記載なし

形態：L8.2cm、径 6.4cm

(中)L8.5cm、径 1.1cm

<図版 22>

JC-0375 (旧番号 408)

資料名：女性スカート

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：丈 66.0cm、裾・ウエスト回り寸法
87.4cm

幅 33.0cm の布 2 枚で作られている。

縫い代は折り伏せ縫いで始末しているよ

うにみえる。

備考：記載なし

形態：(左) 径 1.9cm、L3.2cm

(右) 径 1.9cm、H3.2cm

JC-0104 (旧番号 405)

資料名：ヘアピン

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：hlay sa-arng

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：(左) L21.0cm、(右) L21.4cm

JC-0107 (旧番号 508)

資料名：耳飾

素材：象牙?

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月10日 or 12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：(左) 径 1.9cm、L5.2cm

(右) 径 1.9cm、L5.2cm

JC-0105 (旧番号 404)

資料名：珥飾

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：plok

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：(左) 径 2.9cm、L2.0cm

(右) 径 3.0cm、L1.8cm

JC-0101 (旧番号 444)

資料名：手首輪飾

素材：鉄

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：(上) 径 6.2cm、(下) 径 7.4cm

JC-0106 (旧番号 509)

資料名：耳飾

素材：象牙?

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月10日 or 12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

JC-0102 (旧番号 421)

資料名：脚胖留め

素材：竹芯 金属捲き

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：sa kun lia
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：(上) 径 10.0cm、(下) 径 10.2cm

H76.5cm

ザル編みで作られている。底部の柱となる部分は木製と思われる。

JC-0103 (旧番号 422)

資料名：脚胖留め
素材：漆ぬり
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月12日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：sa kun long
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：径 9.5cm

木綿糸に漆を塗って作られているという (カノミ 1991)。

図版 22 に掲載されている女性スカート以外の資料について、当館の資料台帳には、地名欄に「Chiang Mai 西方」と記載されている。資料データの調査が今後の課題である。

<図版 23>

JC-0615 (旧番号 441)
資料名：長籠
素材：竹
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月12日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：底 9.0cm×8.5cm、口径 40.0cm、

JC-0623 (旧番号 409)

資料名：斧入れ
素材：記載なし
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月06日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：タクレオ
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L39.6cm、底部 L (W) 11.7cm、
口径 18.5cm

目がつまっていないアジロ編みと、口の部分はザル編みで作られていると思われる。

JC-1181 (旧番号 418)

資料名：鎌
素材：記載なし
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月12日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：a·ma
使用法：稲刈り用
備考：記載なし
形態：L28.6cm (柄 19.0cm)

JC-0945 (旧番号 419)

資料名：草刈鎌
素材：記載なし
使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：wag

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L36.6cm（柄 21.2cm）

JC-0315（旧番号 397）

資料名：肩掛袋

素材：記載なし

使用民族：Lawa（ラワ）

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：hau

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：袋の部分 L28.6cm（柄 19.0cm）

肩に掛ける部分 W10.0cm（二つ折）房 L7.5cm

幅 20.0cm の布を 2 枚使用して作られている。白色と緑色の糸でチェーンステッチがかけられている。

JC-0646（旧番号 410）

資料名：扇

素材：竹

使用民族：Lawa（ラワ）

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：kabat

使用法：モミとり

備考：記載なし

形態：L59.2cm、径 40.0cm

アジロ編みで編まれ、四つ編みしたもので縁取りされている。

JC-1118（旧番号 416）

資料名：背負子具

素材：記載なし

使用民族：Lawa（ラワ）

収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：ku-ri?

使用法：モミとり

備考：記載なし

形態：木の部分 L30.5cm

木の部分の穴に紐を通してある。使用方法の調査が今後の課題である。

<図版 24>

JC-0187（旧番号 435-4）

資料名：煙管口

素材：土

使用民族：Lawa（ラワ）

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L5.3cm、W6.9cm

JC-0188（旧番号 435-2）

資料名：煙管口

素材：土

使用民族：Lawa（ラワ）

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L4.9cm、W7.2cm

JC-0187 (旧番号 435-1)

資料名：煙管口
素材：土
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月12日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L4.8cm、W6.0cm

JC-0196 (旧番号 401-3)

資料名：煙管
素材：記載なし
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月06日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：mok
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L9.9cm

素材は銀と木だと思われる。

JC-0199 (旧番号 401-1)

資料名：煙管
素材：記載なし
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月06日

収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：mok
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L5.7cm、金属部分 径 3.0cm

素材は銀と木だと思われる。喫煙方法は図版 24 を参照されたい。

JC-0174 (旧番号 436-1)

資料名：煙管
素材：竹
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972年01月12日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L8.6cm

吸口は木製であると考えられるが、素材に関する検討も今後の課題である。

JC-3051 (旧番号 00345)

資料名：nib of a lute
素材：青銅製
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1970年03月25日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：象の彫刻
形態：L10.5cm、口径 1.2cm

資料の中に「Lawa nib of a lute From & Ban doi, Ampur Muany Chiengrai」

と書かれた紙が入っていた。

<図版 25>

JC-0011 (旧番号 521)

資料名：壺

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月10日～12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：叩き目あり

形態：H12.1cm、径 12.7cm、口径 6.2cm

JC-0013 (旧番号 不明)

形態：H21.6cm、径 21.6cm、口径 4.6cm

9個のくぼみがある形である。当館の資料台帳には、Lawa 族と記載されている。また、地名欄には Chiang Mai 西方とある。

JC-0018 (旧番号 517)

資料名：壺

素材：記載なし

使用民族：記載なし

収集年月日：1972年01月10日 or12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：短頸、褐黄釉

形態：H15.2cm、径 14.0cm、口径 5.4cm

中に入っていたタグ(荷札)には「Lawa 族」と記載されている。

JC-0004 (旧番号 522)

資料名：二重壺

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月10日～12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：H24.7cm、径 15.8cm、口径 4.5cm

展示しているラワ族の壺の中で、一番模様で装飾されている壺である。

JC-0023 (旧番号 518)

資料名：壺

素材：記載なし

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月10日 or12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：頸あり タタキ目あり

形態：H15.3cm、径 12.3cm、口径 5.2cm

飾りとして4つの突起物がある。

JC-0032 (旧番号 432)

資料名：甌

素材：土

使用民族：Lawa (ラワ)

収集年月日：1972年01月12日

収集地：記載なし

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：(431-433 で) 2組
※旧番号 431：酒壺、同 433：壺
形態：H14.8cm、径 19.0cm、側面の口径
4.4cm、上には三角形の穴が 8 個と、
その真ん中に径 2.5cm の穴がある。

JC-0926 (旧番号 437-3)

資料名：拍打具
素材：木
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972 年 01 月 12 日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：土器作り用
備考：以下 (判読不可能)
形態：L28.4cm (柄 L11.0cm)、厚さ 1.2cm
土器製作に使用し、これで叩いて成形
する。

JC-0924 (旧番号 437-1)

資料名：拍打具
素材：木
使用民族：Lawa (ラワ)
収集年月日：1972 年 01 月 12 日
収集地：記載なし
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：土器作り用
備考：以下 (判読不可能)
形態：L30.3cm (柄 L10.6cm)、厚さ 2.7cm
2 面に刻目がある。

<図版 26>

JC-0127 (旧番号 280)

資料名：首飾り

素材：銀
使用民族：yunnanese
収集年月日：1971 年 12 月 29 日
収集地：Nam Keung
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L31.5cm

飾りの一つには表と裏にそれぞれ 6 文字の漢字が彫られている。その文字については、図版 26 写真 1.~2.を参照されたい。

収集地 Nam Keung は、当館の資料台帳によると、ラオス領である。

<図版 27>

JC-0497 (旧番号 00227)

資料名：小児布沓
素材：記載なし
使用民族：Ho (Uunnanese)
収集年月日：1970 年 3 月 14 日
収集地：Ban Khrang
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：青布
形態：L15.0cm

JC-0498 (旧番号 00226)

資料名：小児布沓
素材：記載なし
使用民族：Ho (Uunnanese)
収集年月日：1970 年 3 月 14 日
収集地：Ban Khrang
製作所：記載なし

現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L13.0cm

JC-0499 (旧番号 00228)

資料名：黒沓
素材：記載なし
使用民族：Ho (Uunnanese)
収集年月日：1970年3月14日
収集地：Ban Khrang
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L23.5cm
製作方法はミシンで縫製されている。

JC-0503 (旧番号 233)

資料名：布草鞋
素材：記載なし
使用民族：中国人使用
収集年月日：1970年3月14日
収集地：Mae salong
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L26.0cm
製作方法はミシンで縫製されている。布は起毛したものを使用している。

JC-0502 (旧番号 232)

資料名：布草鞋
素材：記載なし
使用民族：中国人使用

収集年月日：1970年3月14日
収集地：Mae salong
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L26.0cm

製作方法はミシンで縫製されている。
JC-0503とは異なり、こちらの生地は起毛していない。

JC-0502とJC-0503について、当館の資料台帳では、民族名欄に「Ho」と記載されている。

JC-1016 (旧番号 111)

資料名：雑履
素材：麻
使用民族：雲南人
収集年月日：1971年12月05日
収集地：ニコム・バザー
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし
形態：L26.5cm

JC-1017 (旧番号 111)

資料名：雑履
素材：麻
使用民族：雲南人
収集年月日：1971年12月05日
収集地：ニコム・バザー
製作所：記載なし
現地名称：記載なし
使用法：記載なし
備考：記載なし

採集者：記載なし

形態：L26.5cm

ニコムとは、タイ政府の山地民福祉機関（Hill Tribe Welfare Center）のタイ語での通称である。

収集地：Phalae

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：記載なし

形態：L55.0cm

ナイロン製のロープと三つ編みで編まれた皮と金具を使用している。径約1.0cmの緑色のビーズが58個使用されている。

<図版 28>

JC-0957 (旧番号 00195)

資料名：団扇（大）

素材：椰子葉編

使用民族：Yunnanese

収集年月日：1970年03月12日

収集地：Ban Man-tang（満堂村）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：価格について記載のため、省略

形態：L41.6cm、W32.0cm

JC-1005 (旧番号 不明)

資料名：馬蹄鉄

素材：鉄製

使用民族：Ho

収集年月日：1970年03月14日

収集地：Ban Khrang

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考2：4個 a、b、c、dとした

形態：(a) L10.8cm、W7.8cm

JC-1005 のデータについては、旧番号が不明のため、当館の資料台帳に従った。

JC-0958 (旧番号 00196)

資料名：団扇（小）

素材：椰子葉編

使用民族：Yunnanese

収集年月日：1970年03月12日

収集地：Ban Man-tang（満堂村）

製作所：記載なし

現地名称：記載なし

使用法：記載なし

備考：価格について記載のため、省略

形態：L35.2cm、W20.5cm

(南山大学人類学博物館特別囑託)

JC-0936 (旧番号 00319)

資料名：馬面繫

素材：記載なし

使用民族：Yunna nese

収集年月日：1970年03月17日

Pottery making with the paddle and anvil technique
— Through the analysis of Lawa-tribe pottery (Northwestern Thailand)
in the Nanzan Anthropological Museum —

KUJI Daisuke

A traditional and well-known pottery making technique called “*Tataki-Giho*”(the paddle and anvil technique) in the Eastern and South-Eastern Asia is explored through the data of Lawa-tribe pottery in this paper. The analysis of the data in the Nanzan Anthropological Museum led to four results that would contribute to further studies in other regions, e.g. China: 1) the possibility of using “*Modama*”(Entada phaseoloides) as a paddle, 2) consistence of anvil notches and the pottery incisions by them, 3) the standardization of pottery size through the use of paddles, and 4) a necessity for further analysis of tools themselves, to have a better understanding of potters’ intentions, etc.

关于使用拍打法的制陶工艺
—以泰国西北 Lawa 族的制陶资料的介绍为中心—

久慈大介

在东亚·东南亚一带相当宽广的地域的史前时代，存在着被称作拍打法的制陶技术一直广为人知。即使现在，也存在使用拍打法制陶技术的地域，有此可知拍打法这种制陶技术，从古至今绵绵不绝地被继承着。

本文，将在介绍南山大学人类学博物馆收藏的有关拍打法的 Lawa 族的制陶资料的基础上，进一步对从这些观察所得结论加以若干的考察。

得出下列结论，①榿藤 (*Entada phaseoloides*) 的种子有被用作陶垫的可能性，②陶拍上的刻纹和呈现在土器表面上的纹样表现出了反转现象，③制陶工具在一定程度上有可能成为产生出陶器规格性的要因，④工具的制造对这个问题的研究的必要性等，并提出了对今后拍打法研究的几个课题及其展望。

叩き技法を用いた土器作り

—西北タイ Lawa 族の土器作り資料の紹介を通して—

久慈大介

1. はじめに

東アジア・東南アジア一帯のかなり広い範囲（中国、朝鮮半島、日本、東南アジア諸国、インド、シベリアなど）や南洋諸島、あるいは北アメリカの先史時代において、叩き技法と呼ばれる土器作り技法が古くから存在していたことは良く知られている。現在でも、東南アジア、フィリピン、中国の雲南省、インド、南洋諸島などにおいては、この叩き技法を用いた土器作りが行われている地域があり、この技法が古代から現在に至るまで綿々と受け継がれてきたことがわかる。

叩き技法を用いて作られた古代の土器の具体的な製作工程や身体技法などを解明するため、あるいはまた、そのような土器が作られていた往時の社会構造を復原するために、現代に生きる叩き技法を観察し、それを古代へフィードバックさせて類推することは、遺物として残る「モノ」としての土器は見ることも、直接それらを作る「行為」そのものは見ることはできない考古学研究者にとって非常に有益で、大きな示唆を与えてくれる。もちろん、現代に生きる叩き技法と往時の叩き技法では、長い年月を経たことによるさまざまな相違があるだろう。また、地域によっても、それぞれの個別的な歴史的・社会的あるいは生態的な背景に基づきながら、さまざまな形にそれぞれの叩き技法が変化していった

に違いない。しかしながら、そのような時間的・地域的な相違点を十分に考慮に入れてもなお、現代に生きる叩き技法から得られる新たな知見や情報は、古代における土器作りという問題に多くの示唆をわれわれに与えてくれる。

ところで、南山大学人類学博物館には、西北タイに居住する Lawa 族から収集した土器作り関連資料が所蔵・展示されている。そしてそれらは、まさに叩き技法と呼ばれる土器作りに密接に関連する資料でもある。そこで本稿では、それらの資料を簡単に紹介し、また若干の考察を加えながら、叩き技法の持つ意味やその今日的な問題点について考えてみたい。

2. 叩き技法の概要

叩き技法 (paddle and anvil technique) とは、土器作りのある段階において、土器の内面を当て具 (anvil) で押さえながら、その外面を叩き具 (paddle) で叩き締めて成形するひとつの土器作り技法である。特定の当て具を用いずに、手や指を内面に押し当てながら外面を叩くという方法も民俗例により知られる。

叩き技法を用いて作られた土器には、外面に叩き痕・叩き目が、また内面には当て具痕が残っていることが多く、基本的にはそれらによって叩き技法が用いられたかど

うかが判別される。

叩き技法に関しては、学史的に大きな二つの潮流があり、ひとつは民族誌的側面からの研究で、自身がフィールドワークを行って「今に生きる」土器作りを実際に観察して知見を得たり、あるいは民族誌の事例分析を通してのその解明を求めるもので、もう一方は考古学的側面からの研究で、遺物の詳細な観察を通じ、「当時のもの」からその解明を目指すものである。

(1) 東アジア・東南アジア一帯における叩き技法に関する民族誌的調査・研究

叩き技法を用いた土器作りに関しては、東アジア・東南アジア一帯を中心として、これまでに多くの民族誌的な調査・研究がなされてきた。古くには鳥居龍蔵による台湾阿眉種族の土器作りに関する報告があり（鳥居 1897）、さらに鳥居は同じ台湾の阿里山蕃の土器作りに関する報告も残している（鳥居 1901）。

1940年代には、狩野忠雄による台湾紅頭嶼ヤミ族の土器作りに関する報告（狩野 1941）があり、50～60年代には清水潤三によるカンボジアにおける土器作りに関する報告（清水 1959、1963）がある。70年代には、当時「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」（後述）の一員としても当調査に参加していた量博満によるタイ北部 Ban Sen Sai（センサイ村）における土器作りの報告（量 1973）、宇野文男によるフィリピン・ルソン島北部に位置するパタン諸島、および台湾紅頭嶼における土器作りの報告（宇野 1974）、高田一夫によるタイ北部のバン・ハンケオにおける土器作りの報告（高田 1975）、角林文雄によるニューギニアの

土器作りに関する報告（角林 1977、1978）などがある。80年代には青柳洋治らによるフィリピン・ルソン島における土器作りの報告（青柳・岡崎 1981、青柳 1982）、中村浩による中部ジャワにおける土器作りに関する報告（中村 1982）、横山浩一による佐賀県横枕の叩き技法を用いた大甕作りに関する報告（横山 1982）、瀬川芳則によるタイ西北部のバン・ハンケオにおける土器作りの報告（瀬川 1983）、今村啓爾によるタイ北東部のバン・カム・オーにおける土器作りの報告（今村 1989）、金子量重によるタイ北部のバン・ハンゲオ、バン・ノイにおける土器作りに関する報告（金子 1989）などがある。90年代には、西谷大による中国・海南島における土器作りの報告（西谷 1991）、小林正史によるフィリピン・カリంగా族の土器作りに関する報告（小林 1993）、榎崎彰一らによる東北タイにおける土器作りに関する報告（榎崎ほか 1994）、福本繁樹による南洋諸島一帯における土器作りに関する報告（福本 1994）、脇田宗孝によるインドネシア・ラテレン村における土器作りの報告（脇田 1994）、後藤明による東部インドネシア・ティドレ地方における土器作りに関する報告（後藤 1997）、大西秀之によるフィリピン・ルソン島北部山岳地帯に居住するカンカナイの人々の土器作りに関する報告（大西 1998）、田中和彦によるフィリピン・ルソン島北部のサンタ・マリア町、キナガビアン村における土器作りの報告（田中 1998）、津田武徳によるミャンマー・マンダレー周辺における土器作りの報告（津田 1999）などがある。2000年以降では、カンボジア南部の Chanlak Dai における土器作りに関する報

告 (Kojo and Marui 2000)、時津裕子らによる東北タイにおける土器作りに関する報告が知られる (時津 2003、中園・時津 2004)。

そのほか、他の研究者の民族誌を紹介したものとして、坂井隆によるインドネシアの土器作りに関する民族誌の紹介 (坂井 1984)、深澤芳樹による叩き技法に関連する民族誌の紹介 (深澤 1995)、吉田恵二による中国雲南省の土器作りに関する民族誌の紹介 (吉田 2002) などがある。

また、中国では雲南省に居住する少数民族による土器作り事例が多く報告されており、その主なものとして、李仰松による佤族の土器作りに関する報告 (李 1958)、張季による西双版纳地区に住む傣族の土器作りに関する報告 (張 1959)、林声による景洪地区に住む傣族の土器作りに関する報告 (林 1965)、同じく景洪地区に住む傣族の土器作りを観察した傣族製陶工芸連合考察小組による報告 (傣族製陶工芸連合考察小組 1977)、周達生による西双版纳地区に住む傣族の土器作りに関する報告 (周 1979)、李根蟠・盧勳による碧江県に住む怒族の土器作りに関する報告 (李・盧 1984)、楊原による元謀県紅告村に居住する漢族による土器作りに関する報告 (楊 1986)、汪萃生による西双版纳地区に住む傣族の土器作りに関する報告 (汪 1989) などが挙げられる。

(2) 近年の叩き技法に関連する民族誌的研究の動向

このように東アジア・東南アジア一帯においては、叩き技法を用いた土器作りに関して多くの民族誌的調査がなされ、民族誌的データが蓄積されてきた。そのようなな

か、小林正史はこれらの民族誌を収集・分析し、東南アジア一帯における叩き技法を用いた土器作りの体系化を積極的に試みている (小林 1993b、2001、2003)。

小林は、粘土の準備から土器の焼成に至るまでの土器作りの一連の工程を、各地域ごとにその特徴を抽出することにより、それらの比較を通して叩き技法を用いた土器作りの地域性を捉えようと試みる。例えば、細部には細かな違いがあるとしながらも、東南アジア一帯における叩き技法を用いた土器作りの工程には「素形 (一次原型)」を作り出す方法として、①円盤状の底部を作った後、紐積みによって円筒形の側壁を作り、その後、叩いて胴部を球胴化する方法 (「紐積み法」、②粘土塊に棒状のものを差し込んで転がしたり、平たい粘土板を筒状に丸めたりして円筒状の素形を作り、その後叩いて成形する方法 (「中空粘土円柱技法」、③粘土塊の上部を手や小石など用いて窪みを作り、それを押し広げながら側壁を成形し、その後叩いて成形する方法 (「手ひねり」)、という大きく 3 つのタイプに分類することが可能であるとし、土器作りにおけるこのような工程間の特徴を比較・検討することにより、東南アジア一帯における叩き技法の地域性を捉えようというのである (小林 2003)。

このように小林などによってこれまでの民族誌の体系化が目指され、土器作りの工程における「叩きの類型化」が図られる一方で、後藤明はまた別の視点から「叩き」を捉えようと試みる (後藤 1997・2001・2004)。

後藤によれば、土器製作者は微調整のなかでさまざまな動作を駆使しながら作業を

進めており、土器作りの工程はステップとして序列化されるが、その序列の間にはさまざまな重複・反復・省略などがあり、各工程のなかで行為のレパートリーの中から必要な行為を選択して組み合わせて土器作りを行っているという。そのため、それぞれ異なった土器作りの工程においては適応される叩きの「脈絡」も異なると考え、叩くという行為が行われるその「脈絡」を重視すべきであるとする。そして、叩きを土器作りの工程における「段階」として捉えるよりも、むしろ土器作りという行為のなかの「レパートリーの一つ」として捉えるべきであるとする。「動作の連鎖 (Chaîne opératoire)」という理論的概念を重視した後藤の一連の研究は、土器作り工程のなかにおける「叩き」の意味を問い直すものとして非常に示唆的である。

(3) 叩き技法に関する考古学的研究

前節で概観した民族誌的な調査・研究が、主に今日に生きる叩き技法を分析対象としているのに対し、我が国では弥生時代のある時期から叩き技法を用いた土器作りが行われていたことが明らかとなっており²⁾、叩き技法は考古学的研究の対象ともなってきた。

考古学的な視点にもとづいた叩き技法の研究は、出土した土器の詳細な観察を通じて当時の叩き技法を用いた土器作りの工程を具体的に解明することにその主眼が置かれ、例えば、弥生土器に見られる叩き技法を具体的に明らかにした都出比呂志の研究 (都出 1974、1986)³⁾、須恵器に見られる叩き技法を具体的かつ詳細に分析した横山浩一の研究 (横山 1980)⁴⁾、平瓦の製作に

おける叩き技法を分析した佐原真の研究 (佐原 1972) などを嚆矢として、古代における叩き技法を用いた土器作りの工程が次第に明らかにされ、より具体的な議論ができるようになった。

現在では、新たな資料の増加に伴って通文化的な比較・検討も可能になりつつあり (深澤 1998)、あるいはまた通時的に叩き技法を用いた土器作りを捉えて、その技術的な変遷から地域文化の動態を捉えようとする試みが数多くなされている。さらには技術論的な視座から、当時の土器製作者集団の解明に迫ろうとする研究 (三好 1994) などもなされるなど、より他系的な研究が試みられている。

また、我が国における叩き技法は、その系譜上朝鮮半島と密接な関わりがあることが常々指摘されており、日本国内のみならず朝鮮半島における叩き技法に関しても強い関心が払われている (例えば、郭 1987、寺井 2002、深澤・李 2004)。

中国では新石器時代以降、叩き技法を用いた土器作りが各地でより普遍的な存在となっていくが、近年、江西省万年県仙人洞遺跡や広西壮族自治区桂林市甑皮岩遺跡などから、紀元前 9000 年頃に遡る、叩き技法と密接な関係を持つ「粘土片貼り合わせ法」を用いて作られた土器が出土しており、叩き技法の起源を考えるうえで注目されている⁵⁾。また、ベトナムでは起源前 4000 年頃以降、タブート文化やクインヴァン文化などにおいて叩き技法を用いて作られた土器が出土しており、技術上の関連性や年代的な関係性から、中国における叩き技法との関連性が注目されている。

もちろん、古代における叩き技法の広が

りを、単に伝播主義的な視点のみで捉えることは危険であろう。しかしながら、古代の東アジア・東南アジア一帯において、叩き技法を用いた土器作りが広く行われていたのは事実であり、それがあつた特定の地域から伝播したものであつて、それぞれが個別的に派生したものであつて、やはり叩き技法という土器作りは東アジア・東南アジア世界という大きな枠組みのなかで相対化して捉える必要があるように思われる。そういう意味において、今後の叩き技法に関する考古学的な研究は、日本国内のみならず、中国や朝鮮半島、東南アジアなどにおける叩き技法にも積極的に目を向け、より広い視野からの研究が必要となつてくるものと思われる。

(4) まとめ

以上のように、叩き技法を用いた土器作りに関しては、民族誌的な側面からの研究と、考古学的な側面からの研究という、双方からアプローチがなされている

民族誌的な手法を用いた研究は、実際に叩き技法を用いた土器作りを観察したり、あるいはまた他の研究者による民族誌を分析対象とするため、土器作りという実際の「行為」そのものに対して分析を加えることができるという大きな利点がある。そのため遺物という静態的な「モノ」からしか想定し得ない考古学的な研究に対して多くの問題を提示し、大きな示唆を与えてくれる。

一方、考古学的な手法を用いた研究は、古代に行われていた土器作りの「行為」そのものを実際に見ることはできないが、遺物という残滓からその「行為」を復原する

ことが可能である。つまり、民族誌的な調査では明らかにしえない、現在ではその伝統がすでに失われてしまった地域の叩き技法や、過去のある時点における叩き技法を、遺物を通して読み取ることができるという大きな利点がある。

このように、民族誌的な側面からの研究と考古学的な側面からの研究には、双方にそれぞれ固有の研究上の利点と限界性が存在するが、今日までその伝統が受け継がれている叩き技法に関しては、それぞれの利点をそれぞれの研究に有用にフィードバックしながら相互補完的に研究を進めることが可能であり、同時にそれは叩き技法研究の大きな特徴ともなっている。そのような意味において、叩き技法に関する研究は今後さらに大きな可能性を秘めていると言え、叩き技法という「技術」を通じて新たな東アジア・東南アジア像が描けるかもしれない。

以上のように、叩き技法研究は今日的に大きな意義を持っており、そのような意味において、当博物館に所蔵されている叩き技法に関連する土器作り資料をここで紹介することは、それまで眠っていた情報を顕在化させ、また叩き技法に関連するデータベースを増やすという意味においても決して無駄なことではないと思われる。

また、民族誌的な調査・研究において、土器作りの工程については多くの報告がなされているものの、土器作りで用いられる「道具そのもの」に着眼した報告・研究は非常に少なく、また考古学的な研究においても、叩き具や当て具といった道具は遺物として残りにくいといった点から、道具そのものに着目した研究はまだ少ない。

このような現状を踏まえ、本稿では叩き技法による土器作りにおいて用いられた道具そのものについて詳細に記述するとともに、道具そのものの観察を通して導き出される知見や問題点について考察を加え、今後の叩き技法研究における課題をいくつか提示してみたい。

3. 西北タイ Lawa 族の叩き技法に関連する土器作り資料

叩き技法に関する研究を概観し、叩き技法研究の持つ可能性や今日的な意義を再確認したうえで、ここからは当博物館が所蔵する Lawa 族の土器作り資料に関して紹介していきたい。まず最初に、資料の経緯やその収集地等の概要について述べておこう。

(1) 資料の経緯

1967 年から 1974 年にかけて、当時上智大学教授であった白鳥芳郎を団長とし、西北タイに居住する少数民族の調査をその主な目的として計三次にわたって「上智大学西北タイ歴史・文化調査」が行われた（白鳥・竹村 1970、中塚 1972、白鳥 1975、1978）。当博物館には、この調査によって得られた貴重な資料やデータの一部が上智大学からの寄贈という形で所蔵・展示されている。ちなみに、それらの資料が当博物館に寄贈された詳細な経緯や、その一部の資料についてはすでに当博物館『紀要』第 22 号上で紹介されているので参考にされたい（後藤 2004、重松 2004）。

(2) 資料に関する基礎情報

さて、上述した「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」（以下、「調査団」と記載）に

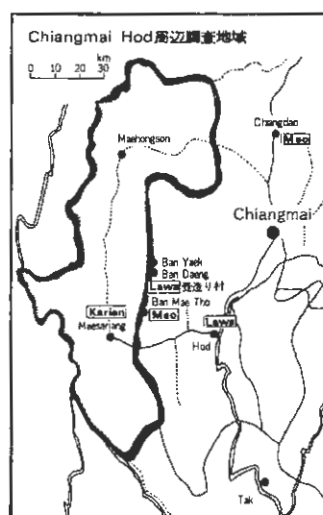


図1 「調査団」による Chiangmai 付近の調査地域
(白鳥芳郎編 1978 より 一部改変)

よる調査で得られた資料のうち、当博物館に所蔵・展示されているもののなかに、本稿で取り上げる Lawa 族から収集した叩き技法に関連する土器作り資料がある。

断片的に残されている当時の調査記録によれば⁶⁾、これらの土器作り関連資料はすべて、第二次調査時の 1972 年 1 月 12 日に Chiangmai (図版 29、1) 付近で Lawa 族から収集したものとされている。具体的に何という村に住む Lawa 族から収集したものなのかは明らかではないが、当時「調査団」が立ち寄ったとされる Chiangmai 西方に位置する Ban Daeng や Ban Yaek (図 1)、あるいはその付近に居住する Lawa 族から収集したものであると思われる⁷⁾。

なお、当博物館には「調査団」が調査時に撮影した貴重な 8 mm フィルム（劣化を防ぐため、現在ではメディアを DVD に替え保存してある。希望すれば視聴可能）やスライド、そのほか無数のスナップ写真も保管されている。そのなかに、本稿に関連の

ある Lawa 族の男性が土器作りを行っている様子が写された写真があったので参考までに挙げておきたい (図版 29、2・3)。

(3) 収集地付近の地理的・生態的環境

次に、資料の収集地付近の地理的・生態的環境について述べておこう。

資料の収集地である Chiangmai 一帯は、地帯区分として、雲南やチベット東部に繋がるヒマラヤ隆起帯の一部をなす大陸山地部に属する (図 2)。また、気候区部としては、ケッペンによる気候区分ではサバナ気候に属し、アリソフの気候区分では赤道モンスーン帯に属する。

植生としては、インド・マレーシア植物亜界に属し、フタバガキ科の分布をその代表とする。そのほか、ブナ科のクリガシ属 (シイの仲間、*Castanopsis*)、マテバシイ (*Lithocarpus*)、コナラ属のアカガシ亜属 (*Cyclobalanopsis*) など当地域を代表する樹木群である (京都大学東南アジア研究センター編 1997)。

かつてランナー王国の都としても栄えた古都 Chiangmai は、タイ西北部に位置し、チャオプラヤ川の支流のひとつであるピン川流域に立地する。周囲を海拔 1000m を超える山々に囲まれた独特の山間盆地的景観を有しており、ピン川とその支流から形成される扇状地状の地形が発達している場所でもある。多様な生態的環境を持つ Chiangmai 盆地では、盆地中央部において水田稲作が行われ、盆地周辺部の丘陵・山岳地帯では、焼畑による陸稲栽培が営まれている。

Chiangmai は、中国西南部 (雲南方面)

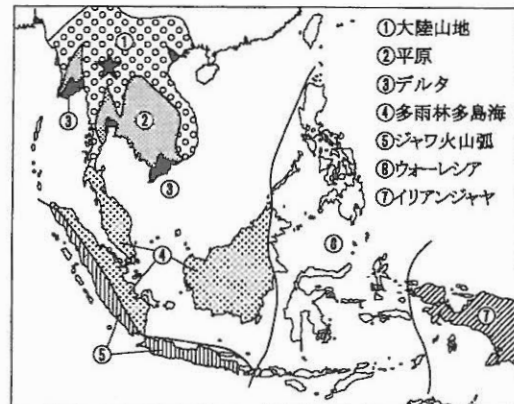


図 2 東南アジア一帯の地帯区分

★が Chiangmai の位置
(京都大学東南アジア研究センター編 1999 より 一部加筆)

からタイ平原部へ抜けるルート上に位置しており、またミャンマーを經由してベンガル湾に出ることもできる古来からの交通の要衝であった。そのような地理的特性から、Chiangmai 一帯には、中国南方の湖南・貴州・広西・広東などから北ヴェトナムやラオス山地高原を經由して移り住んだといわれる苗族やヤオ族、あるいは東部チベット高原から四川や雲南を經由して移動してきたとされるアカ族・リス族・ラフ族など、さらには雲南から移住してきたシャン族やタイルー族などの多くの少数民族がモザイク状に点在して居住するという特殊な環境を生み出した。そしてまた、Chiangmai 一帯に居住する少数民族の一派として Lawa 族も加えることができる。

(4) Lawa 族

Lawa 族は、オーストロアジア語族モン・クメール語派系の民族で、ラオスのラメットや、ミャンマー・中国雲南省のワ (佯族) と同系統に属す民族である。現在、その多くがタイ北部の山岳地帯から西部にかけて

居住している。

他の多くの少数民族と同様、民族の起源やタイに到った移動経路等に関しては不明な点が多いが、一般的な見解として7世紀にはすでにタイ北部に移動し、そこで生活を営んでいたとされる。13世紀に入ると、タイ北部の山間盆地には「タイ系小国家群（ムアン）」が形成され、Chiangmai 一帯にはその中心的な存在であったランナー王国が築かれるが、そのランナー王国で行われた王室儀礼のなかには Lawa 族にその系譜を求めることができるものがあり、これらのことから Lawa 族はランナー王国成立以前の Chiangmai 盆地の先住民であったと考えられている。その後、現在のタイ北部の平野部を占めるコンムアン（タイユアン）の台頭により、一部はコンムアン（タイユアン）のなかに同化され、また一部は山間部への後退を余儀なくされ、現在に至る。

Lawa 族の生業は、山地に住むか平地に住むかで異なり、前者は主として山麓付近で焼畑による陸稲の栽培を、後者は植田方式による水稻耕作を主とする。本稿で紹介する資料は Chiangmai 西方の丘陵・山岳部に居住する Lawa 族から収集したものであると思われ、彼らの生業としては後者、すなわち焼畑による陸稲の栽培を主としていたものと考えられる⁸⁾。

(5) 資料とコンテクスト

以上、ごく簡単にはあるが、本稿で取り上げる Lawa 族の土器作り資料に関し、当博物館が所蔵するまでに至った経緯、資料の基礎情報、資料収集地の地理的・生態的環境、収集した民族に関する基礎的情報

について言及した。

これは、これらから紹介する資料をできる限りその資料の持つ歴史的・生態的・社会的背景などの文脈のなかで捉えていくことが重要であると考えからである。考古学においても、遺物そのものだけに着目するのではなく、そのコンテクストとともに理解しなくてはならないということはあまりに自明なことであるが、得てして単に資料そのものの事実記載だけになりがちな博物館所蔵の民族資料の紹介において、そのような問題点を少しでも軽減するため、資料の持つ背景等に関しても言及を加えた。

4. 資料の記述

さてここからは、当博物館が所蔵する Lawa 族の土器作り資料について紹介していきたい（なお、以下で用いられる叩き具各部位の名称については図3を参照のこと）。

(1) 叩き具

a. JC-0924

資料番号 JC-0924 (図4-1、および図版30、1-1・1-2・1-3) は、Chiangmai 西方で Lawa 族から収集したとされる木製の叩き具である。長さ 30.0cm、幅 5.5cm、厚さ 2.5cm、重さ 205g で、長方形の打面部と柄の部分からなる。木材を木目方向に長く切って作られている。

打面部正面には幅約 7.4cm にわたって、木目に直行する形で 21本の刻み目が入れられており⁹⁾、打面部の右側面にも同様に 21本の刻み目が入れている。左側面および背面には刻み目はない。刻み目の深さ

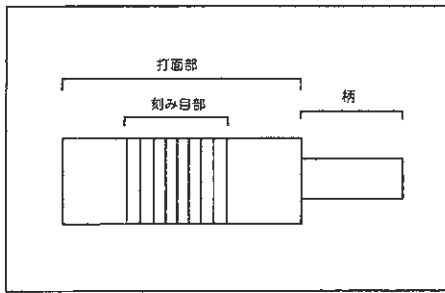


図3 叩き具各部位の名称

はそれぞれ 0.2cm ほどである。

刻み目の中央部付近には、縦 4.0 cm、横 3.6 cm ほどの範囲でごく浅い窪みが見られ、この部分は刻み目が摩り消されてしまっている。おそらくこれは、土器の内面に当て具を当て、その外面を繰り返し叩いたことによって生じた磨耗痕であろう。

刻み目部は、この磨耗痕付近を中心として、ごくわずかに凹状に湾曲している。打面部右側面の刻み目部も、わずかに凹状に湾曲している。

b. JC-0925

資料番号 JC-0925 (図 4-2、および図版 30、2-1・2-2・2-3) も、Chiangmai 西方で Lawa 族から収集したとされる木製の叩き具である。長さ 27.5cm、幅 3.6cm、厚さ 3.6cm、重さ 232 g で、先述した JC-0924 より厚手の打面部と柄の部分からなる。木材を木目方向に長く切って作られており、打面部の先頂は「山」型になっている。

打面部正面には斜め方向に 14 本の刻み目が入れている。また打面部の右側面にも斜め方向に 15 本の刻み目が入れている。左側面および背面には刻み目はない、刻み目の深さは 0.3 cm ほどで、その断面から V 字状の工具を用いて刻んだことが

わかる。

打面部正面の刻み目部は、その中央付近を中心として深く窪んでおり、大きく凹状に湾曲している (図版 31、1)。打面部右側面の刻み目部も、正面部と同様に深く凹状に湾曲している。

c. JC-0926

資料番号 JC-0926 (図 4-3、および図版 30、3-1・3-2・3-3) も Chiangmai 西方で Lawa 族から収集したとされる木製の叩き具である。長さ 28.5cm、幅 4.5cm、厚さ 0.8cm、重さ 47 g で、長方形の打面部と柄の部分からなる。木材を木目方向に長く切って作られている。

前の 2 者 (JC-0924、JC-0925) とは大きく異なり、全体的に薄く作られており非常に軽い。また、どの面にも刻み目は見られない。打面部もほぼ平らである。ただ、打面部の先端付近の一方の側縁部に顕著な磨耗痕が確認できる (図版 31、2)。打面部の背面にも同様に、先端付近の一方の側縁部に顕著な磨耗痕が確認できる¹⁰⁾。

(2) 当て具

上述した叩き具のほか、当博物館には Lawa 族から収集した当て具と思われる資料も所蔵されている¹¹⁾。

JC-0929a (図版 32、1-1・1-2) は、最大幅 4.0cm、厚さ 1.3cm、重さ 13 g で、わずかな厚みを帯びた円形状を呈している。表面はわずかに凸状に湾曲しており、また滑らかであることをその特徴とする。

JC-0929b (図版 32、2-1・2-2) は、最大幅 4.2cm、厚さ 1.4cm、重さ 14 g で、大きさ、形状、特徴などは、前述した JC-0929a

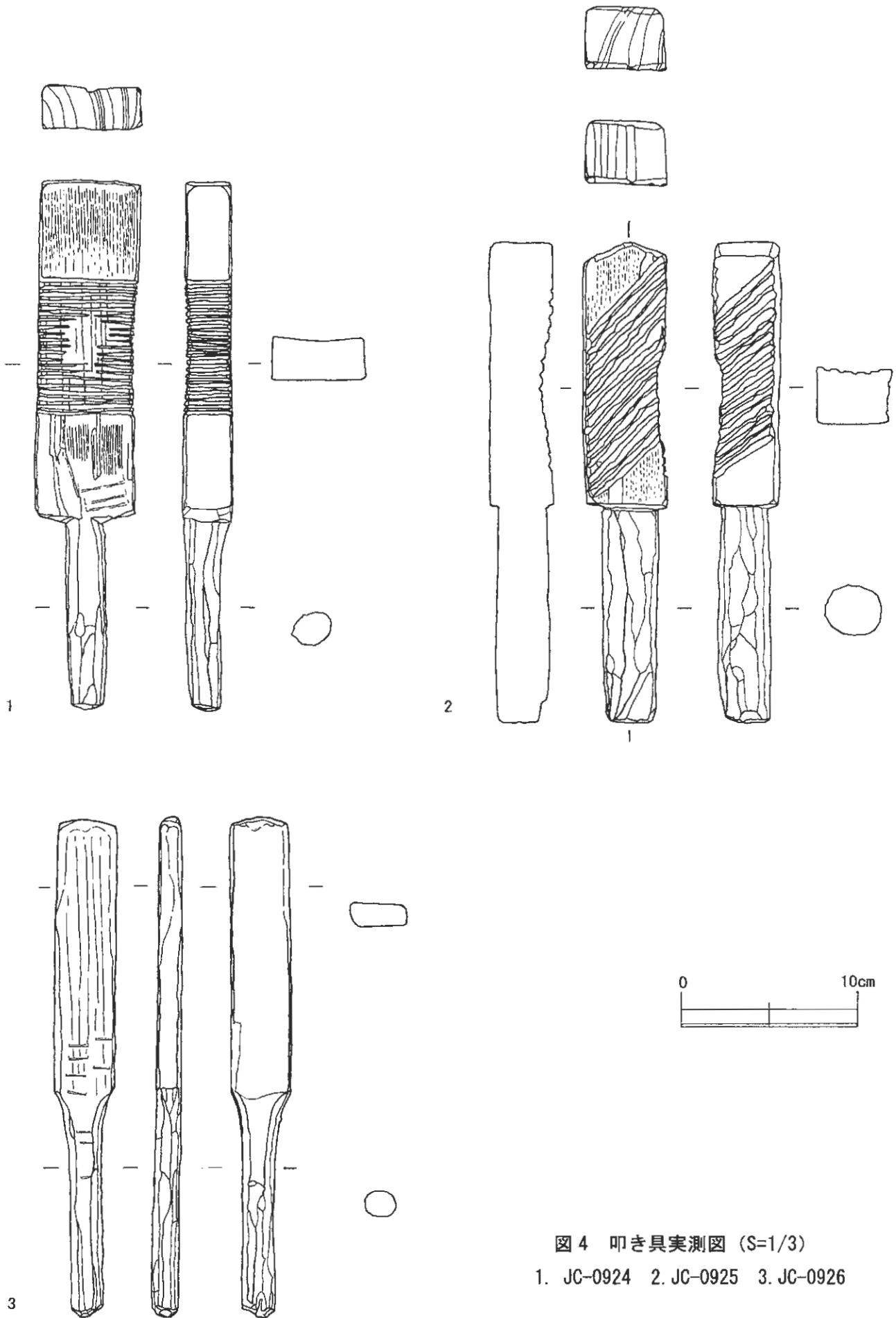


图4 叩き具実測図 (S=1/3)

1. JC-0924 2. JC-0925 3. JC-0926

とほぼ同じある。

JC-0929c (図版 32、3-1・3-2) は、最大幅 3.9cm、厚さ 1.9cm、重さ 16 g で、前の 2 点よりも若干厚みを増すが、ほぼ同様の特徴を持っている。3 点とも、明確な磨耗痕などは見られない。

5. 考察

以上、当博物館が所蔵する Lawa 族の土器作り資料の紹介を行った。そこで本章では、それらの資料の観察を通じて得られた問題点等に関し、若干の考察を加えてみたい。

(1) 当て具 (JC-0929a、JC-0929b、JC-0929c) に関して

最初に、上述した当て具 (JC-0929a、JC-0929b、JC-0929c) に関して考察を加えてみたい。

まずこれらの資料の材質であるが、一見すると小石のようにも見える。しかし、それぞれの重さは 13~16 g ほどであり、石としてはやや軽いことや、色が総じて黒褐色であるという点などから考えて、石ではないように思えた。

そこで、さまざまな角度から調べた結果、これらはモダマ (*Entada phaseoloides*) というマメ科植物の種子であることが明らかとなった。

モダマ (図版 33、1) は、屋久島以南から、東南アジアや南洋諸島にかけての海岸付近の常緑樹林の中に生える、大型のつる性の常緑木本である。幹の直径は 30cm ほどで、長さが 1m に達する木質の豆果をつけ (図版 33、2)、その中に 9~13 個ほどの

黒褐色の種子を持つ (図版 33、3)。種子は楕円または円形で全体的にわずかに湾曲し、直径は約 3.5~5.0cm ほどである。非常に硬質であることをその特徴とする。名は「藻玉」の意で、海岸に漂着した種子を海藻の種子と考えたためと言われている。種皮は革質化しており、内部の子葉間に空所があり、海上を漂着してその分布を広げる (佐竹ほか 1993、牧野 1990)。

モダマの種子 (以下、単にモダマと表記) は日本においても古くから海辺に住む人によって拾われ、タバコ入れや印籠の根付などに使われたりして大切に保存されてきた (中西 1990)。

伊能嘉矩は、「台湾土蕃の自然物利用」と題する論文のなかで、「物質の堅さの利用」としてモダマを取り上げており、「藻玉の類の扁平なる堅実の中央に孔を穿ち、細き竹の軸を貫きて、紡錘車を造り、又同様にして翫弄用の独楽を造ります」と、台湾のアタイヤル族の人々がモダマを紡錘車や独楽として利用していたことを報告している (伊能 1906)。

そのほかにも民俗例などから、モダマが薬入れや石鹼として用いられることがあることが知られるが、先に紹介した民族誌的調査において、モダマが土器作りに用いられたという事例は一例も見られない。

そのような点から、これらのモダマが本当に当て具として用いられていたものなのかということに対して慎重に議論しなければならないが、以下の点がこの問題に対していくつかの示唆を与えてくれる。

すなわち、叩き技法を用いた土器作りにおいては、当て具は基本的に叩き具とセットで用いられると考えられるが、これらの

モダマは先に紹介した叩き具（JC-0924、JC-0925、JC-0926）と同じ日に Lawa 族から収集されたものであること、また、叩き具 JC-0924 に残る磨耗痕の大きさ（縦 4.0 cm、横 3.6 cm ほど）とモダマの大きさ（3.9～4.2 cm）がほぼ一致すること、さらには叩き具 JC-0925 の刻み目部に見られる窪みとこれらのモダマがちょうど良い具合に適合する（図版 33、4）といった状況が看取でき、叩き具との関係性という側面から考えた場合、これらのモダマと叩き具の間には強いセット関係がうかがえるのである。

叩き技法に用いられる当て具としては、これまで石製や土製（陶製）、あるいは木製のものが一般的な事例として知られるが、先にも述べたとおり植物の種子であるモダマが当て具として用いられたという事例は今のところ見られない。今後さらなる検討・検証が必要となってくるであろうが、叩き具との関係性から、ここではこれらのモダマが当て具として用いられたものとして捉えておきたい¹²⁾。

(2) 叩き目の考察—初歩的実験を通じて—

① 初歩的実験

前章で紹介した叩き具を用いて実際に粘土を叩いてみた場合、粘土上にはいかなる叩きの痕跡が残るのかという問題は、考古学的見地からして非常に興味深い問題である。そこで今回、JC-0924 と JC-0925 の二つの叩き具を用いて初歩的な実験を行い、考察を加えることにした。

ここであえて初歩的と言うのは、このような実験をより実際に即した形で行うためには、叩かれる粘土の質・形状（本来、叩

き具で叩く土器外面の粘土は直線的なものではなく、湾曲しているはずである）・厚さ・乾燥度合い・叩き具との位置関係、叩くときの力の入れ具合やその方向性・角度、さらには当て具の種類やその有無・その位置など、さまざまな条件を設定し、その条件下で逐一叩き、そのうえで粘土上に残された叩き目を観察する必要があると考えるからである。このような実験的手法を用いた研究¹³⁾は、叩き技法研究において今後なされるべき重要な課題であり、それは叩き技法の解明に大きな役割を果たしていくものと思われる。

ただ今回は、そのような実験を行う条件が整っていないため、単に叩き具に粘土を押し付け、いわば「型」をとるという方法を用い、叩き具の刻み目が粘土上にいかに転写するのかという点のみを観察した。

a. JC-0924

JC-0924 の打面部正面の刻み目部（図版 34、1-1）を粘土上に押し付けると、粘土上には図版 34、1-2 のようにその刻み目が転写する。叩き具に施された刻み目は、粘土上では凸線となって転写され、また逆に刻み目が入れられていない箇所は、凸線に挟まれた凹線となる。刻み目部の中央付近に存在する磨耗痕と考えられる箇所は、粘土上でも空白部分となっており、ほとんど何の痕跡も残さない。また、叩き目と直交して縦方向に走る木目が粘土上にも転写していることが確認できる。

b. JC-0925

JC-0925 の打面部正面の刻み目部（図版 34、2-1）を粘土上に押し付けると、粘土上

には図版 34、2-2 のようにその刻み目が転写する 叩き具に施された刻み目は粘土上では凸線となって転写され、逆に刻み目が入れられていない箇所は、粘土上では凸線に挟まれた凹線となって転写する。また、縦方向に走る木目が粘土上にもわずかにではあるが転写している。

②実験の結果から

先にも述べたとおり、今回の実験は初歩的なものであり、この結果から多くを述べることはできないが、実験の精度に関わらず、指摘しておきたい点がひとつある。

それは、JC-0925 のように、叩き具に斜め方向の刻み目が入れている場合、その叩き目としては左右が逆転した形で粘土上に転写されるということである。

仮にこの叩き具 (JC-0925) を横位に右手に持ち、正立した土器に対して横方向から叩くと仮定した場合、叩き具の刻み目は正面から見て右下がり (R) であるものの、実際に土器の外面上には左下がり (L) の叩き目が付く (図 5-A)。また逆に、横位に持ったときに左下がり (L) の刻み目が施された叩き具で、正立した土器を横方向から叩くと仮定した場合、土器の外面上には右下がり (R) の叩き目が付くことになるのである (図 5-B)。

つまり、叩き具に刻まれた刻み目と、実際に土器の外面上に転写される叩き目とは、その傾斜の方向が左右逆転し、「原体と圧痕の逆転」(佐原 1981) とも言うべき現象が生じるのである。

このことはこれまであまり注意されてこなかったが¹⁴⁾、叩き技法を用いて作られた土器の具体的な製作工程や土器製作者の身

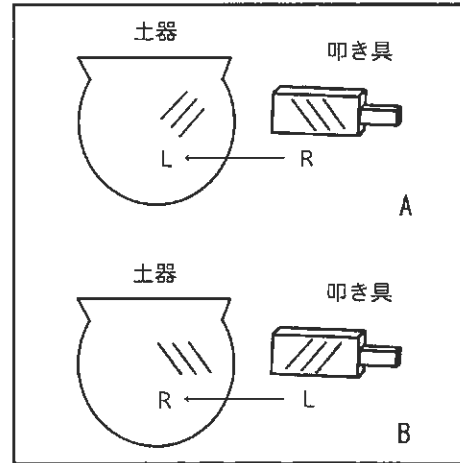


図 5 叩き具の刻み目と叩き目の関係

体技法などを考える際に重要な視点のひとつとなってくると思われるのでここで指摘しておきたい。

(3) 叩き具 JC-0924 と JC-0925 の比較・検討

叩き具 JC-0924 と JC-0925 は、一見するとどちらも同じような叩き具に見えるが、資料を具に観察した結果、この両者にはいくつかの点で大きな差異があることに気づいた。

そこでここでは、JC-0924 と JC-0925 を取り上げて比較・検討し、考察を加えることとする。まず最初に、今一度それぞれの叩き具の特徴を整理しておこう。

JC-0924 の特徴として、①刻み目部の中央付近に顕著な磨耗痕が確認できる、②その部分の刻み目は磨り消されてしまっていてすでない、③刻み目部の湾曲度合いがごくわずかな程度である、ということが挙げられる。

一方、JC-0925 の特徴としては、①刻み目部はその中央付近を中心として深く窪んでいる、②その部分にも刻み目が入れられ

ている（残されている）、③刻み目部の湾曲度合いが非常に大きい、という点が挙げられる。

同じような叩き具でありながら、両者に見られるこのような差異は一体何を意味しているのであろうか。ここではこの問題に対し、「叩き具と土器外面との接点」という視点を切り口として考えてみたい。

叩き具と土器外面との接点という視点から考えてみると、JC-0924 はその刻み目部の中央付近に顕著な磨耗痕を確認できることから、この叩き具はこの磨耗痕付近で当て具を受け、土器外面を叩いたものと考えることができる。つまり、この磨耗痕付近が叩き具と土器外面との接点となっていたと考えられる。

しかし問題は JC-0925 である。JC-0925 には JC-0924 のように特定の箇所に顕著な磨耗痕は見られず、刻み目部はその中央付近を中心として全体的に深く凹状に窪んでいるのである。これらのことから、JC-0925 は、その刻み目部のほぼ全体が土器表面との接点となっていたと考えることができる。

より具体的に示してみよう。例えば、任意にある土器 A というものを想定し、これらの両者の叩き具で土器 A の外面を叩くと想定した場合、JC-0924 と JC-0925 ではその刻み目部の湾曲度合いが大きく異なっているために、その刻み目部と土器 A の外面とが接する部分の大きさもそれぞれ異なってくるであろうということである。

つまり、JC-0924 は、その刻み目部の湾曲度合いがごくわずかであり、しかも刻み目部の一部に顕著な磨耗痕が見られることから、この磨耗部付近のごく周辺のみが接点となって土器 A の表面と接するものと想

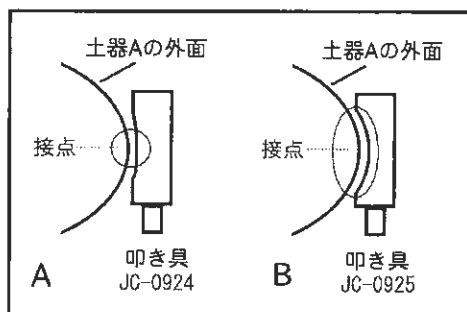


図6 叩き具と土器外面の接点（概念図）

定され（図6-A）、また逆に JC-0925 は、その刻み目部が全体的に深く凹状に湾曲しており、特定の箇所に磨耗痕のようなものは確認できないことから、刻み目部が全体的に土器 A の表面と接するものと想定されるのである（図6-B）。

では、この両者に想定される叩き具と土器外面との接点の違いといった問題は一体何を意味するのであろうか。

Scheans (Scheans 1966) は、土器の側壁を作る行為と、側壁を一定の形にする行為とを区別し、それぞれを *buildings* (成形) と *shaping* (整形) という語を用いて使い分け、また、都出も「成形としてのタタキ」と「整形としてのタタキ」という言葉を使ってそれぞれを区別している（都出 1974、1986）。

仮にこの概念を援用するならば、上記で挙げた問題にひとつの説明を加えることができる。すなわち、JC-0924 は成形 (*buildings*) に、JC-0925 は整形 (*shaping*) に用いられたのではないかと推測である。

なぜなら、仮にそのように類推するならば、JC-0925 の刻み目部が全体的に凹状に深く湾曲しているという特徴は、それは整形 (*shaping*) という、作られる土器の形が

ある程度すでに整っている段階における叩きに用いられたため、あたかも土器の外表面の湾曲度合いと同じような深く凹状に窪んだ湾曲を有していると考えることができる。また、刻み目が打面部に磨耗せずに残っている（または、あえて残している）という点に関しても、整形（shaping）という工程においては、相対的にそれほど強い叩きは必要がないため、刻み目が打面部に磨耗せずに残っていると考えることができ、あるいはまた、最終的に土器外表面に叩き目をつけたいという考えのもと、意図的に刻み目を残してあると解することもできる¹⁵⁾。

また逆に、JC-0924 が成形（buildings）に用いられたものと類推するならば、JC-0924 の特徴である刻み目部の中央付近に見られる激しい磨耗は、土器作りの工程において相対的に激しい叩きを必要とする成形工程において生じたものであるとして捉えることができる。また、刻み目部がごくわずかな程度にしか湾曲していないことは、この叩き具を用いて叩いた対象がそれほど湾曲していないもの、つまり「素形（一次原型）」的なものであったと解することができるように思われる。

以上の考察から、JC-0924 と JC-0925 はその形態的な差異からして、成形（buildings）と整形（shaping）というそれぞれ異なった工程において用いられた叩き具である可能性が高いと推察される。

（4）叩き具と土器の外表面との関係性

前節で推察したように、仮にもし JC-0925 が土器の整形（shaping）に用いられたとするならば、ここから派生してもうひとつ興味深い知見が導き出される。

すなわちそれは、叩き具 JC-0925 を用いてある土器を整形（shaping）した場合、そのようにして作られた土器の外表面は、叩き具 JC-0925 の刻み目部に見られる凹状の湾曲度合いとその湾曲度合いを等しくするはずである、ということである。

敷衍するならば、整形（shaping）に用いられる叩き具に存在する凹状の湾曲は、その叩き具を用いて作られる土器外表面の湾曲度、つまりその土器の輪郭というものを規定することになる、ということである。

このことは、土器の規格性という問題を考えるうえで示唆的である。なぜなら、作られる土器の形をある程度決定付けるのは、ある形を作ろうとする土器製作者の「意思」だけでなく、それを作る際に用いられる「道具」によってもある程度の規定がなされると考えることができるからである。

時津裕子は、東北タイに位置するカム・オー村における叩き技法を用いた土器作りを観察した結果、土器製作者は「厳密な土器スタイルのカテゴリーと、プロトタイプに関する知識を有しており、それらを連続的な運動を通して表現するための、モーターハビットを体得している」と述べ、土器の規格化を土器製作者のモーターハビットにその要因を強く求めている（時津 2002）が、時津が重視する土器製作者のモーターハビットのほかに、叩き技法による土器作りにおいては、用いられる「道具そのもの」も、土器の規格性を生み出す要因のひとつになりえるのではないだろうか。

叩き技法を用いた土器作りにおける土器の規格性といった問題を考える際のひとつの重要な視点として、叩き具が作られる土器の形をある程度規定する可能性があること

いう問題を今後の課題としてここで提示しておきたい。

(5) 道具の製作という問題に対する視点の必要性

前節で、叩き具がそれを用いて作られる土器の形をある程度規定する可能性について論じたが、この問題に関連してもうひとつ議論しておきたい問題がある。

それは、これまで繰り返し強調してきた叩き具 JC-0925 の深い凹状の窪みに関してである。通常、叩き具に見られるこのような凹状の窪みは、繰り返しの叩きによって生じた磨耗によるものであると考えられている。しかし、JC-0925 に見られる凹状の窪みは、最も深い所で 0.8 cm ほどにもなり、果たして本当に磨耗という要因だけで木質の叩き具にそのような深い窪みが生じるものであろうか。大いに疑問である¹⁶⁾。

筆者はむしろ、この JC-0925 に見られる凹状の窪みは、この叩き具を製作する段階において、あらかじめ意図的にこのような窪みが施されていたものと考えたい。

これまでの民族誌的調査においては、土器作りの一連の工程に関する報告は詳細になされるものの、土器作りの前段階ともいえるべき、道具の製作という問題については看過されており、そのような問題意識にもとづいた報告はほとんどなされていない。

「いかなる道具があるか」という報告はなされるものの、その道具が「いかにして作られたか」という問題については関心がもたれていないのである。そのため、叩き具の製作がいかにしてなされ、そしてまた、その製作の段階でいかなる程度に加工が施されるものなのかといった問題に関しては、

民族誌的調査からはほとんど何も明らかになっていないのが現状である。

前節において指摘したように、叩き技法を用いた土器作りにおいては叩き具そのものが作られる土器の形をある程度規定する可能性があり、そのような意味に照らして考えてみた場合、土器製作者が道具の製作の段階であらかじめ叩き具に凹状の窪みを施しておくということがあるならば、土器製作者は道具の製作という段階において、すでに作ろうとする土器の形を頭の中に思い描いているということになる。

このことは、土器作りにおける土器製作者の認知活動という問題に照らして考えてみた場合、実際に土器を作るという段階よりもはるか以前の道具の製作という段階において、すでに土器製作者には作ろうとする土器に関しての何らかの認知が存在しているものと想定でき、実に興味深い問題となってくる。

また、土器製作者がその製作の段階においてあらかじめ JC-0925 に深い凹状の窪みを施していたとするならば、土器製作者はその叩き具を整形 (shaping) という工程で用いることをあらかじめ想定し、そのような工程に適した特徴的な加工を施していたと考えることができる。そのように考えた場合、土器製作者はすでに明確な意図を持ってそれぞれの道具を作り分けしているということになる。

このように、叩き技法を用いた土器作りにおいて、道具の製作という視点から考えてみると、非常に興味深い問題が提起される。このような意味において、今後の叩き技法に関する研究においては、土器作り以前の段階である道具の製作という問題に

も着目していく必要があるように思われる。

6. おわりに

本稿では、当博物館に所蔵・展示されている Lawa 族の叩き技法を用いた土器作りに関連する資料の紹介をその旨とし、若干の考察を加えた。

そのなかで、①モダマが当て具として用いられた可能性、②叩き具の刻み目と土器上に現れる叩き目の逆転現象、③叩き技法においては道具が土器の規格性を生み出す要因のひとつと成り得る可能性、④道具の製作という問題に対する視点の必要性、などを指摘した。

実際に本稿で紹介した資料を用いた Lawa 族の土器作りを観察したわけではないため、資料の観察を通して得られた知見はあくまで仮説作業的なものと言わざるを得ない。ただ、資料を具に観察でき、実際に自分の手で触れることが可能な博物館資料ならではの利点を活かして許されるうる限りでさまざまな試行を行い、考察を行った次第である。

先にも述べたとおり、叩き技法の研究は、東アジア・東南アジア一帯における歴史の復原という問題に対して、「技術」という大きな柱から、通時的あるいは通文化的に迫ることができる大きな可能性を秘めている。

そのような意味において、本稿で紹介した資料は叩き技法研究におけるひとつのデータとなり得るであろうし、また、考察によって提示されたいくつかの問題点は今後の叩き技法研究の「叩き台」となることを願いたい。

謝辞

最後に、南山大学人類学博物館所蔵資料を観察し、紹介するという貴重な機会を与えてくださった南山大学人文学部教授大塚達朗先生、南山大学人文学部助教授黒沢浩先生にこの場を借りて感謝致します。また、叩き具の実測図を作成してくれた南山大学人文学部学部生中里信之氏にもこの場を借りて感謝致します。

註

- 1) 叩き技法の存在は、叩き目の有無だけではなく、土器断面の粒子構造の流れにより判断すべきであるという見解もある（高橋 1988）。
- 2) 橋口達也によれば、北部九州における弥生時代前期の甕棺に、すでに叩き技法の存在が確認できるという（橋口 1982）。
- 3) 弥生土器・古式土師器の叩き技法に関連するそのほかの主な研究として以下のようなものがある（年代順、頁数は省略）。関川尚功 1976「畿内地方の古式土師器」『纏向』桜井市教育委員会。米田文孝 1982「弥生後期型甕から布留式型甕へ—製作技法の変遷を中心として—」『ヒストリア』第 97 号、大阪歴史学会。都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論集。寺西薫 1986「畿内の古式土師器をめぐる二・三の問題」『矢部遺跡 国道 24 号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告 2』奈良県立橿原考古学研究所。西弘海 1986「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社。平尾政幸 1996「畿内の土師器甕の製作技

- 法」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4 煮沸具』古代の土器研究会。小林正史 2001「弥生土器のタタキ技法—タタキによる原型の変形度を中心に」『北陸古代土器研究 9 須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究会。など。
- 4) 須恵器の叩き技法に関連するそのほかの主な研究として以下のようなものがある(年代順、頁数は省略)。田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』Ⅰ、平安学園教育研究会。中村浩ほか 1976『陶邑』Ⅰ、財団法人大阪府文化財センター。中村浩ほか 1977『陶邑』Ⅱ、財団法人大阪府文化財センター。中村浩ほか 1978『陶邑』Ⅲ、財団法人大阪府文化財センター。白井克也 1996「須恵器甕の叩き出し丸底技法と在来土器伝統—福岡市・比恵遺跡第 51 次調査成果からみた工房の風景」『古文化談叢』第 36 集。望月清司 1999「林タカヤマ窯の須恵器貯蔵具製作痕跡—7 世紀前半の須恵器貯蔵具製作技術復元予察」『林タカヤマ窯』小松市教育委員会。柿田祐司 2001「須恵器の叩き目から」『北陸古代土器研究 9 須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究会。望月清司 2001「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」『北陸古代土器研究 9 須恵器貯蔵具を考えるⅡ つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究会。など。
- 5) 中国古代の土器作りについて論じた西江清高は、俞偉超(俞 1987)や牟永抗(牟 1989)らによってその存在が指摘され、現在中国最古の成形法として知られる「粘土片貼り合わせ法」が、「叩きによる器面調整と不可分に結びついていた」と指摘し、この技法は本来的に中国の南方諸地域に顕著であった可能性が高いと推測している(西江 1995)。
- 6) 当博物館には、「調査団」が第二次調査時に作成したものと思われる『第二次タイ国調査標本台帳』も保管されており、そこには資料の収集者・収集番号・収集年月日・素材・数量・収集場所・製作地・使用民族・現地名称・使用法など、収集した資料に関する基礎データが記載されている。しかし、上記で列記したようなデータが詳細に記載されている資料もあれば、逆にほとんど未記載のものも多い。本稿で紹介する土器作り関連資料も、収集した年月日と Lawa 族から収集した資料であるという情報以外はほとんど未記載で不明である。
- 7) 白鳥芳郎編『東南アジア山地民族誌』(講談社 1978 年)によれば、当資料が収集された 1972 年 1 月 12 日付近の「調査団」の行動に関して、「1972 1/6～1/13 Chiangmai 州、Ban Mae Tho の黒苗村を調査、その間 Ban Daeng、Ban Yaek (Om Pai Noi) などの Lawa 族の“壺造り村”に入る。」との記載がある。ただし、註 6 で挙げた『標本台帳』などを見ると、村から村への移動の間などにも断続的に資料の収集を行っていたようであり、今回紹介する資料が具体的に何という村に住む Lawa 族から収集したものなのかは分からない。
- 8) 小林正史は、叩き技法が稲作文化圏という環境に適した土器作り技法なのではないかという想定をしているが(小林 1993)、本稿で紹介する叩き技法に関連

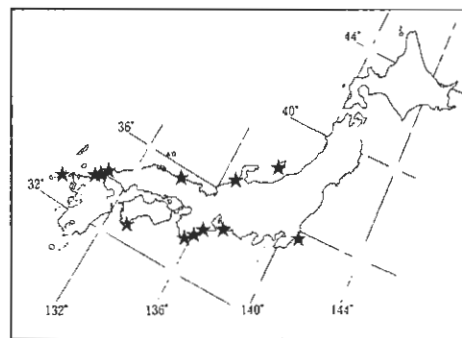
する土器作り資料も、稲作を主な生業とする Lawa 族から収集したものであり、氏の論点に立つならば、注目されるどころである。

- 9) 叩き具に刻まれた刻み目に関しては、叩きを行う際に叩き具が土器の外表面から剥離しやすいように付けられたとする見解(量 1973、金子 1989)がある。しかし一方で、叩きを行う際には叩き具と当て具に必ず水をつけながら使うため、粘土が道具にひっつくことはないとして、そのような解釈に疑問を呈する見解もある(角林 1977、瀬川 1983)。そのほかに、叩きを行う際、土器表面の粘土が横に逃げるのを防ぎ、叩き締め効果を高めるための工夫と解する見解(横山 1980)もある。
- 10) タイ北部のセンサイ村における土器作りを観察した量博満は、叩き具は使用目的からすると二種類に分けられるとし、この JC-0926 のように薄手で細長のタイプの叩き具に関して、「おもに口縁部を作ることに用いるもの」としている。また、具体的な口縁部の作り方に関して「拍子の側縁を内壁側に当てて(左手は外壁側に当てる)、それを外に向けて倒すようにして製作者が一気に土器を一周すると、『く』の字状に外折した口縁部が出来上がる」と報告している(量 1973)。JC-0926 の側縁部に見られる磨耗痕は、あるいはそのような使用と関係があるのかもしれない。また楊原が観察し報告した雲南省元謀件紅村の漢族による土器作りでも、細長い叩き具は口縁部の成形に用いられるとの報告があり(楊 1986)、JC-0926 は口縁部を作るという工程にお

いて特徴的に用いられた可能性が高いことがうかがえる。

- 11) 『基本台帳』にはこれらの資料に関して「土器作り資料」という記載があるのみで、具体的な用途については記載されていない。
- 12) モダマは、日本でも千葉・新潟以西の沿岸にしばしば漂着する(下図)。もし想像を膨らませるならば、日本における叩き技法にも当て具としてモダマが使われた可能性もあるかもしれない。都出比呂志は、弥生土器の内面に「径 3 cm ぐらいの皿状の窪みが内面のあちこちに認められる」と指摘しているが(都出 1986)、気になるところである。

また、島国である日本ではあるが、モダマが遥か南方から海流によって運ばれ漂着するという事実を改めて確認したとき、そこには逆により広い範囲の地域と結びつけられる「島国日本」の姿が見えてこよう。モダマはそのことを示唆しているようにも思われる。



日本におけるモダマの漂着地点

(中西 1999 より 一部改変)

- 13) 叩き技法に関連した実験的手法を用いた研究として、柿田祐司の研究が挙げられる。柿田は叩き具に刻まれている紋様の差異によって、叩かれる粘土の伸び具合

やその方向性が異なるのではないかという仮定にもとづいて実験を行った(柿田2003)。実験の結果、叩き具に刻まれた紋様の差異と叩き出しの効果には関連性が見られなかったという。しかしながら、本論でも述べた通り、「叩き」の実験を行う際には、さまざまな条件を設定し、それらを十分に実験に反映させながら実験を行なう必要があり、残念ながら柿田の実験もその問題点を越えてなされたものとは言い難い。仮説自体は非常に興味深いものだけに、さらなる研究の進展が期待される。

- 14) 弥生土器や須恵器などでは、叩き具に平行線紋や格子目紋を刻んだものが一般的に使われたとされており、そのためこのような斜めに刻み目が入られた叩き具に関してはあまり注意が払われていないものと考えられる。ただ、筆者が専門としている中国古代の土器には、斜め方向の刻み目を持った叩き具で作られたものと想定する土器が少なからず見受けられ、今回得られた知見は非常に参考になるものである。
- 15) 実際に、当博物館に所蔵されている Lawa 族から収集したものとされる土器には、外面に叩き目がそのまま明瞭に残されている。
- 16) 叩き具がどれほどの使用により、どのように磨耗していくのかといった問題は、これまでほとんど議論がなされていない。今後取り組んでいくべき重要な課題であろう。

引用・参考文献

- 青柳洋治・岡崎完樹 1981「土器の露天焼きルソン島の叩打法」『季刊民族学』第5巻第1号、53-57頁。
- 青柳洋治 1982「ルソン島北部における土器づくり—アトル村の一事例—」『黒潮の民族・文化・言語』88-104頁、角川書店。
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会。
- 井上和人 2003「古代土器製作技法考再説—近畿地方の瓦器碗・土師器杯類と丸底甕—」『文化財と歴史学』奈良文化財研究所、477-528頁。
- 今津啓子 1987「大阪湾沿岸地域出土の朝鮮系軟質土器」岡崎敬先生退官記念論集『東アジアの考古と歴史』下、101-126頁、同朋舎出版。
- 伊能嘉矩 1906「台湾土蕃の自然物利用」『東京人類学会雑誌』第242号、294-300頁。
- 今村啓爾 1989「東南アジアの土器」『アジアと土器の世界』145-172頁、雄山閣出版。
- 宇野文男 1974「バシー文化圏における土器づくり」『季刊人類学』第5号第1巻、126-148頁。
- 大西秀之 1998「土器製作者の誕生—カンカナイ社会における技術の伝習と実践—」『民族学研究』第62巻第4号、54-62頁。
- 柿田祐司 2003「須恵器甕の叩き目に関する一実験」『北陸古代土器研究』第10号、136-140頁。
- 郭鐘喆 1987「韓国慶尚道地域出土陶質土器甕の成形をめぐる一底部丸底化工程

- を中心に」『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』上、465-488 頁、同朋舎出版。
- 角林文雄 1977 「弥生式土器製作の問題点」『古代学研究』第 84 号、9-16 頁。
- 角林文雄 1978 「ニューギニア・マダン周辺の土器作りとその経済的機能の研究」『民族学研究』第 43 巻第 2 号、138-155 頁。
- 金子量重 1989 「暮らしの中の土器」『アジアと土器の世界』13-27 頁、雄山閣。
- 狩野忠雄 1941 「紅頭嶼ヤミ族の土器製作」『人類学雑誌』第 56 巻第 1 号、41-49 頁。
- 北野博司 1997 「土器作りの歴史」『月刊文化財』10 月号、46-51 頁。
- 京都大学東南アジア研究センター編 1997 『事典東南アジア：風土・生態・環境』弘文堂。
- 小林青樹 1998 「土器作りの専門製作と規格性に関する民族考古学的研究—フィリピンとタイの事例分析を中心に—」『民族考古学序説』122-138 頁、同成社。
- 小林正史 1993a 「カリंगा土器の製作技術」『北陸古代土器研究』第 3 号、74-103 頁。
- 小林正史 1993b 「稲作文化圏の伝統的土器作り技術」『古代文化』第 45 巻第 11 号、27-50 頁。
- 小林正史 2001 「弥生土器のタタキ技法—タタキによる原型の変形度を中心に—」『北陸古代土器研究』第 9 号、93-118 頁
- 小林正史 2003 「東南アジアの土器作り民族誌における工程間の結びつき」『立命館大学考古学論集Ⅲ』1043-1066 頁。
- 後藤明 1997 「実践的問題解決過程としての技術—東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作—」『国立民族学博物館研究報告』22 巻 1 号、125-187 頁。
- 後藤明 2001 『民族考古学』勉誠出版。
- 後藤明 2004 「『叩き』の意味—フィリピン・インドネシアにおける調査ノート」新潟県立博物館編『火炎土器の研究』243-247 頁、同成社。
- 後藤真里 2004 「ヤオ族の暮らし（1960 年代後半～70 年代） 上智大学西北タイ歴史・文化調査団移管資料について」『南山大学人類学博物館紀要』第 22 号、11-14 頁。
- 坂井隆 1984 「インドネシアにおける最近の土器作り調査例」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第 1 号、49-68 頁
- 佐竹義輔ほか編 1993 『日本の野生植物』平凡社
- 佐原真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第 58 巻第 2 号、30-64 頁。
- 佐原真 1976 「弥生土器」『日本の美術』通号 125 号、1-98 頁。
- 佐原真 1981 「特論 縄文施文法入門」『縄文土器大成 3 後期』162-167 頁、講談社。
- 佐原真 1986 「弥生土器の製作技術：粘土から焼きあげまで」『弥生文化の研究』第 3 巻 弥生土器 1、27-41 頁、雄山閣出版。
- 重松和男 2004 「上智大学からの移管の経緯と資料内容」『南山大学人類学博物館紀要』第 22 号、14-15 頁。
- 清水潤三 1959 「カンボジアにおける土器作りとその技術」『民族学研究』第 23 巻第 1・2 号、54-62 頁。

- 清水潤三 1963「カンボジアにおける土器製作法の一例」『考古学雑誌』第49巻第2号、75-76頁。
- 周達生 1979「中国タイ族の土器作り」『季刊民族学』第3巻第2号、74-79頁。
- 白鳥芳郎編 1975『徭人文書』講談社。
- 白鳥芳郎編 1978『東南アジア山地民族誌』講談社。
- 白鳥芳郎・竹村卓二 1970「上智大学西北タイ歴史・文化調査団の成果一略報一」『上智史学』第15号、129-132頁。
- 新谷忠彦編 1998『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社。
- 瀬川芳則 1983「土器作り」『古代日本の知恵と技術』朝日カルチャーブックス28、141-171頁、大阪書籍。
- 高島忠平 1975「土器の製作と技術」『古代史発掘』4、128-137頁。
- 高田一夫 1975「土器を焼く村：タイ北部バン・ハンケオ所見」『えとのす』4号、117-120頁。
- 高橋護 1988「弥生土器の製作に関する基礎的考察」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論集、125-140頁。
- 田中和彦 1998「ルソン島北部、カガヤン川中流域、サンタ・マリア町、キナガピアン村の土器作り」『環境情報研究』6、123-152頁。
- 津田武徳 1999「ミャンマー、マンダレー周辺の土器作り村とスモーキング・パイプ」『東南アジア考古学』第19号、115-136頁。
- 都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号、20-47頁
- 都出比呂志 1986「タタキ技法」『弥生文化の研究』第3巻 弥生土器1、42-51頁、雄山閣出版。
- 坪井正五郎 1906「諸人種の自然物利用」『東京人類学会雑誌』第239号、167-170頁。
- 寺井誠 2002「朝鮮半島南部における2種の格子タタキ」『大阪歴史博物館 研究紀要』第1号、31-39頁。
- 時津裕子 2002「東北タイにおける伝統的土器製作者の認知技能の特質解明に向けた総合的研究」『福岡発・アジア太平洋研究報告』11 アジア太平洋センター、135-146頁。
- 鳥居龍蔵 1897「東部台湾、阿眉種族の土器製造に就て」『東京人類学会雑誌』第135号、344-359頁。
- 鳥居龍蔵 1901「台湾阿里山蕃の土器作り」『東京人類学会雑誌』第178号、129-131頁。
- 中園聡・時津裕子 2004「(52) 現代東北タイにおける土器製作に関する総合的研究」『日本考古学協会第70回(2004年度)総会 研究発表要旨』日本考古学協会、221-224頁。
- 中塚発夫 1972「第二次上智大学西北タイ歴史文化調査団の成果一略報一」『上智史学』第19号、83-91頁。
- 中西弘樹 1990『海流の贈り物 漂着物の生態学』平凡社。
- 中村浩 1982「中部ジャワの土器作り」『大谷女子大学紀要』第17巻第1号、169-180頁。
- 植崎彰一ほか 1994「タイ北部の土器作り」『愛知県陶磁資料館研究紀要』13、2-15頁。
- 西江清高 1995「中国先史時代の土器作り」

- 『しにか』第6巻第7号、32-41頁。
- 西谷大 1991「海南島における土器づくり」
『国立歴史民俗博物館研究報告』31号、
29-43頁。
- 量博満 1973「タイ国北部における土器作り
について」『上智史学』18、7-32頁。
- 量博満 1988「北部タイの土器作り」『東南
アジア考古学会誌』第8号、44-45頁
- 橋口達也 1982「甕棺のタタキ痕」『森貞次
郎博士古稀記念古文化論集』上巻、
471-479頁。
- 深石隆司 2003『落ちて流れて旅するタネ』
大日本図書。
- 深澤芳樹 1995「タタキの民族誌」『みずほ』
15号、大和弥生文化の会、262-269頁。
- 深澤芳樹 1998「東海洋上の初期タタキ技
法」『一色青海遺跡 自然科学・考察
編』愛知県埋蔵文化財センター調査報
告書第79集、115-130頁。
- 深澤芳樹・李弘鍾 2004「松菊里式土器にお
けるタタキ技法の検討」『財団法人
大阪府文化財センター・日本民家集落
博物館・大阪府立弥生文化博物館・大
阪府立近つ飛鳥博物館 2002年度
共同研究成果報告書』財団法人大阪府
文化財センター、211-234頁
- 牧野富太郎 1990『牧野新日本植物図鑑』北
隆館。
- 横山浩一 1980「須恵器の叩き目」『史淵』
117号、127-150頁。
- 横山浩一 1982「佐賀県横枕における大甕の
成形技術—現存する叩き技法の調査—
」『九州文化史研究所紀要』第27号、
53-107頁。
- 横山浩一 2003『古代技術史攷』岩波書店。
- 吉田恵二 2002「雲南の土器作り」『国学院
大学考古資料館紀要』第18輯、263-274
頁。
- 脇田宗孝 1994「弥生残照 インドネシアの
土器づくり」『日本美術工芸』通号664
号、49-54頁。
- (中文)
- 汪寧生 1989「傣族原始製陶工芸」『民族考
古学論集』190-210頁、文物出版社。
- 傣族製陶工芸綜合考察小組 1977「記雲南景
洪傣族慢輪製陶工芸」『考古』第4期、
251-256頁。
- 張季 1959「西双版纳傣族的製陶技術」『考
古』第9期、488-490頁。
- 牟永抗 1989「关于我国新石器時代製陶技術
的若干問題」『考古学文化論集』2、1-9
頁。
- 俞偉超 1987「中国早期的“模製法”製陶
術」『文物与考古学論集』228-238頁、
文物出版社。
- 楊原 1986「雲南元謀紅告村的製陶工芸」
『考古』第12期、1133-1138頁。
- 李仰松 1958「雲南佤族製陶概況」『考古通
訊』第2期、32-40頁。
- 李仰松 1959「從佤族製陶探討古代陶器製作
上的幾個問題」『考古』第9期、250-254
頁。
- 李根蟠・盧勛 1984「雲南碧江景加車寨怒族
製陶業調查—兼談原始製陶業的幾個問
題」『中原文物』第4期、52-58頁。
- 李文傑 1996『中国古代製陶工芸研究』科学
出版社。
- 林声 1965「雲南傣族製陶術調查」『考古』
第12期、645-653頁。

(英文)

Scheans, Daniel J. 1966 A New View of
Philippine Pottery Manufacture.
*Southwestern Journal of
Anthropology* 22:pp.206-219.

Solheim, W.G. 1952 Oceanian Pottery M
anufacture. *Journal of East Asiati
c Studies* 1 (2) :pp.1-39.

Yasushi Kojo and Masako Marui 2000
Khmer Pottery Making in Chanlak
Dai, Southern Cambodia. *Anthropol
ogical Science* 108(1):pp.1-19.

(元南山大学人類学博物館臨時職員)



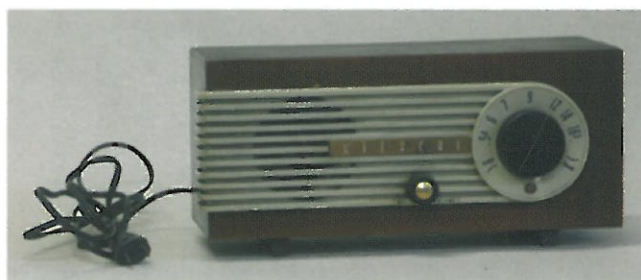
01 GRAWOR BERLIN製?
昭和5年初頭?
H:52.5cm、W:56.5cm、D:32.3cm



02 白山無線電機製 放送局型123号受信機
昭和17年
H:24.0cm、W:40.0cm、D:19.0cm



03 八欧無線製 昭和25~26年
H:27.0cm、W:47.0cm、D:21.0cm



04 日立製 H-202 昭和31年
H:14.5cm、W:30.0cm、D:12.0cm



05 松下電器産業製 EA-750
昭和32年 18,800円
H:35.5cm、W:54.0cm、D:20.0cm



06 SONY製 TR-813
昭和35年 13,900円
H:11.0cm、W:20.3cm、D:5.2cm



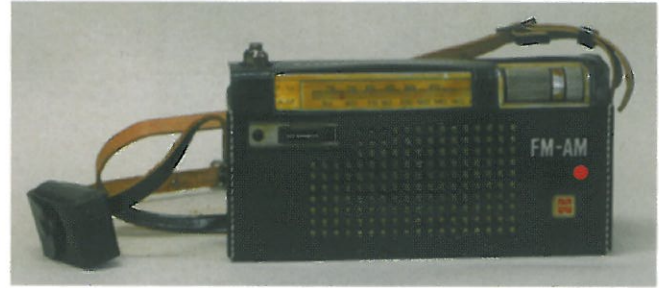
07 TR10製 昭和38年
H:11.5cm、W:19.5cm、D:12.0cm



08 東芝製 5YC-491「かなりやKS」
昭和38年 5,200円
H:12.8cm、W:30.5cm、D:11.2cm



01 TRIO製 AF-252 昭和38年 9,950円
H:17.0cm、W:31.5cm、D:14.5cm



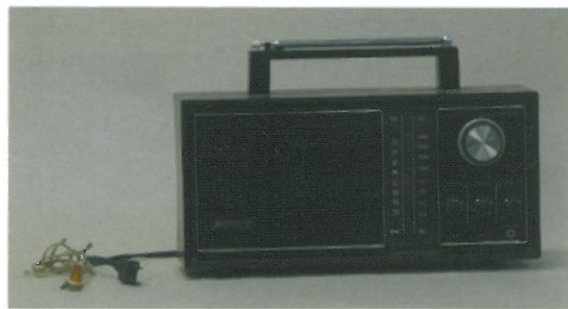
02 松下電器産業製 RF-800
昭和39年 11,800円
H:10.8cm、W:20.7cm、D:4.7cm



03 オンキヨー製 OS-195 昭和39年ごろ
H:13.0cm、W:34.0cm、D:12.3cm



04 SONY製 ICF-110B
昭和45年 14,800円
H:13.5cm、W:18.9cm、D:5.3cm



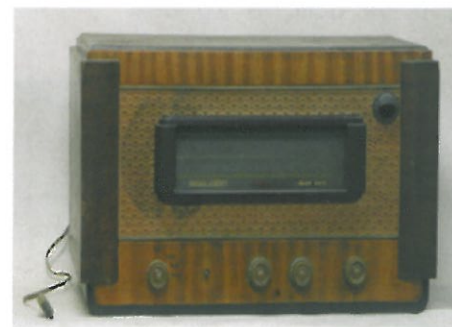
05 SONY製 TFM-9200
昭和46年 9,500円
H:15.6cm、W:31.0cm、D:8.5cm



06 三菱電機製 8X-534
昭和47年 7,200円
H:9.0cm、W:16.0cm、D:3.8cm



07 三洋電機製 RP8700
昭和50年 19,700円
H:20.5cm、W:25.5cm、D:9.0cm



08 自作のラジオ
昭和25年頃
H:32.0cm、W:57.3cm、D:28.1cm



01 TELEFUNKEN社製(旧西ドイツ)
H:38.5cm、W:67.5cm、D:28.0cm



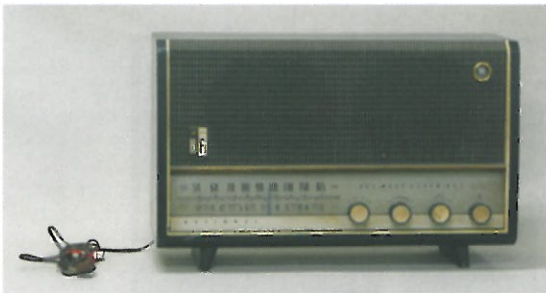
02 原口無線電機製 「キャラバン」
H:23.5cm、W:40.0cm、D:19.7cm



03 三菱電機製 5P-640
H:14.5cm、W:33.0cm、D:12.2cm



04 三菱電機製
H:17.0cm、W:32.5cm、D:13.0cm



05 松下電器産業製 AH-740
H:33.5cm、W:53.0cm、D:18.0cm



06 ラジオ聴取料領収証 昭和23年
H:7.4cm、W:5.7cm

新卒業生の皆様へ
なつかしの母校へ記念として
ビクターの
ラジオ・エレクトロラ
贈りましょう

原校教育用として物品税
免状の特典があります
詳細は特約店へ……

楽しい音
正しい音
ビクタートーン

1950年型
ビクターラジオ

01朝日新聞昭和25年2月11日(朝刊)

素晴らしい外観美と
優れた性能を盛つて

1950年型ナショナルラジオ
が出揃いました。ぜひ電器ラジ
オ店、百貨店で御高麗御試聴を
お待ちしております

5S-19型5球スーパー
正価19,300円
松下電器産業株式会社

ナショナル

02朝日新聞昭和25年2月12日(朝刊)

新卒業生の皆様へ
なつかしの母校へ記念として
ビクターの
ラジオ・エレクトロラを
贈りましょう

PTAの皆様へ!
1950年度の新決算には
何をいっても
文部省推薦の
ビクター
学校用音響装置を!

原校教育用として
物品税免状の
特典があります

詳細は各業所又は
特約店に御問合せ
下さい

ビクターラジオ 音響装置

03朝日新聞昭和25年2月19日(朝刊)

民間放送がはじまると
どうなる?

ビクターの誇る
オールウェーブスーパーなら
どんな遠隔な電波でも
どんな静寂にあつても
快よく届けてくれます……

美しい音/正しい音/
ビクタートーン

マジック・アイ付
七線兼機(マッド線使用)
7AW-1型
(¥24,000)

東京 豊島 板橋
三軒 三軒 三軒

ビクターラジオ

04朝日新聞昭和25年3月19日(朝刊)

実物を御覧に
なればキッ
ともう一台ほし
いとお思いにな
る程の出来ばえ
です。一見にし
かず、ともかく
御高麗御試聴を

1950年型
パーソナル5球スーパー
アースも不用の超小型ラジオ
正価 9,900円

ナショナル

05朝日新聞昭和25年6月13日(朝刊)

今からのラジオ

民間放送型
US-100L・US-200

民間放送開始に先立ちナショナル
が電器産業の調査と受託の増加
を反映してさらに改良した民間
放送型5球スーパーは、無線機とも
その収録されたプログラムとを別に
色紙から絶縁の音源を流れており
ますが、既に録音中の録りかけ材料
は、目をみて確認し、之に誤し
ひくことは今後の録音機能を不可
能ならしめますので、不審な
から十一月より価格を従来の八分
方に引き上げ、ラジオ界による文
化生活の向上に一層貢献したた
く致します。

US-100L 改訂正価
5球スーパー 7,900円

US-200 改訂正価
5球スーパー 8,500円

松下電器産業株式会社

06朝日新聞昭和25年10月1日(朝刊)

推奨のオンキョー

十人十色と書からよく申しますが、人の声も楽器の音色にしても、それぞれの特質というものがなくてはなりません。ラジオは聴いて楽しむもので、音がよく所謂本音の音が出るのでなければ面白くないと云えます。音質のラジオでは楽しめない音のオンキョーラジオには全く満足してあります。

日本電器商会
文部 豊田山崎少輔氏

ONKYO RADIO
ラジオ

新機種の特長
新機種の特長
新機種の特長

新機種の特長
新機種の特長

新機種の特長
新機種の特長

07朝日新聞昭和30年1月9日(朝刊)

先生のまそつくり...

鼓の音、ドラムの音、120% 風采な再生音

原音のスピーカー、特殊の広帯域インター
フェースの新技術の採用により、比類のない
音質を盛つてあります

よい音は
よいラジオで

ベストセルラジオ

名産デパート・ラジオ店で御覧下さい 八幡 三軒 三軒

6線スーパー
6B-21型 ¥16,800

6線スーパー
6B-22型 ¥16,800

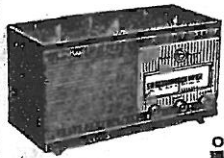
08朝日新聞昭和30年1月16日(朝刊)

言葉の交換

忙しいスケジュールより解放されて
はつと一息ついた時など、美しい音
楽を聴きながらグラスをたたむける
楽しさ……音楽会に出掛けるチャン
スには仲々ゆめなれぬ僕は、オンキ
ョーラジオを聴いて心の隙としてい
ます。生の演奏を聴いているような
素晴らしい音質で、ラジオ特有のあの
不愉快な音が全然ないのが一番気に入
り入っている。



映画俳優 三船敏郎氏



特許ノブレスコープ
8時スピーカー使用
6球マジックアイ付スーパー
OS-34
現金正価 ¥16,200



オンキョーラジオ

大阪音響株式会社

01朝日新聞昭和30年1月16日(朝刊)




音のよい 百万人のスーパー

マジックアイ付
新型六球スーパー
R-617型 現金正価 ¥16,300

美しい音色、快明な分離、脱敏な感度
で全国の放送が聴しめる新製品

ビクター特約店又は
百貨店にて御試聴。
御用命下さい

VICTOR VICTOR ビクターラジオ

02朝日新聞昭和30年1月20日(夕刊)

オンキョーラジオ ラッキープレゼント 当籤発表

| 等賞 | 賞品 | 当籤番号 |
|-----|--|------------------------------|
| 特賞 | 東芝電化器具職人八景セット 電気洗濯機・ミキサー・高圧洗浄機 ストーブ・電気掃除機 トースター・自動電気アイロン 電気炊飯器 | 6組 0018 |
| 1等賞 | 東芝電化器具職人高圧洗浄機 カメラ(35mm口径2.8) | 2組 0410 |
| 2等賞 | 18K金人形時計・自動巻紳士用時計・東芝(ニキサー・ラジカメ)内一点 | 4組(下二組) 68 |
| 3等賞 | キヤロ10ヤール・高級紳士洋傘・高級化粧ケース・東芝アイロン・プロードカミソリセット | 5組(末組) 9 |
| 4等賞 | ナイロンカーペット | 2組、4組、8組(末組) 4 5組、10組、13組 |

賞品引換方法
御当座の方は抽籤後に住所、氏名、御希望賞品名を御記入の上、下記宛にお送り下さい。
大阪市都島区内
大阪音響株式会社ラッキープレゼント課
引換期間 昭和30年2月より 昭和30年3月末日迄

オンキョーラジオ

大阪音響株式会社

03朝日新聞昭和30年1月23日(朝刊)



よい子にごほうび!

5月5日
子どもの日に...

お菓子の国 明治製菓から

スイートプレゼント

景品 抽籤によりおとしあげます (抽籤は一口単位)

| | | |
|----|--|---------|
| 1等 | 絵画(椅子及電気スタンド付)・写真機(マートン・ロイヤル・カメラ)・自転車(45cc)・ロマンライク電卓 | 100本 |
| 2等 | 精工製時計・家庭用すべり台・アイリス電卓機 フランス人形・地球儀 | 500本 |
| 3等 | パドミントンセット・ドッチボール・絵巻セット 三輪車・グロブアライズミット | 4,000本 |
| 4等 | 明治製菓1ダース輸入(トランプ特製) | 30,000本 |

●お切 4月10日 ●抽選 5月5日 ●発表 5月10日

応募の方法
明治キャラメル(20円箱)の外側又は明治チョコレート(20円箱)のレーベルを削いて裏面に1枚目に住所・氏名・希望品をのしきお寄せ下さい(1人1口でも応募できます)
●明治キャラメル10円箱は2枚で1口分とします
●明治チョコレート50円箱は1枚で3口分、100円箱は1枚で6口分とします
●別冊8円でキャラメル外箱20枚(20円箱)送れ直す

●(送り先)
〒 都府県区道町8の35B 明治製菓 東京工場
〒 山形県山形市 明治製菓 山形工場
〒 大阪府都島区 明治製菓 大阪工場
其の他販売所の明治製菓工場スイートプレゼント課




明治ミルクチョコレート

明治キャラメル

04朝日新聞昭和30年2月4日(朝刊)

音のよい/おのの2-10



マジックアイ付
六球スーパー
OS-34
現金正価 ¥16,200



ビクター

2月新譜

世界のマーク

5組77文庫(006 ¥8.80)

★白鳥の湖
★白雪姫
★灰姑娘
★シンデレラ
★白雪姫
★灰姑娘
★シンデレラ
★白雪姫
★灰姑娘
★シンデレラ

| | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 |
| ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 |
| ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 |
| ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 | ★ 山崎 洋子 歌謡曲 |

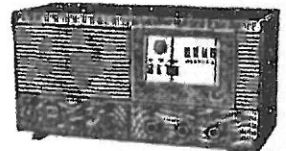
05朝日新聞昭和30年1月24日(夕刊)



音のよい！ 百万人のスーパー

ビクターラジオ

ビクターラジオの特長
★原音そのままを再生する素晴らしい音色
★鋭敏な感度と明快な分離で全国の放送が自由に楽しめます
★プレーヤーを接続すれば素晴らしい電音になります



マグック・アイ付
六球スーパー
R-017型 現金正価 15,800

この各種型番に
用意しております

01朝日新聞昭和30年2月6日(朝刊)

流行歌 世界のマーク E.P.盤 名曲

このは素晴らしい電音！

★原音そのままを再生する素晴らしい音色
★鋭敏な感度と明快な分離で全国の放送が自由に楽しめます
★プレーヤーを接続すれば素晴らしい電音になります

3月 新譜

ビクター

素晴らしい音色と音色で
世界の放送が聴ける！

新発売
第一、マグック・アイ付
七球スーパーオールウェーブ
R-117型 現金正価 22,000

★ビクター一歩前進電音は
従来の音質と音色を超越
してあります

02朝日新聞昭和30年2月22日(夕刊)

推奨のことは

何事でもそうだが真実を伝えるという事が重要だ。映画を撮るにしてもその真実を正しく表現するのでなくては、目的のある作品は出来ない。真実「音」の表現もハイファイの音源と立体的な音とが巧みに交わられている。オンキヨーラジオはこの点、真実を忠実に再現する高級ラジオとして、聴衆の賞賛と関心を博得しようとして居る。

おもしろ

OS-38
最新ノンブラスコーン
8増スピーカー
6増マグック・アイ付スーパー
マグック・アイ付
現金正価 15,800

大坂電機株式会社

オンキヨーラジオ

03朝日新聞昭和30年3月6日(朝刊)

若い人の間で...

ハンドバッグやカメラのように.....
最近ではオートマチックラジオは若い人や音楽ファンに新しい「アクセサリー」の一つです。音の印象、スピーク型、機能など、いつでも、どこでも楽しむことができるポータブルをあなたもごらん。

■ダブルスリットアンテナを使用
感度が2倍になり相対性も多いので、車中でもよく使えます
■イヤホンつき
プラグに直接つなげて、スピーカーとの切りかきが容易で、電圧の消耗も少なくて経済的です
■ハイ・ファイ増スピーカー
高音域を再生する際も高音を正確に表現する特殊な構造の増スピーカーの付いた状態で、美しいハイ・ファイサウンドが楽しめます
■サンヨー一級電機
P-R-2型 4球スーパー 増付式 3.5増スピーカー
イヤホンつき 正価 6,900円(増付式)
現金 7,400円(増付式)
(税込) 増付式: 増付式: 増付式: (増付式) 1,411円

サンヨーポータブルラジオ

三洋電機株式会社

04朝日新聞昭和30年3月29日(朝刊)

推奨のことは

音質がどうも良くなって、私もうるうるとしたラジオを取りかえてみました.....
今更そびつたりと気に入った美しい音で聞けるラジオを見つけ、ほんとうに嬉しく思います。これからはますますあはれスイッチをひねる事になりそうです。

最新ノンブラスコーン
最新ノンブラスコーン
8増スピーカー
6増マグック・アイ付スーパー
マグック・アイ付
現金正価 17,600

最新ノンブラスコーン
8増スピーカー
6増マグック・アイ付スーパー
マグック・アイ付
現金正価 15,800

オンキヨーラジオ

大坂電機株式会社

05朝日新聞昭和30年4月10日(朝刊)

三菱 こんな

すばらしい品質をもっています！

- アンテナなしでどこでも雑音なく楽しめます
- スマートなデザイン
- 小型スーパーで電音に切り換えられます
- ビルの中でも雑音の入らない小型スーパー

ラジオ

電音

電音

EX-68型 6球スーパー 15,600

UF-07型 6球スーパー 15,950

三菱ラジオ

当社提供 ラジオ放送「讀むとり」主催乙子信子
文化放送 毎水曜日 夜 8時30分より
当社は提供 テレビ放送「シルエットクイズ」
日本テレビ 毎金曜日 夜 7時30分より

三菱電機株式会社

06朝日新聞昭和30年4月26日(夕刊)

ラジオはハイ・ファイ時代です

47サイクルから16,000サイクルまで!
これだけ広い音が聴けるラジオは、ほかにありません

本格的 **ハイ・ファイ** ラジオ

新発売 ハイ・ファイスーパー「ラジオ」CF-740E
定価 **24,300円**

ラジオは **ナショナル**

松下電器産業株式会社

01朝日新聞昭和30年11月25日(朝刊)

650万に費用が立込む一級ラジオ

クリスマス
お正月の
お支度を!

お望みのままにポータブルから本格的ハイ・ファイラジオまで、自由にお選びいただけるナショナルラジオは、どれも性能は完璧にすぐれております

いまだにない最新のハイ・ファイラジオ
コンソール
CF-740E 定価 **17,900円**
送料に送料「CF-740E」定価 24,300円です。

ラジオは **ナショナル**

| | | |
|--|---|---|
| 4W-200型 定価 9,800円 (4チャンネル・8スピーカー) | 4W-200型 定価 8,900円 (4チャンネル・4スピーカー) | 3B-267型 定価 3,900円 (4チャンネル・6スピーカー) |
| 8L-280型 定価 14,300円 (4チャンネル・8スピーカー) | 6B-427型 定価 8,900円 (4チャンネル・6スピーカー) | 6B-427型 定価 6,300円 (4チャンネル・6スピーカー) |

松下電器産業株式会社

02朝日新聞昭和30年12月23日(夕刊)

7.5A-120型 定価 **19,900円**

最高級豪華ラジオ

7球超互換用スーパー
最近2つの感度調節
3つの音質調節
大型スピーカー付

マツダ
ラジオ

東京芝浦電気株式会社・東京商事株式会社

03朝日新聞昭和30年1月23日(朝刊)

NTVの電波にのせて...

30日夜 **9時15分**より

ナショナルの松下電器がおくる
芸術祭参加テレビドラマ

狐 と **竹曲吹き**

テレビ初出演の松本四郎・若尾文子を始め
歌舞伎・映画・新演劇のベテランが出演する
今昔物語より村をとつた美しきも恋しい恋情
をえがく四十五分間をこらえてください

作 北条秀司・宮城野 著 若尾文子 若尾文子 若尾文子

新テレビ工場で作られた新製品
トランスレス・システム
最新型 **14吋** **89,500円**

14吋 (標準巨画面) では、いちばん安いお値段です
しかも...こんなに高性能・高感度です
ワールド・ワイドに高感度・高感度したトランスレス方式です
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度

14吋 (標準巨画面) では、いちばん安いお値段です
しかも...こんなに高性能・高感度です
ワールド・ワイドに高感度・高感度したトランスレス方式です
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度
高感度・高感度の高感度・高感度の高感度・高感度の高感度

ラジオは **ハイ・ファイ** 時代 新発売

今までにないハイ・ファイラジオ
コンソール CF-740E
定価 **17,900円**
送料に送料「CF-740E」定価 24,300円です。

| | | |
|--|---|---|
| 4W-200型 定価 9,800円 (4チャンネル・8スピーカー) | 4W-200型 定価 8,900円 (4チャンネル・4スピーカー) | 3B-267型 定価 3,900円 (4チャンネル・6スピーカー) |
| 8L-280型 定価 14,300円 (4チャンネル・8スピーカー) | 6B-427型 定価 8,900円 (4チャンネル・6スピーカー) | 6B-427型 定価 6,300円 (4チャンネル・6スピーカー) |

松下電器産業株式会社

04朝日新聞昭和30年11月27日(朝刊)

新発売



SR-530

25mA管使用・交直両用・高周波増幅付・5球ホータブル

▶ **遂に完成** (高一付) **薄型5球!**
(220×150×80mm)

▶ フラットタイプにまとめられた瀟洒なデザインで、感度・分離がよく、携帯は至って軽快です

▶ 夜間・停電時に便利なフラツシュ・ライト装置

補助アンテナイヤホン付 至 12,800 (電池別)

カタログ進呈

スタンダード携帯ラジオ

スタンダード無線工業株式会社 本社→東京都渋谷区岡山町65

01朝日新聞昭和31年1月19日(夕刊)

さらなる新しい性能!



SR-530

(220×150×80mm)

高一付5球薄型

電池・電灯兼両用 25mA管使用 高周波増幅一段

▶ フラットタイプにまとめられたデザイン。感度・分離がすぐれ動作安定、高信頼性があります

▶ フラッシュ・ライト装置なので夜間・停電時に非常に便利です

補助アンテナイヤホン付 至 12,800 (電池別)

スタンダード携帯ラジオ

東京スタンダード無線工業株式会社 大 阪

02朝日新聞昭和31年2月10日(夕刊)

ハイファイ
2つのHi-Fiスピカ付
1台で4台分の働きをお楽しみ



(ハイファイ)
高級スーパー
R-604型 現金定価 **¥17,800**

ピクチャースピーカーを使用すればお仕事の部屋は台所でもおきまりのデパートで自由にお楽しみいただけます。リモートスイッチ付イヤホン

RS-10型 現金定価 **¥1,600**



最新型高性能!
ラジオに接続すれば
簡単に電報になりま
すスピード・プレーヤー
RP-305型 現金定価
プラスセット価格 至600 **¥5,800**

ピクチャー
ラジオ・プレーヤー

世界のマーク

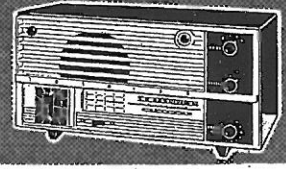
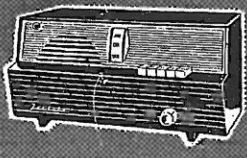
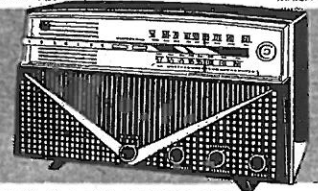
6.5Wスピーカ2個を備用しておきま
から大音量のスピーカに近づく音質
をお楽しみいただけます。ピクチャー
プレーヤーを接続すれば素晴らしいハイ
ファイになります。

お子さんの勉強時には
イヤホンでお楽しみにな
ります。別売でもおの
スイッチが自由に使えま
すリモートスイッチ付
イヤホン

ラジオに接続すれば
簡単に電報になりま
すスピード・プレーヤー
RP-305型 現金定価
プラスセット価格 至600 **¥5,800**

03朝日新聞昭和31年2月12日(朝刊)

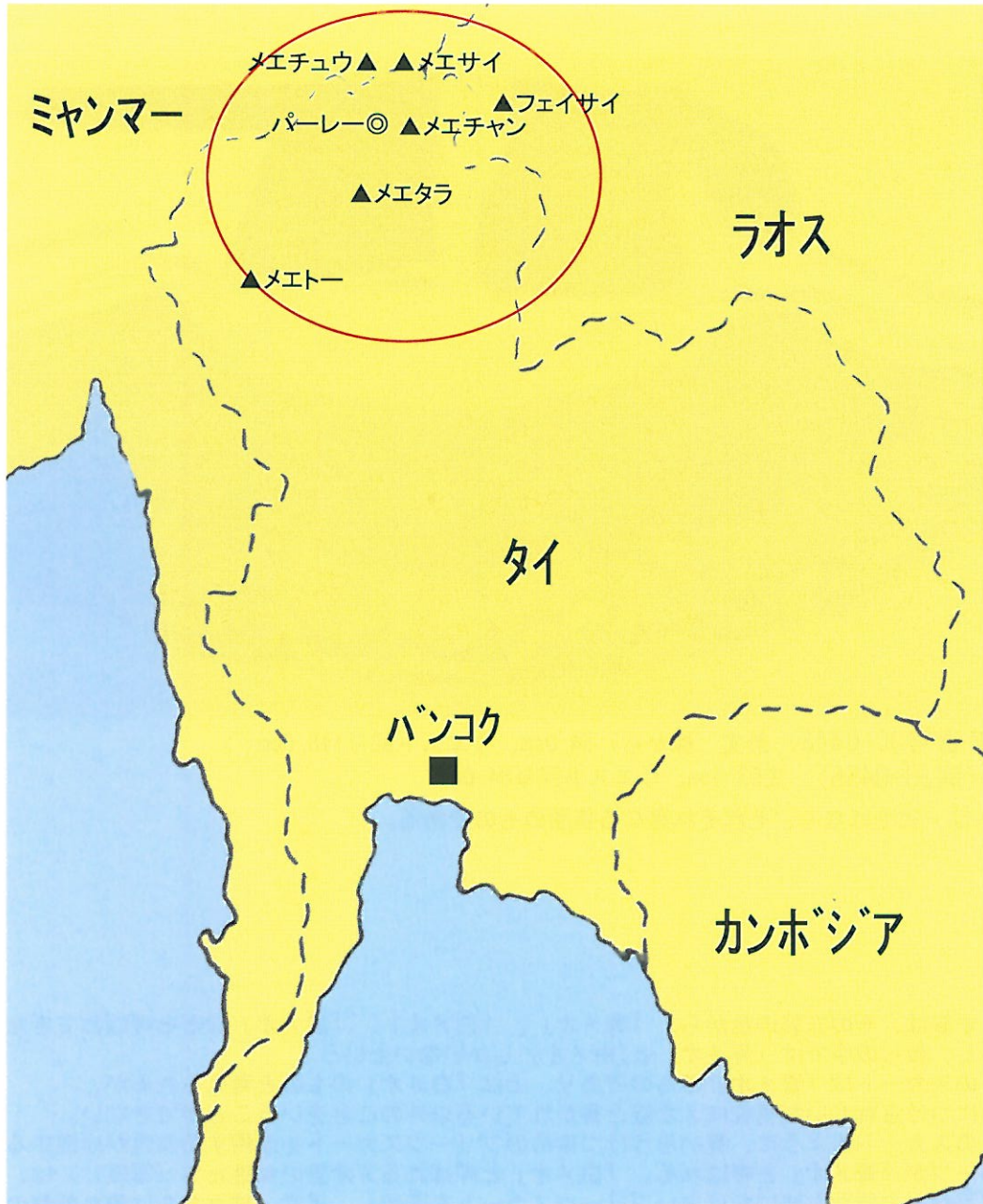
特長のある4つ……

| | |
|---|--|
|  <p>どこへでもはこべるスマートなハンドル付 かなりやE イヤホン用ジャックもついてい ますから 5球スーパー 一人でも静かに聞くこともできま す 8,600円 月賦定額 9,000円</p> |  <p>お楽みの時刻に自動的にスイッチが入る/ かつこうB タイムスイッチ付高級スーパーですから 音質のおききも申し分ないです 12,900円 月賦定額 14,700円 (マツダタイプ付)</p> |
|  <p>ボタンを押せばお楽みの放送がすぐきける ピアノラジオ 東芝独特のフッシュボタン方式の ピアノラジオ どなたにも簡単にできま す 9,950円 月賦定額 10,500円</p> |  <p>高感度 / しかも最高級のHIFI! めじろA レコードプレーヤーと組合せれば HIFI電器となります 19,900円 月賦定額 21,100円 (マツダタイプ付)</p> |

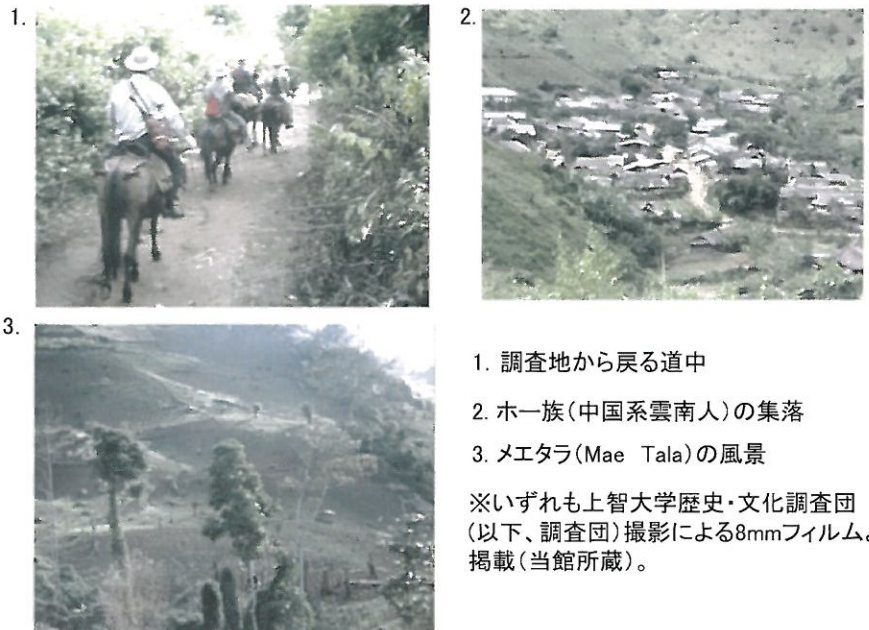
東芝のマツダラジオ Toshiba

東京芝浦無線工業株式会社・東京芝浦無線工業株式会社

04朝日新聞昭和31年2月16日(朝刊)



▲: 主な調査・収集地
 ◎: 集約的に調査を実施したヤオ族(前号にて紹介)の村の所在地。ホー族の資料の収集地でもある。



1. 調査地から戻る道中
 2. ホー族(中国系雲南人)の集落
 3. メエタラ(Mae Tala)の風景

※いずれも上智大学歴史・文化調査団(以下、調査団)撮影による8mmフィルムより掲載(当館所蔵)。

女性用衣装



上：上衣（資料番号JC-0448）着丈（襟から）54.0cm、ウエスト回り118.0cm

下：スカート（同JC-0455）丈53.5cm、ウエスト回り84.0cm

※上衣とスカートは一式ではなく、それぞれ異なる集団のものである。

メオ族は、その衣装の色から、「青メオ」、「白メオ」、「黒メオ」などと呼ばれてきた。しかし、彼らの中では「青メオ」と「白メオ」しかないという。

下のスカートは「青メオ」のものであり、上は「白メオ」のものと考えられるが、資料につけられていた荷札にメオ族と書かれている以外のことをいうことができない。

下のスカートのように、青いろうけつ染めのプリーツスカートを着用する女性が所属するグループが「青メオ」と呼ばれる。「白メオ」と呼ばれるメオ族の女性たち（写真1.）は、お正月などの特別な時にだけ白いプリーツスカートを着用し、通常、彼女たちは黒か藍色の袴を着用する。



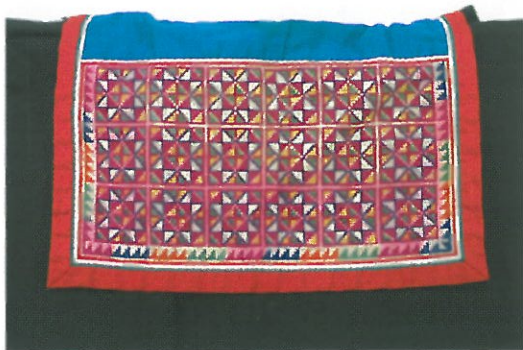
左から順に、1. 「白メオ」、2. 「白メオ」、3. 「白メオ」の女性たちである。同じメオ族でも衣装の形や色が違い、様々なグループがいることがみてとれる。

女性用衣装

JC-0448の背面



1.



1. 襟には多彩な刺繍が施されている。
刺繍の技法は、クロスステッチである。
襟：13.5cm×20.0cm

2.



2. 襟の裏。中には襟の裏に刺繍をするグループもいるという（柴村 1996：43頁）。

JC-0455



写真左：スカート下部の装飾
刺繍の技法はクロスステッチであり、
バイアステープのようなアップリケが
施されている。

写真右：スカート中間のろうけつ染め
×印の模様は、「メオの星」と言われ
ている。

装身具

1.



(上段) 左からJC-0130、JC-0114 (上)、JC-0115 (下)、JC-0125 (上)、JC-0126 (下)、JC-0119 (上) a、b、JC-0118 (下) 左からa、b、c
JC-0130 : 径16.0cm

(下段) 左からJC-0128、JC-0129

腕輪につける飾り (JC-0119a、b)



ペンダント 上段 : JC-0114、JC-0115
下段 : JC-0125、0126



1.



1. JC-126の裏面。
他の3点は裏面に模様等が彫られていない。

首輪 : JC-0128 (左)、JC-0129 (右)



2. この形の指輪は護身用の機能もあるという (カノミ : 1991)

2.



首輪 : JC-0130



指輪 (JC-0118a、b、c)



3.

3. ペンダントのトップは牛の鈴がそのモチーフとなっている (カノミ : 1991)。
2.、3. はいずれも調査団撮影による8mmフィルムの映像である。



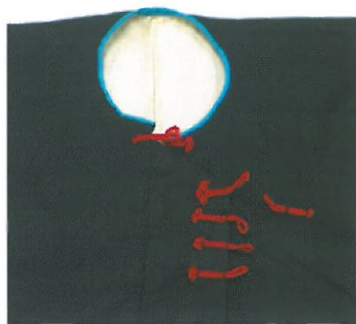
男性用衣装



上：上衣JC-0450
着丈（襟から）49.0cm
ウエスト回り96.0cm

下：袴JC-0451
丈89.0cm
ウエスト回り82.0cm

1.



2.



1. 首まわりは径10.0cm。

2. 裏地は各前身ごろの裾から13.5cm以上は表地と縫い合わせていない。

帽子：JC-0508 H14.0cm 径17.6cm



サイドクラウンには鋸歯文と花のような模様がクロスステッチで刺繍されており、クラウンには縫い目にそってチェーンステッチがかけられている。前号で紹介したヤオ族の帽子とデザイン・技法が似ている。

3.



3. パン・メオ・メエトー (Pan Meo Mae Tho) にて撮影。調査団撮影の8mmフィルムより。

帽子JC-0509 H15.4cm 径18.0cm



帽子：JC-0510 H11.6cm 径17.9cm



4.



4. フェイサイに住むメオ族の男性。同じメオ族でも腰に巻くベルトの色などそれぞれ違いがある。調査団撮影8mmフィルムより。メエトーとフェイサイの位置は図版14に記載。

農具



JC-0949 (左)、JC-1177 (中)、JC-0947 (右)

JC-0947 : L39.5cm、柄L27.7cm
身W4.6cm



1.

1. ケシの間引きをしている女性。
調査地はメエタラ (Mae Tala)。
調査団撮影の8mmフィルムより。



左：穂摘具

左から時計周りに

JC-0185、JC-0190、JC-0181

JC-0185: 11.9cm × 4.5cm、刃0.9cm × 3.3cm



左：芥子刀子

JC-1000 (上)

JC-1001 (中)

JC-1002 (下)

JC-1002 : L16.7cm、W3.5cm

右：芥子篋

JC-0993 (上)

JC-0998 (中)

JC-0997 (下)



2.



3.

2、3とも、ケシの収穫の様様。
花が咲いたあとに実るケシぼうずに2、3箇所芥子刀子で傷をつけ、翌朝ながれでた液を芥子篋で採る。
その液を煮詰めたものを売買した。

皿 : JC-0628 径26.7cm



JC-0628の裏



皿 : JC-0629 径23.6cm



JC-0629の裏



水筒 : JC-0758 H55.5cm
径9.2cm



蒸し器 : JC-0676 H47.2cm、径28.0cm

丸太をくりぬいた蒸し器については、調査団の報告（ヤオ族の蒸し器）に記述されていた（白鳥編 1978）。主食であるコメを蒸したり、蒸留酒を作るのに使用されている。中は写真の箆が落ちないように2本の棒状の板が十字状につけられている。



裁縫箱 : JC-1148



蓋H10.1cm W18.5cm
 身H10.0cm
 牙L5.6cm



刺繍をするメオの子供。
 調査団撮影の8mmフィルムより。

卦具（角製） : JC-0934



(上)
 L12.4cm
 W3.8cm

口琴（ケース付） : JC-3052



口琴
 L10.3cm
 W1.1cm

物入れ : JC-0195

L46.2cm W13.5cm



大櫛 : JC-1024（上）、JC-1023（下）



(下) L51.2cm W9.2cm



メオ族の家の屋根。
 調査団撮影の8mmフィルムより

パチンコ : JC-0878



パチンコ : JC-0877

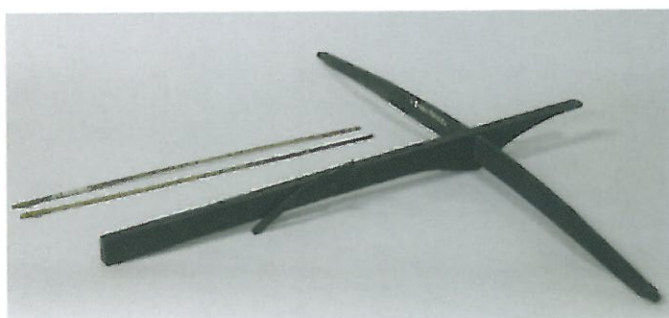


JC-0878
パチンコL11.4cm

JC-0877
パチンコL13.9cm

弩 : JC-0564

弦L77.0cm 台L71.5cm



籠 : JC-0598 H42.2cm 口径42.5cm



腰刀 : JC-1161



鞘L29.2cm W5.5cm
刀L39.1cm
刃W4.1cm L25.7cm

L83.0cm
W22.0cm

背負子 : JC-0689

JC-0689の荷を乗せる方



首鈴 (馬用) JC-1136



鈴L8.2cm
径6.4cm

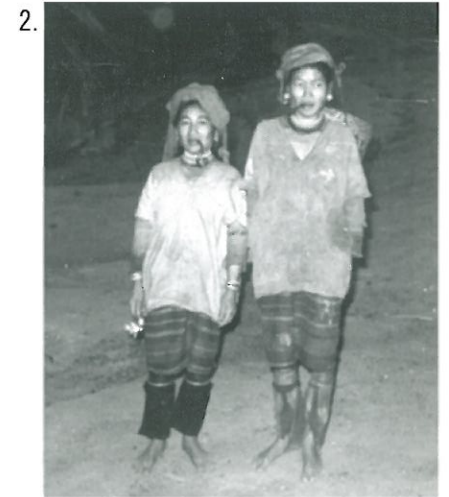
スカート（女性用）：JC-0375



丈66cm



1. 縫いしろの端の始末



2. ラワ族の女性。調査団撮影のスナップ写真。「Mae Tho奥のラワ村」と分類用の台紙に記載されている（当館蔵）。

装身具



左から、
ヘアピン：JC-0104、
耳飾：JC-0105（上）、JC-0106（中）、
JC-0107（下）
手首飾：JC-0101。

JC-0104：L21.4cm（右）

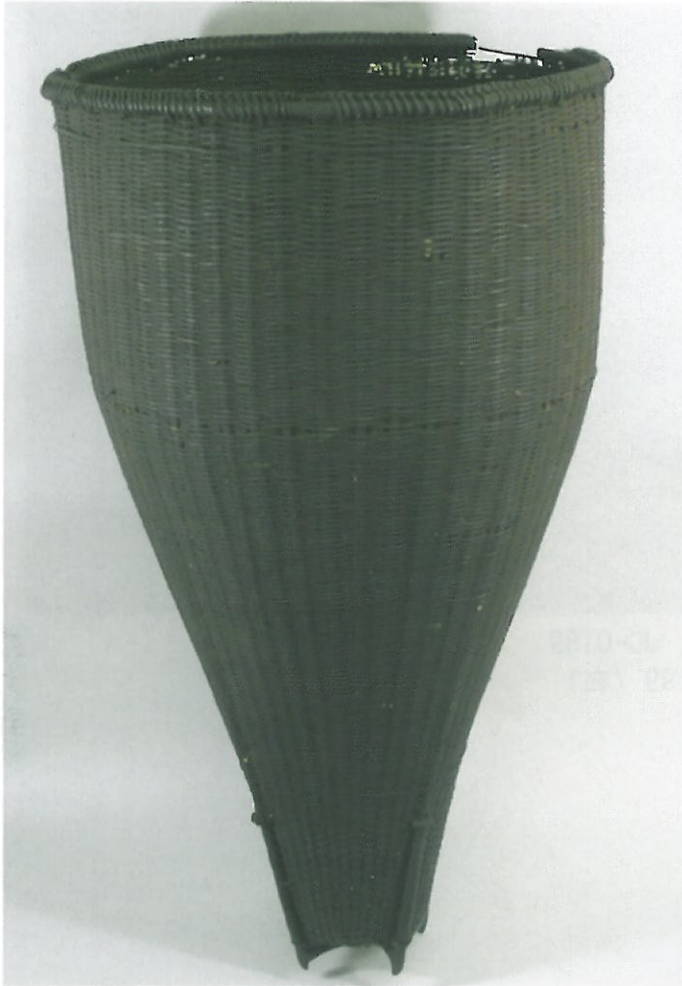
脚絆留



左：JC-0102、右：JC-0103

JC-0103：径9.5cm

長籠 : JC-0615 H76.5cm 口径40.0cm



左から、斧入れ : JC-0623、
鎌 : JC-1181、草刈鎌 : JC-0945



JC-1181 : L39.6cm W口径18.5cm

肩掛袋 : JC-0315 袋の部分L40.0cm W35.0cm



団扇 : JC-0646 L59.2cm 径40.0cm



背負子部分 : JC-1118 木部L30.5cm



煙管



上：左から煙管口（土製）JC-0187、JC-0188、JC-0189
 中：JC-0196（左）※一部のみJC-0196、JC-0199（右）
 下：JC-0174（左）、JC-0184（右）

JC-0187 : L5.3cm W6.9cm

煙管口（土製）

JC-0187、JC-0188、JC-0189



左がJC-0196



煙管：JC-0199
 管を差し込んで喫煙する。



JC-0199
 右の口に刻みタバコを入れ、
 左に管を差し込む。



笛柄：JC-3051 L10.5cm



1.



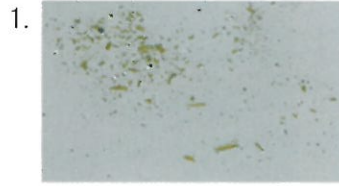
1. 正面からみたゾウの頭部。

JC-0011



H12.1cm 径12.7cm
口径6.2cm

1. JC-0011の中身



JC-0013



H21.6cm
径21.6cm
口径4.6cm

JC-18



H15.2cm
径14.0cm
口径5.4cm

JC-0004



JC-0023



H24.7cm
径15.8cm
口径4.5cm

H15.3cm
径12.3cm
口径5.2cm

JC-0032



H14.8cm 径19.0cm

JC-0926 (上)、JC-0924 (下)



JC-0926 : L28.4cm W3.4cm

首飾：JC-0127 L31.5cm



1.



2.



JC-0127の裏面



3.



4.



小児靴 : JC-0497 (左)、JC-0498 (右)

JC-0498 : L13.0cm



1. 村の様子。
調査団撮影の8mmフィルムより。

靴 : JC-0499

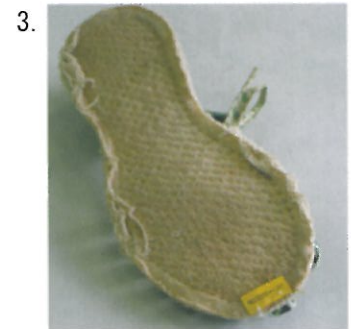
L23.5cm



2. ござを織る女性。調査団撮影による8mmフィルムより。

布草履 : JC-0503 (左)、JC-0502 (右)

JC-0503 : L26.0cm



3. JC-0503の裏。JC-0502も同じである。

藁草履 : JC-1016

L26.5cm



JC-1017

L26.5cm



団扇：JC-0957（左）、JC-0958（右） JC-0957：L41.6cm W32.0cm



馬面繫：JC-0936 L55.0cm



馬蹄鉄：
JC-1005（上：a、b、下：c、d）



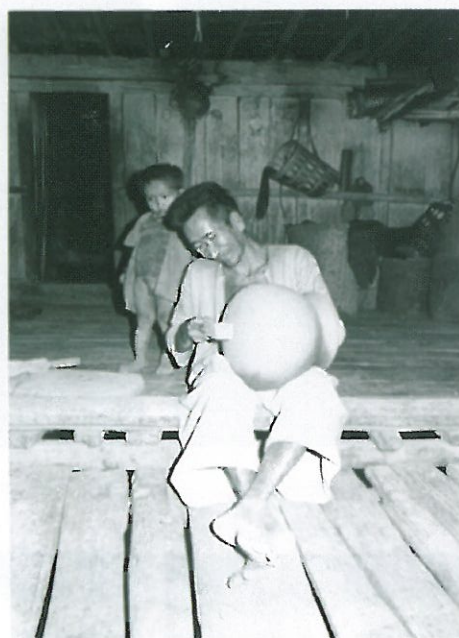
(a)
L10.8cm
W7.8cm



今から30年前のホ一族の子供たち。



1. 資料の収集地
(★印がChiangmai)



2. 叩き技法で土器作りを行うLawa族の男性
(当館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」スナップ写真より)



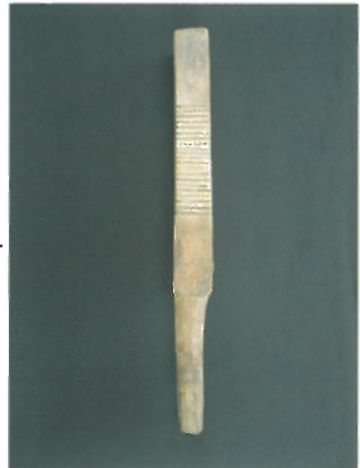
3. 叩き技法で土器作りを行うLawa族の男性
(当館所蔵「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」スナップ写真より)



1-1. JC-0924左侧面部



1-2. JC-0924正面部



1-3. JC-0924右侧面部



2-1. JC-0925左侧面部



2-2. JC-0925正面部



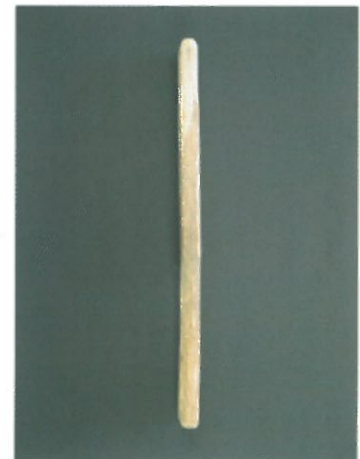
2-3. JC-0925右侧面部



3-1. JC-0926左侧面部



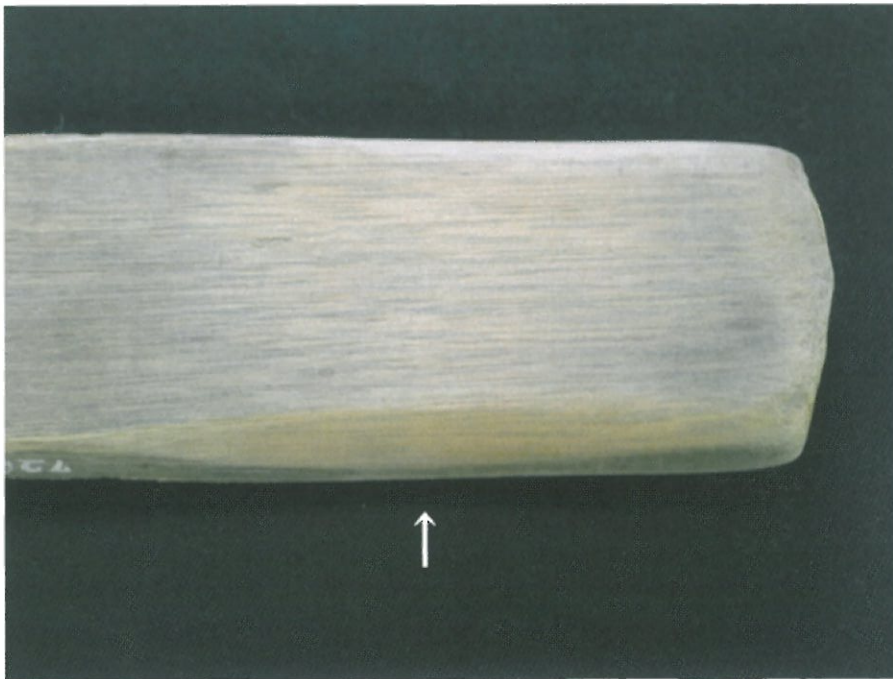
3-2. JC-0926正面部



3-3. JC-0926右侧面部



1. JC-0925の打面部に見られる窪み



2. JC-0926の打面部上方側縁に見られる磨耗痕



1-1. JC-0929a正面



1-2. JC-0929a侧面



2-1. JC-0929b正面



2-2. JC-0929b侧面



3-1. JC-0929c正面



3-2. JC-0929c侧面



1. モダマ (*Entada phaseoloides*)
(深石隆司2003『落ちて流れて旅するタネ』
大日本図書。より)



2. モダマの豆果
(佐竹義輔ほか編1993
『日本の野生植物』平凡社。より)



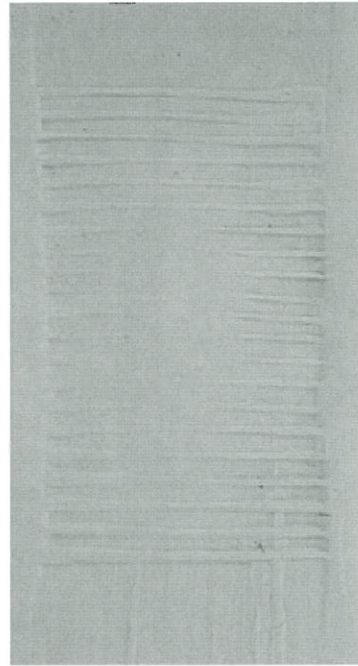
3. モダマの種子
(石川茂雄1994『原色日本植物種子写真図鑑』
石川茂男図鑑刊行委員会。より)



4. 叩き具 (JC-0925) と、当て具として用いられた可能性のあるモダマ (JC-0929a)



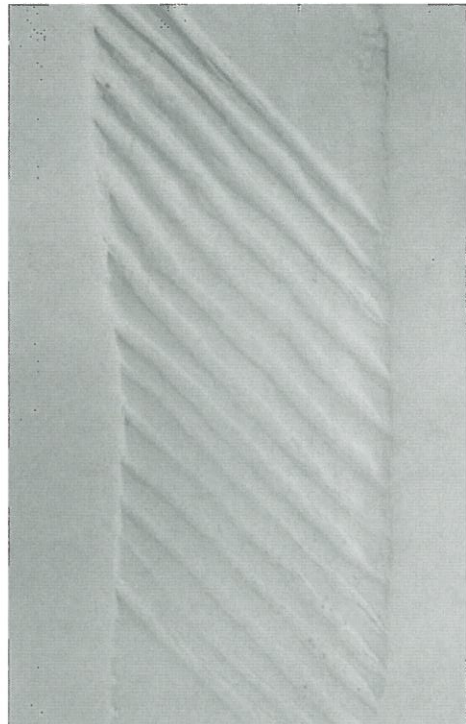
1-1. JC-0924の正面刻み目部



1-2. JC-0924の正面刻み目部を
粘土上に押し付けたもの



2-1. JC-0925の正面刻み目部



2-2. JC-0925の正面刻み目部を
粘土上に押し付けたもの

平成 17 年 3 月 18 日 印刷

平成 17 年 3 月 25 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 23 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

TEL 052 (832) 3111 内線 445

印刷 有限会社 オノウエ企画印刷

470-0155 愛知郡東郷町白鳥 1-3-1

TEL 0561 (38) 5619

E-mail info@onoue.com